

カールヒンリッヒカントラーの史研究

第三册

文
168
京大附図

注

注

序章

- (1) J. Irwin, *The Stūpa and the Cosmic Axis: the Archaeological Evidence*, South Asian Archaeology 1977, Naples, 1979, p. 799f.
- (2) W. C. Peppé, *The Piprahwa stūpa, containing relics of Buddha*, *JRAS*, 1898, p. 573f., B. P. Sinha and S. R. Roy, Vaiśālī Excavations 1958-1962, Patna, 1969.
- (3) 無憂王所建といふストウパーは日大唐西域記 卷一カーピシーの比羅娑洛山以東

にある。カーベシーにはこの一基、ナガラハローラに三基、カンダローラに五基、ラツデーヤーナに二基、タキシラに三基をかぞえる。

(4) A. Ghosh, Taxila (Sirkap) 1944-1945, Ancient India, No. 4 (1948) はマーシヤルの発掘したシルカプ市街を"王宮"から東へ市壁にかけてトレンチを入ル、地山の上には石積の市壁が建設されていふことを確認した。マーシヤルは石積の市壁でかこ

また市域の北門附近で、市壁の下にも二つの建築期があることを確認していた。ゴシユの発掘は市域の中央部、北門の南方であった。したがって、マーシヤルの入ったトレンチとゴシユの入ったトレンチとの間に、市壁をきづく以前のシルカプの古い町の南限があることになる。ゴシユは市壁を建設してから、市壁建設時代を含めて四つの建築期があることも確かめた。その時期を下からI

ⅠⅣ期とⅠ、市壁建設期であるⅠ期と紀
 元前一世紀中頃から紀元前後、ミ水から
 Ⅱ、Ⅲ、Ⅳとミ水ミ水五〇年単位で割り
 つけたのである。ミの手がかりには各期
 で出エーたクシヤーン貨を用いたが、こ
 れは、マーシヤルの年代観と大いに異な
 る。マーシヤルは市壁以後をやはり四期
 に区分し、最初期をアゼス一世紀の初
 期サカ時代、次を後期サカ時代、次をパ
 ルテイア時代とⅠ、最上層の時代を初期

1457

クシヤーンとⅠたのである。就中、下か
 ら三菱目のⅡ期へマーシヤルは上をⅠ、
 下をⅣとする。Ⅰを一世紀前半とⅠ、シル
 カツポのまっとも繁栄した時代と見た。
 この時期に六基のストウーパがある。ゴ
 ーシユの編年に當ると、Ⅲ期へ本文中
 では第三期と表現しておいた。Ⅱで、二世
 紀前半である。本文中でのべたように、
 ゴーシユの年代観はストウーパからみた
 年代観によく整合するので、筆者はゴ

1458

シニ 編年と一應信賴トイフ。

(5) J. Marshall, Taxila, Cambridge, 1951, Vol. I, pp. 142-145.

(6) J. Marshall, Taxila, p. 146.

(7) J. Marshall, Taxila, p. 163-165.

(8) J. Marshall, Taxila, p. 167

(9) J. Marshall, Taxila, p. 191-192.

(10) J. Marshall, Taxila, p. 173-174

(11) J. Marshall, Taxila, p. 236 f. 桑山正進「
タキシラ佛寺の伽藍構成」(『東方學報

『京都第四六冊、一九七四年』三三一
頁以下、並に挿圖を参照。

(12) 桑山正進『東方學報』『京都第四六冊』三
三二頁。

(13) D. Schlumberger et P. Bernard, Ai' Khanoum,
Bulletin de Correspondence Hellénique, tome
89 (1965), pp. 598 f., P. Bernard, Fouilles

d' Ai' Khanoum, I, Memoires de la Délégation
archéologique française en Afghanistan,

tome 21, pp. 18-25, pls. 21-28.

- (14) P. Bernard, MDFAA, tome 21, p. 25-49, p. 63-83.
- (15) P. Bernard, Chapiteaux corinthiens hellénistiques d'Asie Central découverts à Ai Khanoum, Syria, tome 45 (1968), p. 111-151.
- (16) P. Bernard, Quatrième campagne de fouilles à Ai Khanoum (Bactriane), Comptes Rendus d'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres (CRAI 以後略稱), 1969, p. 327-353, CRAI, 1970, p. 317-339, CRAI, 1971, p. 414-431.
- (17) CRAI, 1968, p. 272-276. CRAI, 1975, p. 189 f.

1461

- ギムナシオンゴドーリス式柱頭が出土したことを傳えている。
- (18) J.-C. Gardin, CRAI, 1971, p. 447f.
- (19) 詳しくは、桑山正進「柱礎と壺とヒンドゥー・グリュル（カスパース・デザイン）』一九六九年一月特集号）一九六一〇〇頁。
- (20) D. Schlumberger, The Excavation at Surkh Kotaj and the Problem of Hellenism in Bactria and India, The Proceedings of the British Academy,

1462

Vol. 47 (1961), p. 79-95, CRAI, 1953-1963,
 JA, 1952-1964, D. Schlumberger, M. Le Berre,
 G. Fussman, Surkh Kotal en Bactriane, I-Le
Temples: architecture, sculpture, inscriptions,
 MDFA, tome 25, Paris, 1983.

(21) I. T. Kruglikova, Dilbardjin (raskopi 1970-1971),
 Moskva, 1974, p. 16-82.

(22) 水野清一編 コドウニマン・テペとラルマ
 丘、京都、一九六八年、四五―四七頁。

(23) 水野清一編 コイヤカラク・テペ丘、京都、

一九七〇年、九七一―一〇一頁。

(24) B. Stavisky, Buddysky Kultoby tsentr Kara-Tepe
 v Starom Termeze 1965-1971, Moskva, 1972,
 Tab. I,

(25) G. A. Pugachenkova, Khalehayan, Tashkent, 1966,
 p. 132.

(26) A. Cunningham, Archaeological Survey of India
Report for the Years 1872-73, Vol. 5, Calcutta,
 1875, p. 70f.

(27) J. Marshall, Taxila, p. 222f.

(28) ナーガルジュンダでは放射壁の數とストウパー直径が正比例するとみられ、たゞ直径は多數が一メートル内外で、最大のものでも七メートルにすぎない。ハッサルカルは、構造林の節約が車輪状構造を採用させ、結局佛教理念の車輪と結びついてここで盛行したという。同心圓と放射壁との組み合わせをみると、タキシラやガンダーラより強くローマ技術の迹を考えることができよう。アリカマ

1465

ドゥ出土品や南インドにおけるローマ貨幣の出土を考えあわせ、より直接にローマ文化とかがわったあとが、ナーガルジュンダの建築にあらわれたいと解する。→ H. SARKAR, Some Aspects of the Buddhist Monuments at Nāgarjunakonda, Ancient India, No. 16 (1960), p. 98 f.

(29) D. S. Robertson, Greek and Roman Architecture, Cambridge, 1943, p. 265 - 266.

(30) R. G. Collingwood and I. Richmond, The Archae

1466

ology of Roman Britain, London, 1969, p.170f.

(31) カウニヤーインユーのゴニターラーマニフ
ニトハ' Indian Archaeology 1955-56 3' 1-
ジエキルのジীগアカームラガアナシク
ニトハ' Indian Archaeology 1954-55 3 2-10。

(32) D. R. Sahni, Archaeological Remains and Excavations at Bairat, Jaipur, 1937, S. Piggott, The Earliest Buddhist Shrines, Antiquity, Vol.17, No.65 (1943), p.1 f.

(33) 西インド石窟寺院の基本文献は J. Fergusson

1467

and J. Burgess, The Cave Temples of India, London, 1880 であるが、近年、編年表が
えた報告ニフが公刊された。V. Dehejia,

Early Buddhist Rock Temples, A Chronological

Study, London, 1972 又 S. Nagara ju, Buddhist

Architecture of Western India, Delhi, 1981 11

ある。一カー、兩者の年代観は、前期の
はじまりを前者が前一一〇年におき、前
二〇年あたりを終末とみよのに對し、後
者は前二五〇年から前五〇年に前期をわ

1468

りあて、はなはだしく異なっている。
 のちがいの原因のひとつは、後者が放射
 性炭素による年代決定を採用したこと
 ある。本論ではデヘジアに従った。

(34) パイラート、パウニー (S. B. Deo and J. P. Joshi,
Pauni Excavation 1969-70, Nagpur, 1972) を
 みる。

(35) 以下タキシラにおける佛寺の變遷につ
 いては、注(11)桑山正進論文を基にしてい

(36) J. Marshall, Taxila, Vol. I, p. 322f.

(37) R. Ch. Kak, Ancient Monuments of Kashmir,
 London, 1933, p. 146f.

(38) G. Tucci, Preliminary report on an archaeologi-
 cal survey in Swat, East and West, Vol. 9, No. 4
 (1958), p. 280.

第一章

(1) リトヴィンスキーは一九六八年のドゥーシヤンベにおける研究発表で、佛教が紀元前よりバクトリア、マルギアナに入ったことをごべている。点と一の佛教があつたことは否定できないが、佛教が廣範に信仰の対象となり、また教皇が研究されるごとき状態については大いに疑問である。詳しくは、B. A. Litvinsky,

Outline History of Buddhism in Central Asia,

1471

International Conference of the History, Archaeology and Culture of Central Asia in the Kushan Period, Dushanbe, 1968. B. A. Литвинский, Распространение буддизма в Средней Азии, Central Asia in the Kushan Period, Vol. II, Москва, 1975, pp. 191-197.

(2) 以下、大正五〇などとは、日大正新脩大藏經四卷五〇の省略である。三二三とあるのは頁、a b^cなどは頁の上、中下段をそれぞれ指す。

1472

(3) A. M. Simonetta, *The Chronology of the Gondo-pharean Dynasty, East and West*, Vol. 28, Nos. 1-4 (1978), pp. 155-188, B. Goldman, *Parthians at Gandhāra, East and West*, Vol. 28, Nos. 1-4 (1978), pp. 189-202.

(4) 高僧傳上卷四の冒頭に朱士行の傳記がある。朱士行、潁川人。……昔漢靈之時、竺佛朔譯出道行經。即小品之舊本也。文句簡略。意義未周。士行嘗於洛陽講道行經。覺文章隱質。諸未盡善。每歎曰。此

經大乘之要。而譯理不盡。誓志捐身。遠求大本。遂以魏甘露五年。發迹雍州。西渡流沙。既至于闐。果得梵書正本凡九十章。遺弟子不(弗)如檀。此言法饒。送經梵本。還歸洛陽。……遂得送至陳留倉恒水南寺。時河南居士竺叔蘭。本天竺人。父世避難。居于河南。蘭少好遊獵。後經暫死。備見業果。因改勵專精。深崇正法。博究衆音。善於梵漢之語。又有無羅叉比丘。西域道士。稽古多學。乃手執梵本。

叔蘭譯爲晋文。稱爲放光波若。皮牒故本
今在豫章。……士行遂終於闐。春秋八
十。依西方法。闐維之。……

(5) Sh. Kuwayama, *Kāpiśi and Gandhāra according to Chinese Buddhist Sources, Orient, Vol. 18 (1982), p. 133.* に往來佛僧の大體の數を掲示してある。なおこの一文は一九八二年一月、カールにおいて開催された The 5th International Conference for Kushan Studies において発表したもの

1475

をやや増廣したものである。

(6) A. F. Wright, *Fo-t'u-t'eng 佛圖澄: A Biography, Harvard Journal of Asiatic Studies, Vol. 2, Nos. 3-4 (1948), pp. 321-371.* P. Pelliot, *BEFEO, t. 3 (1903), p. 100* (E. H. Parker, *The Ephthalite Turks, Asiatic Quarterly Review, April, 1902* の批評)。

(7) 月氏北山は les monts septentrionaux des Yeu-tche と譯す以外にその地理上の位置にっいて解したものを聞かない。ガンダ

1476

ーラの西、ジャラーラードー帯は古
 くにナガラハーラとよばれたが、こ
 月氏國とする資料が散見される。た
 ば、高僧傳と卷三曇無竭傳に、縁河
 西。入月氏國。禮拜肉髻骨。……
 (大正五〇、三三ハC) など。「ナガラハ
 ーラの北方の」とみられる。前記佛
 譯は Robert

Shih, Biographies des moines éminents (Kao
 Seng Tshouan) de Houei-Kiao, traduites et
 annotées, Première partie: Biographies des

1477

Premiers traducteurs, Bibliothèque du
Muséon, Vol. 54 (Université de Louvain,
 Institut Orientaliste), Louvain, 1968,
 p. 63 を参照。

(8) 塚本善隆「佛教史上における肇論の意義」
 (『肇論研究』一九五四年)。

(9) S. Lévi, Note additionnelle; Le Kipin, situation
 et historique, Journal Asiatique, 1895,
 pp. 371-384; Id., Note rectificative sur le
 Kipin, Journal Asiatique, 1896, pp. 161-162;

1478

- Id., Note additionnelle sur les Indo-scythes,
Journal Asiatique, 1897, p. 529, f.n. 2
- (10) 白鳥庫吉「罽賓國考」(『東洋學報』第
七卷第一號、一九一七年)
- L. Petech, Northern India according to the
(11) Shui-ching-chu, Serie Orientale Roma, II,
Roma, 1950, pp. 63-80
- (12) G. Pulleyblank, The Consonantal System of
Old Chinese, Asia Major, Vol. 1. 9 (1963), pp.
218-219. なおペテックとポリーブランク

1479

- 兩説は、A. F. P. Hulsewé, China in Central
Asia, the Early Stage: 125 B.C. - A.D. 23, Leiden,
1979, p. 104 に要約されている。
- (13) 榎本文雄(「阿含經の成立」『東洋學術
研究』第三卷第一號、一九八四年、九
六-九七頁)はもっとも最近、水にふ小
た論文である。桑山は、「罽賓と佛鉢」
(『展望』アジアの考古學』、新潮社、
一九八三年)において既に『高僧傳』の
編者慧皎の『罽賓の概念』に限定して、

1480

罽賓はそこでガンダーラを指すために用
 いられたと記したつもりである。榎本氏
 はそれをすべてに敷衍された。一事が萬
 事ではないのである。罽賓の解釋がこ小
 まで混亂していったのは、この一事を萬事
 にあててゆく態度にほかならなかった。
 (14) カシユミールにカニシユカにはじまるクシ
 ヤーン期の佛寺や、カニシユカ、フグイ
 シユカ等がつくった町があったといふの
 は諸傳承をとらえてつくりあげられた錯

1481

誤のように思われる。カシユミールをカニ
 シユカに結びつける傳承は大いに検討の
 餘地があろう。現在でもスリナガルをは
 じめとする北インドの山岳地帯は、シン
 ホジウムなどで一時的に集會する場であ
 り、ここには恒久的に佛教が扶植されてい
 ンド佛教の中心となったとは考えにくい。
 現存する遺物・遺迹は本文でのバタとお
 リ七世紀をもっとも早いものとして、多く
 は八世紀・九世紀のものである。てつと

1482

「早」は H. Goetz, *Kashmir Art, in Encyclopedic of World Art, Vol. 8, p. 962* 参考
 参照「早」は H. Goetz, *Studies in the History and Art of Kashmir and the Indian Himalaya, Wiesbaden, 1969* の「早」
 The Beginning of Mediaeval Art in Kashmir 見す。

(15) H. Maspero, Sur la date et authenticité du Fou-fa-tsang yin-yuan-tchouan, *Mélanges d'Indianisme, Paris, 1911, p. 130f*

1483

(16) 足立喜六「法顯傳 中亞・印度・南海紀行の研究」法藏館 一九四〇年、三七九頁以下。

(17) J. H. Rosenfield, *The Dynastic Arts of the Kushans, Berkeley and Los Angeles, 1967, pp. 222 - 223.*

(18) 桑山正進「タキシラ佛寺の伽藍構成」
 「東方學報」京都第四六冊、一九七四年
 において、佛寺群の編年を試みたが、その
 第二期は造寺活動が第一期に比べ、

1484

ちがうく活潑となる。第二期はありた
な伽藍構成へ変化する時期であり、その
伽藍構成が後代へ永續する基本型となる。
この意味で第二期はタキシラにおける佛
寺にエポックをつくる。一般にガンダ
ラ佛教はクシヤーン族が護持して興隆し
たといわれている。キーニホが正鵠をえ
ていふとすれば、タキシラ第二期はクシ
ヤーン族の時代であろう。

(19) Deborah E. Klimburg-Salter, The Silk Route and

1485

the Diamond Path, Esoteric Buddhist Art on the
Trans-Himalayan Trade Routes, Los Angeles,
1982, pp. 25-37 (M. Klimburg, The Western
Trans-Himalayan Crossroads).

(20) チャールサダ地域の考古調査は、一九五
八年、ウィーラーによるバーラーヒサ
ール、一九六三年にダニとオールチン、
一九六四年にダニによるシエイハーン、
デリーの發掘がおこなわれた。その結果

1486

は、Sir Mortimer Wheeler, Charsada, A

Metropolis of the North-West Frontier, being a report on the excavations of 1958, Oxford, 1962. ~ Ahmad Hasan Dani, Shaikhan Dheri Excavation (1963 and 1964 Seasons), Ancient Pakistan, Vol. 2 (1965-66), pp. 17-214. 上記報告はハルーンが、ダニの報告の信頼性を問うものとして、また発掘内容を補充するものとしてカーン¹⁾の次の論文はキチなため重要である。A Cruciform Reliquary from Shaikhan dheri, Aspects of Indian Art, (ed.) P. Pal, Leiden, 1972, pp. 15-26.

1487

(7) Robert Shih "Franchissant encore mille trois cents li en direction du sud-ouest, Tchémong arriva au royaume de Kapilavastu." (Bio-graphiques des moines éminents....., p. 145) とし、何ら注釋を付さず、カピラヴァストウと譯している。ニヤグアン又はヤサガに他の巡歴僧の場合と異なっていることに注意して、E. Chavannes, Voyage de Song Yun dans l'Udyāna et le Gandhāra (518-522 p. c.), BEFEO, tome 3 (1903),

1488

p.433, n.3.

(22) E. Chavannes, Voyage de Song Yun ..., p.415,
n.7., p.437.

(23) nisidana 曰慧琳一切經音義卷一に
尼師壇。梵語略也。正梵音具足應云。顛
史娜曩。唐譯為數具。今之坐具也。顛
音寧頂反。

(24) 木村英一編 曰慧遠研究 曰（曰京都大學人
文科學研究所研究報告 曰）、創文社、一
九六〇（遺文篇）、一九六二（研究篇）。

(25) 曰慧遠研究 曰、研究篇、七六頁（塚本善
隆「中國初期佛教史上における慧遠」）
(26) 曰慧遠研究 曰、遺文篇、四六二頁、注三
六。

(27) 曰慧遠研究 曰、研究篇、四八頁。

(28) ナガラハリーラにおける佛塔の多さは、バ
ルトウーの發掘報告にみえるハツダの寺
迹を含め、京都大學の分布調査によつて
はじめて明確になつたと言えよう。國城
の遺迹は現ジャラーラーバードの所の西

南西約一〇キロにあるシャーナスル
 グンガイである。この遺跡を中心に
 一周辺の山麓や台地上に佛寺跡が多い。
 水野清一編『バサールとジエララー
 バード・カール アフガニスタン東南
 部における佛教石窟と佛塔の調査一九六
 五』、京都大学、一九七〇、挿圖二四參
 照。

第二章

- ① 長澤和俊譯注『法顯傳・宋雲行紀』(『東洋文庫』一九四、平凡社、一九七一年)
- ② 『資治通鑑』卷一三、宋紀五。
- ③ フツハーン、達摩悉鐵帝に關する注釋は水谷真成譯『大唐西域記』(平凡社、一九七一年)、三七九―三八一頁がすぐ小さい。
- ④ ドウツラニー系パシユトウ族の牧民としての行動調査が參照される。松井健

「パシユトウ」游牧民の牧畜生活―北東
アマガニスタンにおけるドウラニ系パシ
ユトウ族調査報告(「京都大學人文
科學研究所調査報告」第三三號)、一九
八〇年。

(5) 「續高僧傳」卷四京大慈恩寺釋玄奘傳に、
「至縛喝國。土地華博。時俗號爲小王舍城。
國近葉護南牙也。突厥常法。夏居北野。
花草繁茂。放牧爲勝。冬處山中。用遮寒
厲。故有兩牙王都」とあり、縛喝はトハ

「ラ」ヤブグの南牙に近しい、また、
「達觀貨羅諸故都邑。山行八百。路極艱
險。寒風切骨。到於活國。中途所經。皆
屬北狄。而此王者突厥之胤。統管諸胡。
總御鐵門以南諸小國也」といふ。「慈恩
傳」卷五には、「至活國。居縛喝河側。
即觀貨羅東界。都城在河南岸。因見葉護
可汗孫王觀貨羅。自稱葉護。とあり、
同卷二に「弟子所部有縛喝國」といふ。
弟子とは玄奘に對する右のトハラ」ヤ

フグの自稱である。活は南牙であったこと
とが判る。

(6) 『舊唐書』卷四〇、西域十六都督州府の
條に、「太汗都督府。於噉達部落所治活
路城置。以其王太汗領之。仍分其部置十
五州。太汗領之。」と。

(7) 『隋書』卷八三、西域傳に、「吐火羅國。
……南去漕國千七百里。……挹怛國。
都烏澹水南二百里。……南去漕國千五百
里。……と。兩者間は二〇〇里、吐火羅

は烏澹水南岸にあることが判明する。前
注(5)の『慈恩傳』と合わせると、吐
火羅國(『隋書』)は活國(玄奘文獻の)と
なる。

(8) 『大唐西域記』卷一二に、「越達摩悉鐵
帝國大山之南。至商彌國。」とある。

(9) 『バダフシヤン』における玄奘の旅行(小
谷仲男記)(『第四次、第五次イラン
アフガニスタン・パキスタン學術調査豫
報』、『東方學報』京都第三七冊、一九六

六年)・三九四頁。

- (10) J. Marguart, Éräs'sahr, Berlin, 1901, p. 245,
E. Chavannes, Voyage de Song Yun..., p. 405,
f. n. 7.
- (11) H. A. Stein, Ancient Khotan, Oxford, 1907,
p. 14.
- (12) 白鳥庫吉「西域史上の新研究」(白鳥
庫吉全集)・第六卷、岩波書店、一九七
〇年)・一〇六一—一二頁。
- (13) E. Chavannes, Voyage de Song Yun..., p. 427.

1497

(14) 惠生初發京師之日。皇太后勅付五色百尺
幡千口・錦香袋五百枚。王公卿士幡二千
口。惠生從于闐至乾陀。所有佛事處。悉
皆流布。至此頓盡。惟留太后百尺幡一口。
擬奉尸毘王塔。宋雲以奴婢二人奉雀離浮
圖。永充灑掃。惠生遂減割行資。妙簡良
匠。以銅摹寫雀離浮圖儀一軀及釋迦四塔
變。

(15) 闍那崛多傳(日續高僧傳)卷二)のフ
ラ
ンス語譯注はシヤザンヌが一九〇五年

1498

に發表している。ジュニヤーナグポタド
 はなく、ジナグポタと讀むべき論證もそ
 こにみえる。→ E. Chavannes, *Jinagupta*
 (528-605 après J.-C.), *T'oung Pao*, Serie II,
 Vol. 4, 1905, pp. 333-356. その三四九頁
 から三五一頁に及ぶ脚注は、ナレインド
 ラヤシヤス傳(日續高僧傳卷二)のフ
 ランス譯注となっている。

(16) シヤヴァンは 'Le roi de ce pays demanda
 avec instances aux maîtres (de Jinagupta)

1499

de les traiter en chefs de la religion ... と
 譯す。望月信亨は、「講法の主」とする。

今これに従った。↓『佛教大辭典』五、四六〇八頁に。

(17) シヤヴァンは「師たちにつかえた」と
 する。Chavannes, *Jinagupta* ..., p. 346.

(18) シヤヴァンは「數經時艱」も「plusieurs
 reprises il traversa des difficultés soudaines
 とする。「時艱」は時局の艱難であり、
 エフタルにトットの重大な時局と解した。
 シヤヴァンは、ジナグポタガ―は―は

1500

捕えられたと考えたが、もちろんそんな方向ではない。

(19) 『歴代三寶紀』卷一一(大正四九、一〇〇C)参照。

(20) Chavannes, *Jinagupta* ..., p. 341, n. 5.

(21) 『歴代三寶紀』卷一一(大正四九、一〇〇b5c)による。

(22) 大正四三、二三一C。

(23) 第五章第三節(七世紀後半のカーピシー)に詳しくのべた。

(24) 摩臘婆國。周六千餘里。國大都城周三十餘里。據莫訶河東南。また、跋祿羯咄婆國の末尾に、從此西北行二千餘里。至摩臘婆國。即南羅羅國。南印度境。とある。伐臘毘國は契吒國の末尾に、至伐臘毘國。即北羅羅國。南印度境。とみえる。

(25) 附論「トハリリスターン」におけるエフタル、テュルクとその城邑に参照。

(26) スルフコタル出土SK3碑文中にみえるバクトリア語で、「神のいますところ」を

あらわし、スルコタル丘の神殿を指す。

→ G. Fussman, Surkh Kotat, Tempel der Kuschanzeit in Baktrien, Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie, Bd. 19, München, 1983, S. 69-76.

(27) 『慈恩傳』卷五。

(28) なお、内田吟風「隋・裴矩撰西域圖記」遺文纂考（『藤原弘道先生古稀記念史學佛教學論集』、一九七三年）は『西域圖記』成立年次にもふふしている。

1503

(29) シヤダアン又はジナグプタ傳の脚注で、

玄奘行程をとりあげ、大雪山・雪山の

西足を、バーミヤーンに通じるシブル

峠ととらえ、ils (Jinagupta et Dharmagupta)

ont sans doute franchi la passe Shibr qui mène

à Bamian. → Chavannes, Jinagupta ...,

p. 340, n. 1.

(30) 第五章第三節参照。

(31) Kitāb Futūḥ al-Buldān (Balādhurī); The

Origin of the Islamic States, Part II, by F. C.

1504

Murgotten, New York, 1924 に於て。

(32) Sir John Marshall, Taxila, Vol. 1, Cambridge, 1951, pp. 76-77, 274f.

(33) 山田龍城「蓮華面經について」(山口博士還暦記念印度學佛敎學論叢刊、一九五五年)。のち曰大乗佛敎成立論序説(一九五九年)に吸収され、第八章第一節(エフタル族主と蓮華面經)となつた。

(34) 山田龍城、一九五五年、一一三—一四頁。

1505

(35) J. F. Fleet, Inscriptions of the Early Gupta Kings and their successors, Corpus Inscriptionum Indicarum, Vol. 3, 1888 (Rep. 1970), p. 52 (No. 13; Britari Stone Pillar Inscription of Skandagupta).

(36) J. F. Fleet, Inscriptions . . . , p. 88 (No. 19; Iran Stone Pillar Inscription of Buddhagupta).

(37) J. F. Fleet, Inscriptions . . . , p. 161 (No. 37; Greater Stone Inscription of Mihirakula).

(38) 佛告阿難。彼五天子滅度之後。有富蘭那

1506

外道弟子。名蓮華面。聰明智慧。善解天文二十八宿五星諸度。身如金色。此大癡人已曾供養四阿羅漢。當供養時。作如是誓。願我未來破壞佛法。以其供養阿羅漢故。世世受於端正之身。於最後身生國王家。身為國王。名寐岐曷羅俱羅。大正一〇七五C。

- (39) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, A Chronicle of the Kings of Kāśmīr, Westminster, 1900, pp. 43-48. Ranjit Sitaram Pandit, Rāja

1507

- taranginī, the Saga of the Kings of Kāśmīr, translated from the original Sanskrit and entitled the River of Kings with an Introduction, Annotations, Appendices, Index, etc., New Delhi, 1935 (Sahitya Akademi edition, 1968), pp. 40-44.
- (40) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, Vol. 2, Note J. (pp. 336-339). 現ノインド史ニ関スルニ就テ A. Cunningham, Ancient Geography of India, London, 1871, pp. 62f. 古ノインド史ニ関スルニ就テ

8051

ルニシヤールトニ關する論文も示唆する
 ところ多し。→ Zur Geschichte der Cāhis
 von Kābul, Festgruß an Rudolf von Roth zum
 Doktor-Jubiläum 24. August 1893 von seinen
 Freunden und Schülern, Stuttgart, 1893,
 pp. 198-206. この5/11キニくの書物から又
 タイン論文だけを英譯した(譯者は Gustav
 Glaesser) Contribution to the History of
 the Śāhis of Kābul, East and West, Vol. 23,
 Nos. 1-2 (1973), pp. 13-20 也キカめて有益ナ
 ある。

(41) 水谷真成『大唐西域記』、平凡社、一九
 七一年、一一三、一一四、一二〇(傳訶
 補羅) 一三四(烏刺尸) 一三四(半奴
 蹉) 一三五(曷邏闐補羅) の各頁参照。
 (42) 受諸國貢獻。南至牒羅。北盡勅耆。東被
 于闐。西及波斯。四十餘國皆來朝賀。……
 ……時跋提國送獅子兒兩頭。與乾陀羅王
 雲等見之。觀其意氣雄猛。中國所畫莫參
 其儀。

- (43) M. Mitchner, Some Late Kushano-Sassanian and Early Hephthalite Silver Coins, East and West Vol. 25, Nos. 1-2 (1975), p. 162, Fig. 2, 6. 和文: 桑山正進「東方におけるササニ式銀貨の再検討」(『東方學報』京都第五四冊、一九七二年)一五二頁以下。
- (44) R. Göbl, Sassanian Numismatics, Braunschweig, 1971
- (45) A. Christensen, L'Iran sous les Sassanides, Copenhagen, 1944, Th. Nöldke, Geschichte

1151

- der Perser und Araber zur Zeit der Sasaniden, aus der Arabischen Chronik des TABARI, Leiden, 1879, R. Ghirshman, Les chionites-Hephthalites, Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan, tome 13, Le Caire, 1948
- (46) H. Haussig, Quellen über die zentralasiatische Herkunft der europäischen Avaren, Central Asiatic Journal, Vol. 2, 1956
- (47) 第二章注(33)文献参照。
- (48) 山田明爾「ミヒラクラの破佛とその周辺」

1572

『佛敎史學』第一一卷第一・二號、一九六三年。

- (49) 川勝義雄「中國的新佛敎形成へのエネルギ――南岳慧恩の場合―」(福永光司編『中國中世の宗教と文化』、京都大學人文科學研究所研究報告』、一九八二年)
- (50) 山田龍城『大乘佛敎成立論序説』、五九頁。
- (51) A. Cunningham, Ancient Geography of India, p. 232.
- (52) 『慈恩傳』卷四。

1513

- (53) Tāranātha's History of Buddhism in India, translated from the Tibetan by Lama Chimpa and Alaka Chattopadhyaya and edited by Debiprasad Chattopadhyaya, Calcutta, 1970.
- (54) 大正五(一)ノ六ニ〇―〇参照。
- (55) A. Ghosh, Nālandā, 6th edition, New Delhi, 1971, pp. 2-3.
- (56) Sukumar Dutt, Buddhist Monks and Monasteries of India, their history and their contribution to Indian culture, London, 1962, pp.

1514

328-331.

- (57) H. D. Sankalia, The University of Nalanda,
Delhi, 1972, p. 43.
- (58) 足立喜六『法顯傳』一九四〇・一四九
頁・注四。
- (59) Indian Antiquary, Vol. 14, p. 67f., Vol. 18, p. 227.
- (60) R. C. Majumdar, The Expansion and Consolidation of the Empire, The History and Culture of the Indian People, Vol. 3, Bombay, 1954, p. 23 f.

1515

- (61) 高田修譯『大唐大慈恩寺三藏法師傳』(『
日國譯一切經』、史傳部一一)の二〇頁
注一二六。
- (62) Sukumar Dutt, Buddhist Monks ----, p. 329.
- (63) R. C. Majumdar, The Expansion ----, pp. 39-40.
D. Devahuti, Harsha, Oxford, 1970, pp. 48, 64m.
- (64) D. Devahuti, Harsha, p. 83.
- (65) マイトラカ朝のグアラービーとその佛教に
ついては前注(56)のグアットが詳しいとい
う。また山崎利男『マイトラカ朝の土地

1516

施與文書」(『東洋文化研究所紀要』、
第四三冊、一九六七年)を参照されたい。

(66) 桑山正進・袴谷憲昭『玄奘』、大藏出版
一九八一年、二二三頁以下参照。

(67) 桑山正進「インドへの道」(『東方學報』
京都第五五冊、一九八三年)。なお本
論文の主旨はすでに注(66)文獻に示した。

第三章

(1) ダルマグプタ傳によると、カリーピシーの
王寺は國域の外にあったようである。「
遂往迦臂施國。六人爲伴。仍留此國。停
住王寺。笈多遂將四伴。於國域中二年停
止。遍歷諸寺。備觀所學。」とのべよから
である。玄奘は國域北西に「舊王伽藍」
があることを言う。とすれば、ダルマグ
プタ遊歴時點から玄奘までの間に、「王
寺」が「舊王寺」となった。そこにカリー

ピシ一王の交替が認められるかもし小なり。

- (2) S. Lévi et Ed. Chavannes, *L'Itinéraire d'Ou-Kông* (751-790), *Journal Asiatique* 1895, pp. 374-375. J. Marguier, *Eran'sahr*, p. 285, 馮承鈞曰西域南海史地考證譯叢 上、第六編、二八頁。藤田豊八曰慧超往五天竺國傳箋釋上、北平、一九三一年、四九葉表。内田吟風曰魏書西域傳原文考釋下(曰東洋史研究上第三一卷第三號

一九七二年、六九頁。内田吟風曰隋・裴矩撰曰西域圖記上遺文纂考上、一一九一一二〇頁。

- (3) 白鳥庫吉「罽賓國考」(曰白鳥庫吉全集上、岩波書店、一九七〇年)

Ed. Chavannes, *Documents sur les Tou-Kine* [Turcs] *Occidentaux*, Paris, 1903, p. 130, n. 2.

- (4) 白鳥庫吉「罽賓國考」、三五五頁。
- (5) 隋煬帝時、引致西域、前後至者三十餘國。

唯屬賓不至。

(6) A. Remusat, Nouveaux Mélanges Asiatiques,
I, Paris, 1829, p. 211.

(7) R. Göbl, Dokumente zur Geschichte der Iran-
ischen Hunnen in Baktrien und Indien, Wies-
baden, 1967, Bd. I, S. 132f, Bd. II, S. 71f.

(8) R. Ghirshman, Chionites - Hephthalites,
Mémoires de la Délégation archéologique
française en Afghanistan, tome 13, Le Caire,
1948

※ 三

(9) J. de Morgan, Manuel de numismatique
orientale de l'antiquité et du moyen âge,
tome I, Paris, 1923-1936, p. 448-449.

(10) M. Mitchner, Who were Napki Malik?,
East and West, Vol. 25, Nos. 1-2 (1975), pp.
167-174

(11) なお附論末尾を参照のこと。

第四章

- (1) A. Cunningham, Ancient Geography of India, London, 1871, p 16 f
- (2) A. Foucher, La vieille route de l'Inde, de Bactres à Taxila, Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan, tome 1, Paris, 1947, p 140. Etudes asiatiques publiées à l'occasion du vingt-cinquième anniversaire de la fondation de l'école Française d'extrême Orient, I, pp. 266 - 273.

1523

桑山

- (3) ベグラームの発掘次第と成果の報告とは次のとおりである。表中に記したMDAFAを以後報告の略号とする。

1524

- (10) P. Bernard, Les fouilles de Kohna Masjid,
Comptes rendus de l'Académie des Inscriptions
et Belles-Lettres, 1964, p. 217. 以後の
書 CRAI 略一ノ記述。
(11) 『キリマンバ發掘一ノ印紋』 R. Ghir-
shman, Begram, Pls. XLIX, L, LI, LIII, IV, II
H 6 3 5 1 4 ' MDAFA, tome 8, Pl. VII (p. 89)
2 8 1 4。
(12) MDAFA, tome 8, Pl. L1 (p. 104)
MDAFA, tome 8, Pl. L2 (p. 106)

1527

- (13) R. Ghirshman, Begram, p. 67, fig. 26
(14) R. Ghirshman, Begram, pp. 37-41.
(15) MDAFA, tome 8, p. 106.
(16) J. Meunier, Une entrée de la ville à Begram,
MDAFA, tome 8, pp. 107-113.
(17) J. Hackin et J. Carl, Recherches Archéologiques
au Col de Khair Khaneh près de Kābul —
Fouilles J. Carl et J. Hackin —, MDAFA,
Tome 7, Paris, 1936, p. 5, Pl. XVIII, 24.
(18) 第六章第三節參照

1528

- (19) D. Schlumberger, Le marbre Scoretti, Arts Asiatiqnes, tome 2 (1955), p. 116
- (20) R. Göbl, Dokumente ---, Bd. I, pp. 134-135
- (21) Le fortin du Saka et le monastère de Guldara (Rapport de J. Carl, 1935), MDFA, tome 8, pp. 13-18. 二六二〇 一九七四年に
 中村三筆者の遺迹観察をまとめた。
- (22) Sh. Kuwayama, Excavations at Tapa Skandar: Second Interim Report, in Kyoto University Archaeological Survey in Afghan-

1529

- istan 1972, Kyoto, 1974, pp. 5-10, Id., The Third Excavation at Tapa Skandar, in Japan-Afghanistan Joint Archaeological Survey in 1974, Kyoto, 1976, pp. 5-14, Id., The Fourth Excavation at Tapa Skandar, in Japan-Afghanistan Joint Archaeological Survey in 1976, Kyoto, 1978, pp. 5-12, Id. The Fifth Excavation at Tapa Skandar, in Japan-Afghanistan Joint Archaeological Survey in 1978, Kyoto, 1980, pp. 5-15.

1530

(23) 桑山正進「タバ・スカンダル第一回發掘調査概報」(『史林』第五四卷第三號、一九七一年) 一六五—一六七頁。

(24) R. Göbl, Dokumente....., pp. 115.

(25) Le Monastère bouddhique de Tépé Marandjan, MDFAFA, tome 8, pp. 7-12.

(26) R. Curriel, Le trésor du Tépé Marandjan, une trouvaille de monnaies sassanides et kušano-sassanides faite près de Caboul, MDFAFA, tome 14, Paris, 1953, pp. 101-131,

1531

Pls. IX-XVI. とくに104頁の注五参照。

(27) R. Göbl, Sassanian Numismatics, Braunschweig, 1971 の型式分類に従った。

(28) 以下、東方において出土したサーサーン式銀貨については、桑山正進「東方におけるサーサーン式銀貨の再検討」(『東方學報』京都第五四冊、一九八二年)を参照のこと。“高昌故城”をはじめとする出土状況、出土したサーサーン式銀貨を圖表化した(一三〇—一三一頁)。

1532

- (29) 前注(28)の一五〇—一五二頁。
- (30) R. Göbl, Dokumente ..., Bd. II, pp. 29-36.
河北省文物局文物工作队「河北定縣出土北魏石函」(《考古》, 一九六六年第五期)。
- (32) J. Meunier, Shotorak, MDFAA, tome 10, Paris, 1942.
- (33) J. Meunier, Qol-i Nader, une petite fondation bouddhique au Kapiça, MDFAA, tome 8, pp. 115-127.

/533

- (34) 一九七〇年における筆者の現地観察による。
- (35) 桑山正進「タキシラ佛寺の伽藍構成」(《東方學報》、京都第四六冊、一九七四年) 三三五—三四一頁。 Sh. Kuwayama, Buddhist Temples in Taxila and Gandhāra: A Historical Review of Monastic Arrangements, Catalogue of the Exhibition of Gandhāran Art of Pakistan, Tokyo, 1984, pp. 216-220.
- (36) J. Barthoux, Les Fouilles de Hadda, I, MDFAA,

/534

- Volume 4, Paris, 1933, pp.143-172.
- (37) 桑山正進「タキシラ佛寺の伽藍構成」
三田一三田三頁。
- (38) Sir John Marshall, Taxila, Vol. 1, p.343f.
- (39) Sir John Marshall, Taxila, Vol. 1, p.217f.
- (40) Sir John Marshall, Annual Report, Archaeological Survey of India, 1915-1916, pp.1-38.
Id., A Guide to Taxila, Cambridge, 1960, pp.109
-113.
- (41) R. Ghirshman, Begräm..., pp.39-41.

1535

- (42) E. J. Keall, Qal'eh-i Yazdigird, A Sasanian Palace Stronghold in Persian Kurdistan, Iran,
Vol. 5 (1967), p. 103.
- (43) クシヤーンのカニシユカ一世登位年代は
最近ではグッスマンの七八年案からゼ
イマールヤゲズルの三世紀前年案まで幅が
廣く、結着がつかない。大勢は二世紀前
年である。サーサーン朝とさかのぼる
を採っても、サーサーン朝とさかのぼる
ものである。カニシユカに直接先行する

1536

ウイーマカドスイセス時代にタキミラ
 圓形稜堡が導入されたとは考えがたい。

(44) M. Le Berre et D. Schlumberger, Observations sur les remparts de Bactres, MDFA, tome 19, 1964, p. 88.

(45) A. Ghosh, Taxila (Sirkap), 1944-45, Ancient India, No. 4 (1948), pp. 45-46.

(46) H.-P. Francfort, Les fortifications en Asie centrale de l'âge du bronze à l'époque Kouchane, Paris, 1979.

1539

(47) P. Bernard, Campagne de fouilles 1969 à Ai' Khanoum en Afghanistan, CRAI, 1970, pp. 316-317. P. Leriche, Ai' Khanoum, un rem-

part hellénistique en Asie Centrale, Revue Archéologique, 1974, fascicule 2, pp. 231-270.

(48) J.-C. Gardin, CRAI, 1970, pp. 247-249, CRAI, 1971, pp. 447-452. CRAI, 1975, pp. 193-195. J.-C. Gardin et B. Lyonnet, Fouilles d'Ai' Khanoum, campagne de 1974, BEFEO, tome 63, pp. 45-51.

(49) ストブ・コタニに関する文献は W. Bail,

1538

Catalogue des sites archéologiques d'Afghanistan,
tome I, Paris, 1982, pp. 261 - 263
著者 D. Schlumberger, M. Le Berre, G. Fuss-
man, Surkh Kotal en Bactriane, I, Les temples;
architecture, sculpture, inscriptions, MDFA,
tome 25, Paris, 1983, G. Fussman, Surkh
Kotal, Tempel der Kuschan-Zeit in Baktrien,
Materialien zur Allgemeinen und Vergleichend-
en Archäologie, Bd. 19, München, 1983.

(50) M. Le Berre et D. Schlumberger, Observations

1539

sur les remparts de Bactres, MDFA, tome 19,
1964, p. 61f.

(51) I. T. Kruglikova, Dilberdjin, I, Moskva, 1974

(52) I. T. Kruglikova, V. Sarianidy, La Bactriane
ancienne dans l'optique de nouvelles recherches
archéologiques, Kushan Culture and History,
Kabul, 1971, pp. 29-42.

(53) I. T. Kruglikova, V. I. Sarianidy, Drevnyaya
Baktriya v Svete Novikh Arheologicheskikh
Otkritii, Sovetskaya Arheologiya, 1971-4;

1540

pp. 167-177.

(54) P. Bernard, Les fouilles de Kohna Masjid, CRAI 1964, pp. 212-221

(55) D. Schlumberger, Le rhyton de Kohna Masjid, Arts Asiatiques, tome 24 (1971), pp. 3-7.

(56) R. Göbl, Dokumente..., II, pp. 313-314.

(57) S. Veve, La ceramique de Kohna Masjid (Afghanistan), I-Texte et figures, 1974 (未
公刊論文)。フ「グレネ」氏の御好
意によりこの論文を閲讀できた。謝意を

1541

表す。

(58) M. M. Dyakonov, Arkeologicheskie Raboti v
Nidnem Techemi reki Kafirigana (Kobadian)
(1950-51), Materiali i Issledovaniya po
Arkeologii SSSR, No. 37, 1953, pp. 253-293,
pl. XI.

(59) J.-C. Gardin, Ceramiques de Bactres,
MDAFA, tome 15, 1957, p. 21, fig. 5.

(60) 水野清一編 コドマン・テパクラマ
京都 一九六〇年 一九頁以下。

1542

- (61) 水野清一編『チヤカラク・テペ』、京都、一九七〇、四〇頁以下。
- (62) 注(54)の文献による。
- (63) 注(57)の文献による。
- (64) J.-C. Gardin, *Les origines de la céramique Kouchane*, 1981 (第五回国際フシヤーン會議のハンド・アウト、未刊)による。
- (65) R. Ghirshman, Begram..., p.69.
- (66) J. Meunier, MDFAFA, tome 8, Pl. VII (p.89).
- (67) MDFAFA, tome 8, p.16, III (p.17).

1543

- (68) MDFAFA, tome 8, p.8, Pl. II (p.9).
- (69) J. Meunier, Shotorak, MDFAFA, tome 10, Paris, 1942, p.67, fig.8, Pl. XL, 135.
- (70) R. Ghirshman, Begram..., p.41.
- (71) この遺迹はアフガン考古研究所が発掘したが、十分な報告はなされてない。筆者は一九七〇年に遺迹と遺物とを観察する機会にめぐまれた。
- (72) G. Fussman et M. Le Berre, Monuments bouddhiques de la région de Caboul, I - Le monastère

1544

de Gul Dara, MDFAA, tome 22, Paris, 1976,
pp. 88-91.

(73) Ch. S. Antonini, A Short Note on the Pottery
from Tapa Sardar, South Asian Archaeology 1977,
Naples, 1979, pp. 847-864.

(74) G. Fussman, Ruines de la Vallée de Wardak,
Arts Asiatiques, tome 30(1974), p. 90f., p. 103.
シダガトヤニニトヒ U. Scerrato, A Note
on Some Pre-Muslim Antiquities of Gajatu, East
and West, Vol. 17, Nos. 1-2 (1967), p. 20, figs 48-49.

(75) 一九七八年度の第五次發掘終了時點の數
量。

(76) MDFAA, tome 19, p. 90f (Le brigues des remparts
et des stupas de Bactres).

(77) 泥煉瓦の計測値はそ水か水の遺跡に關す
る報告に發表さ小たものもあり、また發
表さ小ていなものもある。こ小らと千
エツクしつ、筆者はすべての遺跡につ
いて實地に計測しなおした。

(78) M. Taddei, Settlement, Material Culture,

Architecture and Art, The Archaeology of Afghanistan from earliest times to the Timurid period edited by F. R. Allchin and N. Hammond, London / N.Y. / S. Francisco, 1978, Chapter 5 (The Pre-Muslim Period by D. W. Mac Dowall and M. Taddei), p. 267.

- (79) S. Julien, Histoire de la vie de Hiouen-thsang, Paris, 1853, p. 393 慧土 Svetavara 等 Ta-Tang-Hsi-yü-chi, Mémoires sur les contrées occidentales, I, Paris, 1857, p. 46 慧 Sphītavaras

2-1-20

- (80) S. Julien, Ta-Tang-Hsi-yü-chi ..., II, p. 300.
- (81) S. Beal, Si-Yu-Ki, Buddhist Records of the Western World, London, 1884, p. 61.
- (82) Th. Watters, On Yuan Chwang's Travels in India (A.D. 629-645), edited after his death by F. W. Rhys Davids and S. W. Bushell, London, 1904-1905, p. 126.
- (83) J. N. Banerjee, The Development of Hindu Iconography, Calcutta, 1956, p. 148.

(84) 原實「Svetasvatara Upanisad VI-21」(「宗教研究」三五卷第一輯、一九六一年) また同氏「灰」(「東京大學文學部研究報告」第三、哲學論文集、一九六七年) 参照。

第五章

(1) 玄奘の長安出發年次には兩説(貞觀元年説・同三年説)がある。三年説は成立しない。貞觀元年説にも拘泥しない。詳しくは、桑山正進「インドへの道——玄奘とパラバリーカラミトラ——」(「東方學報」京都第五冊、一九八三年)一八九—一九三頁に記した。

(2) 桑山正進・袴谷憲昭「玄奘」、大藏出版一九八一年、一〇〇頁以下。

(3) 足立喜六曰大唐西域記の研究上、一
九四二年、九六頁。

(4) J. Hackin, Les Travaux de la D. A. F. A.,
Revue des Arts Asiatiques, tome 12,
J. Hackin, Le monastère bouddhique de
Fondukistan, MDFA, tome 8, Paris, 1959.

(5) A. Cunningham, Ancient Geography of
India, p. 16.

(6) 水谷真成曰大唐西域記上、四九頁。

(7) 曰慈恩傳上卷二。因請曰。弟子見師目明。

願少停息。若差。自送師到婆羅門國。時
更有一梵僧至。為誦呪。患得漸除。其後
娶可賀敦。年少。受前兒囑。因藥以殺其
夫。設既死。高昌公主男小。遂被前兒特
勤篡立為設。仍妻後母。為逢喪故。淹留
月餘。

(8) 卷一二。弗栗特薩儻那國。……國大都城
號護苾那。……土宜風俗同漕矩吒國。語
言有異。……王突厥種也。深信三寶。尚
學遵德。

(9) 卷一。迦畢試國。……王刹利種也。有智略。性勇烈。威懾鄰境。統十餘國。

(10) 濫波、那揭羅曷、健馱邏、烏仗那、鉢露羅、咀叉始羅、僧訶補羅、烏刺尸、迦溼彌羅、半斂蹉、曷邏闐補羅、磔迦、至那僕底、闍爛達羅、屈露多、設多圖盧。

(11) 水谷真成曰大唐西域記上、三六三頁の注。

(12) H. M. Elliot and J. Dowson, The History of India, as told by its own historians, the Muhammadan Period, Vol. I, London, 1867 (rep. ed.

N. Y., 1966), pp. 27-28. E. C. Sachau, Al-Beruni's India, Vol. I, London, 1888, p. 116,

(13) 舊唐書上卷四四。職官三。曰唐書上卷四九上。百官四上。曰資治通鑑上卷一九四。唐紀一〇。貞觀一〇年末尾上及下。曰大唐六典上卷二五。

(14) Ed. Chavannes, Documents ..., p. 297.

(15) 足立喜六曰大唐西域求法高僧傳上、一九四年。三四一三五頁。

(16) Al-Imam abu-T'Abbās Ahmad ibn-Jābir al-

Balāshurī, Kitāb Futūḥ al-Buldan (The

Origin of the Islamic States, Part II, by

(17)

F. C. Mungtten, N. Y., 1924, p. 141f.

曰大唐西域記卷一二、漕矩吒國。周七千餘里。國大都城號鶴悉那。周三十餘里。或鶴薩羅城。周三十餘里。並堅峻險固也。……鶴薩羅城中涌泉流派。國人利之。以溉田也。

(18)

曰唐書卷二二一下。謝颺。……其王居鶴悉那城。地七千里。亦治阿娑你城。

(19)

たといば曰舊唐書卷四〇、地理三、條枝都督府。於訶達羅支國所治伏寶瑟顛城置。以其王領之。仍於其部分置八州。

(20)

曰唐會要卷七三、安西都護府。龍朔元年六月十七日。吐火羅道置州縣使王名遠進西域圖記。并請于闐以西波斯以東十六國。分置都督府。及州八十。縣一百一十。軍府一百二十六。仍以吐火羅國立碑。以記聖德。詔從之。

(21) P. Pelliot, Deux itinéraires de Chine en Inde à la fin du VIII^e siècle, BEFEO, tome 4 (1904), p. 171, n. 3.

(22) 又從疎勒東行一月。至龜茲國。卽是安西大都護府。……從此已東。並是大唐境界。諸人共知。不言可悉。開元十五年十一月上旬。至安西。于時節度大使趙君。

(23) この小に關して想い起させたのが、繼業である。范成大の『吳船錄』上卷上に、峨眉山牛心寺を造った人とみえ、乾德二年

九六四一に沙門三〇〇人に詔してインドにおいて舍利と貝多葉の書とを求めしめたとき、繼業もその中に居た。開寶九年（九七六）に歸着した。牛心寺藏の涅槃經一函四二卷の卷末ごとにか小はその西域行程を分記していた。その小によると、階州と出て、靈武、西涼、甘、肅、瓜、沙、伊吳、高昌、焉耆、于闐、疎勒、大石などを通って聖嶺をわたり布路州國に至る。また大蔥嶺雪山をわたって、伽濕彌羅國

へ至り、西のかた大山を登っていくと、
 薩埵太子投産飼虎處があり、ついに健陀
 羅國に至ったという。ナールンダから
 ネパールへ入り、歸着したらしい。一〇
 世紀の中ごろよりあと、ボロル、カシユ
 ミーラ、ガンダラーがその行程にあらわ
 れるわけであり、カラコルム道がこのこ
 ろカシユミーラにぬけていくルートとな
 ったことはとがわかる。か水のルートを
 みるとガンダラーの次が庶流波、太爛陀

羅（左爛陀羅とも）であり、そこから大
 曲女域に至って、庶流波はどにかわ
 からないが、太（左）爛陀羅は Jalandhara
 であり、大曲女域はカーニヤクブジャド
 あるから、カシユミーラからジャラン
 ダラへ出られ、そのなとろをそのうは行か
 ずにガンダラーに一旦出、そのうてパン
 ジャーブへ行つて、いふことがわかる。ガ
 ンダラーはおそらくカシユミーラから西
 へ出たところのフンド（ウダボーンダ）

であつたはずである。なお E. Huber,

L'Itinéraire du Pèlerin Ki Ye dans l'Inde,
BEFEO, tome 2 (1902), p. 256 f. 参照。

(24) 法界の行程は、疎勒、葱山、楊興嶺、播
密川、五赤匿、護密、拘緯、葛藍、藍婆、
孽和、烏仗那、茫譏勃高頭城、摩但、信
度城である。全部を通つたかどうかは
なほだうたがわれないが、いまシヤザン
ヌに従つた。↓ S. Lévi et Éd. Chavannes,

Voyages des Pèlerins bouddhistes, l'itinéraire

1561

d' Ou-K'ong (751-790), Journal Asiatique,
1895, p. 341 f に従つた。

(25) (1) 此國舊是罽賓王々化。

(2) 爲此突厥王阿耶領一部落兵馬。投彼罽
賓王。

(3) 於後突厥兵盛。便然彼罽賓王。自爲國
主。

(26) E. C. Sachau, Alberuni's India, ..., Vol. II,
p. 10.

(27) W. Fuchs, Hwei-ch'ao's Pilgerreise durch Nord-

1562

west-Indien und Zentral-Asien um 726, Sitzungs-
berichten der Preussischen Akademie der Wissen-
schaften, Phil.-hist. Klasse, xxx, 1938, p. 445.
 (28) 藤田豊八『慧超往五天竺國傳箋釋』三
 八葉裏。

(29) E. Chavannes, Documents . . . , pp. 132, 162,
 n. 1.

(30) 活國。 . . . 其王突厥也。管鐵門已南諸小
 國。遷徙鳥居。不常其邑。

(31) E. C. Sachau, AlBeruni's India, Vol. II,

p. 13.

(32) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, p.
 206, No. 152-155, p. 217, no. 232.

(33) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, p. 336,
 Note J, O. Caroe, The Pathans, London, 1962,
 pp. 97-98, Archaeological Survey of India,
Annual Report 1923-24, pp. 68-70, Hudūd al-
'Alam, p. 253 f.

(34) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, Intro-
duction, Appendix I, p. 137.

(35) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, p. 217,
no. 233.

(36) M. A. Stein, Kalhana's Rājataranginī, p.
336, Note J, Ch. Seybold, Zum Bīrūnī's
Indica, ZDMG 45-3, p. 700, A. Cumming-
Farr, Antiquities of the Salt Range,
Archaeological Survey of India, Report 1872-
1873, Vol. 5 (1875), p. 82f.

(37) R. C. Majumdar (ed.), The History and Culture
of Indian People, Vol. 3 - The Classical Age,

5951

2nd ed., Bombay, 1962, pp. 169-168, C. E.
Bosworth, Sīstān under the Arabs, from the
Islamic Conquest to the Rise of the Saffārids
(30-250/651-864), Roma, 1968, pp. 13-21.

(38) H. M. Elliot & J. Dowson, The History of
India, as told by its own historians, the Muham-
madan Period, Vol. II, London, 1869 (rep. ed.
N.Y. 1966), p. 172.

(39) W. & S. V. J. [D.W. Mac Dowall, The Shahis of
Kabul and Gandhāra, The Numismatic Chro-

9951

nicle, 7th Series, Vol. 8 (1968), pp. 189-224] はヒンドゥーシャー朝の貨幣を検討してその歴史に言及した。この王朝に関する近年最大の収穫である。貨幣 (Bull-and-Horseman type) の王名は、ビルニーの言及する王名とはほとんど整合しない。マクダールは、そのカラルに當ると考えられる最初期の貨幣銘から *Si Spalapati Deva* なる稱號 (?) を確定し、これを八世紀中葉においている。

第六章

- (1) A. Foucher, La Vieille Route de l'Inde, MDAFA, tome I, 1947, pp. 138f.
- (2) 以上の各遺迹に関する文献の詳細は、W. Ball, Catalogue des sites archéologiques d'Afghanistan, tome I, Paris, 1982 を見よ。
大理石像の詳細は、本章第四節以下。
- (3) 大唐西域記に卷二。フシユカラウグアテ、にっは、城西門外有一天祠。天像威嚴。靈異相繼。グアルシアパラニフ

いたは、跋虜沙城東北五十餘里。至崇山。山有青石大自在天婦像。毘摩天女也。山下有大自在天祠。塗灰外道式修祠祀。

(4)

濫波↓伽藍十餘所。僧徒寡少。並多習學。大乘法教。天祠數十。異道甚多。

那揭羅曷↓崇敬佛法。少信異道。伽藍雖多。僧徒寡少。諸窳堵波荒蕪圯壞。天祠五所。異道百餘人。

健馱邏↓多敬異道。少信正法。……僧伽

藍千餘所。摧殘荒廢。蕪漫蕭條。諸窳堵波頗多墮圯。天祠百數。異道雜居。

烏仗那↓好學而不功。禁呪為藝業。……

崇重佛法。敬信大乘。夾蘇婆伐窳

堵河舊有一千四百伽藍。多已荒蕪。

昔僧徒一萬八千。今漸減少。並學

大乘。寂定為業。喜誦其文。未究

深義。戒行清潔。特閑禁呪。……

天祠十有餘所。異道雜居。

且又始羅↓崇敬三寶。伽藍雖多。荒蕪已甚。僧徒寡少。並學大乘。

(5) 淳信之心。特甚鄰國。上自三寶。下至百神。莫不輸誠。竭心宗敬。商估往來者。天神現徵祥。示崇變。求福德。伽藍數十所。僧徒數千人。宗學小乘說出世部。

(6) 以上、口慈恩傳卷二による。

(7) 納縛伽藍有磔迦國小乘三藏名般若羯羅。此言慧性。聞縛喝國多有聖迹。故來禮敬其人聰慧尚學。少而英爽。鑽研九部。游

泳四舍。義解之聲周聞印度。其小乘阿毗達磨·迦延·俱舍·六足·阿毗曇等無不曉達。既聞法師遠來求法。相見甚歡。法師因申疑滯。約俱舍·婆娑等問之。其酬對甚精熟。遂停月餘。就讀毗婆娑論。

(8) S. Lévi, Missions de Wang Hien-tse dans l'Inde, Journal Asiatique, 1900, pp. 447-448 (des monastères du Kapisa).

(9) J. Marguart, Éran Sakr, p. 291.

(10) Lévi - Chavannes 氏の書に Mundi

- visāra と復原 → Journal Asiatique
1895, p. 354.
- (11) Amitābha-vana? (Journal Asiatique, 1895, p. 354)
- (12) Ānanda? (Journal Asiatique, 1895, p. 354)
- (13) M. A. Stein, Kalhana's Rajatarangini, p. 133,
Book IV, v. 142-143 & f. n. 140-143.
- (14) 第四章注(79)-(83)参照。
- (15) 水谷真成『大唐西域記』、五二頁。
- (16) 山田明爾『ウマー・マハーシユヴアラ像
の銘文』(『史林』第五四卷第三號、一

1574

- 九七一年)、一六八頁以下。
- (17) 原實『宗教研究』第三五卷第一輯、一
九六一年。
- (18) J. Hackin, MDAFA, tome 7, 1936.
- (19) 以下ハイル・ハーシの記述は、一九七四
年における筆者の観察を加味している。
- (20) P. Bernard et F. Grenet, Découverte d'une
statue du dieu solaire Surya dans la région
de Caboul, Studia Iranica, tome 10 (1981),
p. 127 f.

1575

(21) 『白鳥庫吉集』第六卷、三五二—三五三頁。

(22) 堀謙徳『解説西域記』一九一二年、一〇〇頁。

(23) F. C. Margotten, The Origin of the Islamic State, Part II, N. Y., 1924, pp. 143-144, G. Le Strange, The Lands of the Eastern Caliphate, Cambridge, 1905, pp. 345-346, J. Marguart u. J. J. M. de Groot, Das Reich Zābul und der Gott Zün vom 6.-9. Jh., Festschrift Eduard

9651

Sachau, Berlin, 1915, S. 274-277. L. W.

Adamec (ed.), Farah and Southwestern

Afghanistan, Historical and Political Gazetteer of Afghanistan, Vol. 2, Graz, 1973, p. 296.

(24) 第五章注(一)参照。

(25) J. Hackin, MDFAA, tome 7, 1936, pls. XIV-XVI.

(26) P. Bernard et F. Grenet, Studia Iranica, tome 10, fasc. 1 (1981), pls. XIV-XVI.

(27) J. Hackin, MDFAA, tome 7, 1936, pls. XI-XIII.

(28) J. M. Rosenfield, The Dynastic Arts of the

7651

Kushans, Berkeley and Los Angeles, 1967, p. 104.

- (29) G. Tucci, Preliminary Report on an Archaeological Survey in Swat, East and West, Vol. 9, No. 4 (1958), pp. 329-328, fig. 40, R. C. Agrawala, Urdhravartas Ganeśa from Afghanistan, East and West, Vol. 18, Nos. 1-2 (1968), p. 166, fig. 1.

- (30) 銘文の解讀は注(29)の兩氏がおこなったこと。ほぼ共通した見解であるが、最後の部分は大いに異なっている。

1578

- (31) R. C. Agrawala, East and West, Vol. 18, Nos. 1-2 (1968), p. 167, fig. 4.

- (32) G. Verardi, Notes on Afghan Archaeology, II - Ganeśa Seated on Lion: a New Śāhi Marble, East and West, Vol. 27 (1977), pp. 277-283, figs. 1-4.

- (33) D. Schlumberger, Le marbre Scorratti, Arts Asiatiques, tome 2 (1955), pp. 110-119, pls. I-V.

- (34) M. Taddei, India, Archaeologia Mundi, Geneva, 1970, Illustration No. 138, p. 255.

1579

- (35) K. Fischer, Une tête sivaïte en marbre de l'Afghanistan oriental, Arts Asiatiques, tome 10 (1964), pp. 35-42, figs. 5-8.
- (36) MDFAFA, tome 8, fig. 196.
- (37) Sh. Kuwayama, The First Excavation at Tapa Skandar, Archaeological Survey of Kyoto University in Afghanistan 1970, Kyoto, 1972, pp. 8-14, figs. 1, 12, 19, 20.
- (38) 山田明爾『史林』第五四卷第三號・一九七一年一月四頁。

1580

桑 三

- (39) 5000 Years of Art in Pakistan, An Exhibition sponsored by the German Arts Council, No. 328. ギンヤーク博物館六一四五。高松三〇センテ。頭部のみ残存。
- (40) D. Schlumberger, Arts Asiatique, tome 2 (1955), pp. 114, 116, fig. 2.
- (41) 注(40)文獻と女性。
- (42) Ch. Moustamindy (高松アノガニスタン王国當時の Director General of Archaeology and Preservation of Historical Monuments) の著

1581

示による。

(43) 未発表資料。アマガニスタン国立博物館
藏

(44) M. Taddai, An Ekamukhalinga from the N.W.
F.P. and Some Connected Problems, A Study
in Iconography and Style, East and West, Vol.
13, No.4 (1962), pp. 188-310, Figs. 1-4, 7, 9.

(45) A. Foucher, La Vieille Route de l'Inde, MDFAA,
Tome I, 1942, Pl. XXXI, 60, pp. 34, 172.

(46) B. Dagens, Fragments de sculpture inédits,

MDFAA, Tome 19, 1964, p. 35, Pl. XXII, 3, 4.

(47) M. Taddai, Una Kaumodakigadā di Arte
Shāhi nella raccolta dell'Istituto Universitario
Orientale di Napoli, Arte Orientale in Italia,
III, Roma, 1913, p. 69.

(48) D. Barrett, Sculptures of the Shāhi Period,
Oriental Art, Vol. 3, No. 2 (1957), pp. 54-59,
Fig. 1-a, b.

(49) K. Fischer, Arts Asiaticques, Tome 10, fasc. 1
(1964), p. 35, f.n. 1, K. Fischer, Preliminary

Remarks on Archaeological Survey in Afghanistan, Zentralasiatische Studien, 3 (1969), pp. 339, 340.

(50) L. Edelberg, Fragments d'un stupa dans la vallée du Kumar en Afghanistan, Arts Asiatiques, tome 4, fasc. 3 (1957), pp. 199-207, J. E. van Lohuizen-de Leeuw, Am Ancient Hindu Temple in East Afghanistan, Oriental Art, Vol. 5, No. 2 (1959), pp. 3-11, K. Fischer, Zentralasiatische Studien, 3 (1969), p. 357.

4851

(51) A. Stein, Archaeological Reconnaissances in North-Western India and South-Eastern Iran, London, 1937, p. 36f.

(52) アツカン・マーシャル説 ↓ ハイル・ハー
 ナ上層神祠は三堂並列の特殊な形をとっ
 ているが、中インドのブマラ・シヴァ寺
 院と比較する。ブマラは石造單室で、傳
 い基壇の上にエーカムカリンが安置し
 たガルバグリハ、その外にポラタク
 シナー・パタ・マングパ、正面左右の堂

4851

から成る。ハイルハナもアマラも祠堂プラン。方向が同じで、アラダクシナアツカンは言う。アラダクシナハイルハナにとかマングパはたえハイルハナに。ヒンドゥー寺院に共通のものであり、比較の対象ではない。スリヤはダングとヒンガラを従えている。アツカンによると、インドのスリヤはニ形式あり、一つはス

リヤが戦車に乗り、脇侍がいなののが普通だが、居れば暗黒を驅逐する二人の婦人射手である。もうひとつは、書記ヒンガウと戦士ダングで、エデツサの太陽神の脇侍アジズ・モミモスから系統を引くとする。アマラ、ハイルハナのスリヤは後者に属する。ハイルハナのスリヤはその衣裳・頭飾においてシヤールニセがらシヤール三世のサールサーン朝四世紀のものに近い。

水りからバイル・ハーナのスーリヤを五
 世紀にあてゝる。マーシヤルは、アツカン
 のハイル・ハーナ發掘報告書評において
 スーリヤ年代を認めたが、ブマラの發掘
 者であるマーシヤルは、ブマラを古世紀
 とするのど、矛盾してゐる。なおブマラ
 については、R. D. Banerji, The Temple of Siva
at Bhumara, Memoirs of the Archaeological
Survey of India, No. 16, Calcutta, 1924. マ
 ーシヤルの書評は、JRSAS, 1937, pp. 499-501.

シュランベルジエ説↓大理石像がハイル
 ハーナばかりでなく、ガルデーアのガネ
 ーシヤ、タガリオのリング、スコレッツ
 ティッドウルガー、ガルデーアのシヴァ
 など豊富になつた時點における見解。大
 理石像が丸彫りであること、表現形式が
 大理石像以外の彫刻にみられないこと、
 片岩でなく大理石が限られることをあげ
 ガンタラ佛敎彫刻とは異質であること
 に注目した。年代はハイル・ハーナ下室

出土のナポキー貨幣に求められるとし、
 ギルシユマン説を妥當として七世紀もス
 ーリヤにあて、他像は不明としながら、
 佛教造像活動が下火になったエフタル末
 期以降、イスラーム以前という理解を示
 した。
 ゲツツ説 ↓ キダーラックシャーン以後東
 アフガニスタンに占めていたシャイヴァ
 ズムに大理石像は属する。シユランベル
 ジエが理解できなかったタガオのトル

ソイを六ないし八の腕をもつシヴァとし
 たのは、一〇世紀以後にならぬといつ
 シユヌ像が一般化しないからである。シ
 ュランベルジエは「スコレットイ」像を
 ミトラッタウロクトノスと考えたが、ゲ
 ツツは正しくドウルガト、エローラ
 ー七窟ヤラーヴァナ「カーカイー」の
 マヒシヤースラマルティニ像と同時代
 とする。七世紀といふ。H. Goetz, Late

Gupta Sculpture in Afghanistan: the "Scorretti"

Marble" and Cognate Sculptures, Arts Asiatiques,
 Tome 4, Fasc. 1 (1957), pp. 13-19.
 バレット説↓ハイル「ハーサのストーリーヤ
 にっははシユランバルジエ説を採り、
 ガルデーズのシヴアとカシユミール様式
 とみてハ世紀後半、スコレツテイ像と
 マヒシヤマルデイニヒてハ世紀とす
 る。ドウルガリの姿勢をエレフアンタヤ
 ボンバイのプリンス「オヴウエイルス」
 博物館のドウルガリに求め、三叉戟のお

1592

オ方をアイホーレ、エローラ(一四、一
 七、二一、二七窟)の像と比べ、デカン
 の諸像を七一九世紀とみて、大理石像の
 年代を示唆した。さらにアトック、ブネ
 ールとハフたガンダラ発見、ブリテイ
 ッシユ博物館藏品二點を紹介。D. Barrett,
Sculptures of the Shāhi Period, Oriental Art,
 Vol. 3, No. 2 (1957), pp. 54-59.
 トウツ千説↓スワート調査でえた知見の
 中で、ガルデーズのガネーシヤ像を考へ

1593

る。とくに基臺の銘文末尾の Khimigala
 貨幣銘にみえる Deva sahi Khingila と
 ジヤタランヤニールの Narendraditya Khin
 ぎとのかかわりの中にとらえる。ナレ
 ーンドラデーヤガブーデーシエガ
 アラに祠堂を奉納したと同一書の記事
 とこの大理石像造立主ヒンガラのマハ
 ーイターヤカ願求へ銘文にみえる)に結
 ぶ。すなわち、ナレーンドラデーデー
 ヤはこの像銘のヒンガラだと。『ラ
 ーシヤ

1594

タランヤニールはこの王をミヒラクラの
 後継者とす。貨幣形制からはヒンガラ
 はミヒラクラより二代前に當るとヒ
 ンヤラポソントウツは引用する。
 王名につづく部分を Khimigala-tyana と
 人だトウツは、ウデーヤターが碑文に
 あらわれる唯一の例とする。この読みは
 次にあげるアグラワラが異見を提出した。

East and West, Vol. 9, No. 4 (1958).

(53)

R "C" アグラワラ説 ↓ ガネーシヤ立像

1595

ニ例の紹介。マトウラー、グプタの二臂
 虎皮表現と、ウグヤギリのがネーシヤ
 エレクトリックリング表現とが混合した
 のと見る。すなわち大理石像にふたつの
 美術の潮流を見る。年代を示していない
 フイツシャー説↓グプタ期の系統と
 ガンダーラ佛教彫刻からの形式とカシユ
 ミール彫刻様式とが大理石像に流れてい
 る。アフガニスタンの土地でおこった
 とつの折衷様式だとする。注(35)をみよ。

なおアグラワラ説は注(31)、シユ
 ルジエ説は注(33)、アツカン説は注(25)。
 タツデー説↓エーカムカリンガの紹介
 をして、ポストグプタ期ヤガンダー
 ラ後期の影響と認めらる。ポストグプ
 タ期の廣い活像活動の中心を
 カールブル河流域に見ている。シヤ
 ーヒ朝のものとする。注(44)をみよ。
 ドルレーウ説↓エーデルベルクがク
 ナル上流千がサライで発見した大理石

建築要素と佛教ストゥーパの一部とした
 のを訂正し、ハルハル九世紀におけるヒンド
 ウー教寺院の存在をソルト・レインジカ
 リクナル河に至る間に認めようとするも
 の。筆者もエーデルベルク發表分につい
 ては、ソルト・レインジのヒンドゥー寺
 院との關聯を承認するものである。本文
 にホーたとおり、大理石像は八世紀まで
 は下るカーピシー・テユルク朝のもので
 あるが、ヒンドゥー・シヤ朝の造像。

造寺活動はウダマンダと中心としてソ
 ルト・レインジに及ぶ地域におこなわれ小
 たと考える。その檢證には今後大規模な
 調査が必要である。

(54)

D. C. サルカルは、ウマー・マヘーシユ
 ヴアラ铭文を六世紀または七世紀の後期
 グラフミーとす。P. L. Gupta and D. C. Sircar,

Umā-Mahēśvara Image Inscription from Skandar.
 (Afghanistan), Journal of Ancient India History,
 Vol. 4, Nos. 1-2 (1972-1973), p. 3.

- (55) R. D. Banerji, MASI, No. 16, 1924.
- (56) Mission Paul Pelliot, I - Toumchoug, Paris, 1961, Pl. XLIX, 116.
- (57) M. A. Stein, Ancient Khotan, Vol. 2, Oxford, 1907, pls. LX, LXIV, F. H. Andrews, Wall Paintings from Ancient Shrines in Central Asia, Oxford, 1948, Pls. V, Bal. 0200, VII, Har. D.
- (58) 十一十一ノ王冠關係の資料は次ニトシ
A. Pope, A Survey of Persian Art, Vols. I, II, Oxford, 1938, E. Herzfeld, Am Tor von Asien,

1600

- Felsdenkmale aus Irans Herdenzeit, Berlin, 1920, F. D. J. Paruck, Sāsānian Coins, Bombay, 1924, O. M. Dalton, The Treasures of the Oxus, 3rd. ed., London, 1964, V. G. Lukonin, Persia II, Archaeologia Mundi, Geneva, 1969, R. Göbl, Sasaniidische Numismatik, Braunschweig, 1968.
- (59) H. Inghold, Gandhāran Art in Pakistan, N. Y. 1957, figs. 287 (樹下菩薩坐像と供養する玉像(?))はその丈高い冠に三日月とつた

1601

3 點 (恒田 + 佐々), 314.

- (60) J. Hackin et J. Carl, *Nouvelles Recherches Archéologiques à Bâmiyân*, MDAFA, tome 3, Paris, 1933, pp. 20-23, fig. II (p. 17), fig. V (p. 19), fig. VI (p. 21).
- (61) MDAFA, tome 3, pls. XXX, XXXII, XXXIV.
- (62) MDAFA, tome 3, pl. XXXI.
- (63) MDAFA, tome 3, pl. XXXIII, figs. 35, 36, pl. LXXXII, fig. 91.
- (64) MDAFA, tome 3, pp. 5-11,

1602

- (65) MDAFA, tome 3, pl. XI, fig. 12.
- (66) MDAFA, tome 3, pl. LXVII.
- (67) MDAFA, tome 3, pp. 39-46, fig. XI.
- (68) タビッサンダーニニシは、M. Taddai, Tapa
テイの報告がいくつかあるが、基本的には
次の二つの概報による。M. Taddai, Tapa
Sardār, *First Preliminary Report, East and West*,
West, Vol. 18, Nos. 1-2 (1968), pp. 109-124,
M. Taddai and G. Verardi, Tapa Sardār,
Second Preliminary Report, East and West

1603

- Vol. 28, Nos. 1-4 (1978), pp. 33-135.
- (69) East and West, Vol. 18, Nos. 1-2, Figs. 40, 42.
- (70) East and West, Vol. 18, Nos. 1-2, Figs. 47, 60.
- (71) East and West, Vol. 28, fig. 156.
- (72) East and West, Vol. 18, Nos. 1-2, Figs. 28, 29.
- (73) East and West, Vol. 28, Figs. 27, 116, 218, 219, 247.
- (74) J. Hackin, Le monastère bouddhique de Fondukistän (fouilles de J. Carl, 1937),
MDAFA, tome 8, Figs. 174, 196.
- (75) MDAFA, tome 8, p. 57, J. de Morgan, Manuel

1604

三 三

- de numismatique orientale de l'antiquité et du Moyen Age, tome I, Paris, 1923-1936, p. 45,
fig. 598.
- (76) R. Ghirshman, MDAFA, tome 13, pp. 28-32.
- (77) R. Göbl, Dokumente ..., II, S. 313-314.
- (78) MDAFA, tome 8, fig. 189.
- (79) MDAFA, tome 8, figs. 157, 158.
- (80) A. Cunningham, Ancient Geography of India,
London, 1871, pp. 99-103.
- (81) M. A. Stein, Kalhanas' Rajatarangini,

5091

Vol. I, book IV, v. 188

(82) ラリターデーテイヤ年代諸説 → R. T. Tri-

pathi, History of Kanauj, Banares, 1937, p. 201f.,

Adhis Banerji, Yasovarman of Kanauj, Indian

Culture, xv, 1949, p. 203f., H. C. Ray, Dynastic

History of Northern India, I, Calcutta, 1931-

1936, p. 112, H. Goetz, The Conquest of Northern

and Western India by Lalitāditya - Muktāpīda of

Kashmir, Studies in the History and Art of Kashmir

and the Indian Himalaya, Wiesbaden, 1969, p. 8f.,

1666

M. A. Stein, Kalhana's Rajataranginī, Vol. I,

Introduction, p. 67f.

(83) 開元初。遣使者朝。八年。詔冊其王真陀

羅祕利爲王。間獻胡藥。天木死。弟木多

筆立。遣使者物理多來朝。

(84) M. A. Stein, Kalhana's Rajataranginī, Vol. I,

p. 130

(85) Journal Asiatique, 1885, p. 350.

(86) M. A. Stein, Kalhana's Rajataranginī, Vol. I,

Introduction, Appendix I, p. 136.

1607

- (87) R. C. Kak, Ancient Monuments of Kashmir, London, 1933, pp. 152-154.
- (88) 第五章注(39)の文献。
- (89) 注(53)末尾を参照してください。
- (90) M. Taddei はストップパニ向った左側の祠堂を巡観する行為を説明している。↓
A. Note on the Parinirvāna Buddha at Tapa Sardār (Ghazni, Afghanistan), South Asian Archaeology 1973, Leiden, 1974.
- (91) M. Taddei, The Mahishamardini Image from Tapa Sardār, Ghazni, Afghanistan, South Asian

1608

- Archaeology, London, 1973.
- (92) East and West, Vol. 28, p. 47f.
- (93) パンチカハリリテイニッヒは、小川貫式「パンチカハリリテイ」の歸佛縁起(「日佛教文化史研究」、京都、一九七三年)
- (94) I. T. Kruglikova, Dilberdjin, Moskva, 1974, str. 44-48.
- (95) Joanna Williams, The Iconography of Khosroes Painting, East and West, Vol. 23,

1609

Nos. 1-2 (1973), pp. 109-154.

(96) A. M. Belyuzitski et B. I. Marshak, L'art de Piandjikent à la lumière des dernières fouilles (1958-1968), Arts Asiatiques, tome 23 (1971), pp. 3-39.

(97) パーシヤーンに「語でもふれるものはすべし抽出し、パーシヤーン史料集成をおこなひ、「パーシヤーン私注」（「建築史學」第二號、一九八四年）として注釋を附した。これには、アラブ、イスラ

ム史料も加えた。

(98) 銚石のパーシヤーン東大佛についてはこの
ハまで、玄奘の誤認だとか、否長逗留し
た玄奘にして誤まるべくもないなど、
「ばーばいわ水」きた。三ハメートルもの
巨像、しかも岩にほりわた像に外被をか
ぶせうための議論も仰々くおこなわ小
てきた。「分身別鑄」の解釋
もいろいろある。その紹介は、久野健
(「パーシヤーン東大佛と銚石」國華四

第一〇〇二號、一九七七年）に詳しい。
 本論中に記したとおり、現状は「鉛石製」
 と容認できない像の外面を示している。
 可大唐西域記に撰述時点であやまっていた鉛
 石であったと記録されたとすると、「今
 身別鑄」云々は自然に机上で考案された
 製作方法であろう。

- (99) S. Julien, Histoire de la vie de Hiouen-thsang,
 p. 373, S. Beal, Si-yu-ki, p. 51, Th. Watters,
On Yuang Chwang's Travel, p. 118, 水谷真成可

1612

大唐西域記に、一九七一年、四五頁。

- (100) East and West, Vol. 22, Nos. 3-4. (1972), pp.
 379-382.

- (101) B. A. Litvinski, T. I. Zeimal, A djina-Tepa,
 Moskva, 1971.

1613

附
論

附論

トハリスターンのエフタル、テュルクとその城邑

桑山

アラブ地理書がアイム以南のトハリスターンを上下とか東西に分けた理由はともあれ、自然環境や生活形態をみると、トハリスターンはどうしても東西にわかれる。東西の境は、北流するスルハブ流域とフルム河流域との間によこたわる山岳地帯である。山岳地帯は北へ低くなり、アイム南岸近くでダシユトとなり、その中をクンドウズ・フル

ムを結ぶ路が通ってゐる。山岳地帯をロバタ
ツク峠をこえてバグライン、サマンガイン
そーイフルムに通じる路が通ってゐる。トハ
ーリスターインの東部と西部とを直接つなぐ路
はこの二路しかない。

東部

東から南がヒンドウークシユとそ
の支脈とから成る高地である。ヒンドウーク
シユの高峰から發したアングラブが南方で
西流し、バミヤインから流れてきたバミ
ヤイン川とドーシード合流して、スルハーブ

となつて北流する。北方では東方に發した
ターラカイン、ハーナーバード河が西流し、
クンドウズ北西でスルハーブと合流し、ク
ドゥズ河となつて、カラハエ、ザールデア
ームに注ぐ。また東方、ヒンドウークシユ
深くに發したコークチャ河は、山岳部から出
て平野部を急いで通り、アームにホージャ
ガールで注ぐ。ターラカイン、ハーナーバ
ード河とスルハーブとはトハリスターイン中
でもっとも長い流域を平野部で形成してゐる。

東北のバダフジヤーン（キシム以東）は夏季の優秀な牧草地として牧民を誘う一方、西半部は、タラカリン、ハーナーバード流域にタラカリン、ハーナーバード、クンドウズ、カラウイエ、ザール、そしてスルハープ流域にバグライン、ゴリーの沃野をつくり、町邑（かつては城郭）を現出している。

西部

地形は南高北低で、その境目は明確である。東部のような漸高の地勢ではない。北流するフルム、バルフ両河の谷は狭く、流

域にひらけた土地をつくること稀である。急激に北方の平原に流れ出て、フルムのような扇状地をつくり、あるいは四散して尻無河となり、アームに至る河水はない。山と原との接線にフルム、バルフ、アークヤ、シバルガーン、サリポルなどの寒村をつくる。北方の平原では、山に近い南半は灌漑が成功すれば一大耕地となる。有数の牧地と沃野とに恵まれた東部トハリスターンに大規模なパシユトゥン牧民がバダフシャーンを夏営地

スルハীগ流域を冬營地として、ウズベクヤ
 トルクマンら定住して農耕を主業とするひと
 びとと共生している。
 トハーンを政治上統合した在地定
 住勢力はなかった。ソグダイアータヤリ
 ム盆地と事情は同じである。大夏に大君長は
 いない、各城邑に小長がいたのである（口史
 記と大宛傳）。數百年以來、王族はあとを絶
 ち、土豪は力きとい、その小君長といつ
 了、山川に依據し、二七地方にわかれ、野を

畫し、區分けしているが、七世紀はじめには
 みなテュルクに役屬していた（口大唐西域記
 卷一、觀貨邏國綜記の條）。このテュルク
 を、クシャーンとかエフタルと置きかえても
 よい。トハーンスターンにおいては定住城郭
 の民とかから遊牧の民とは共生した。プロ
 イスラム時代におけるこの地方を語るの
 零細な漢文獻と考古資料である。ここには、
 時代を前後してトハーンスターンの城郭の名
 稱を傳えた漢文獻をとりあげる。エフタルか

らテユルノの時代にわたる城邑の比定が、従
來遊牧族の動向とからめておこなわれたが、
いづれも一長一短。地圖と文獻操作だけに依
つて立ち、恣意の原音想定をやっても何ら問
題は解決しない。トハリスターンに一九六
〇年代から七〇年代にわたって考古調査に従
事し、實地の經驗をもった者が、現地の自然
地理を念頭に、冒頭に示した概念を基礎に
してトハリスターンの城邑を検討することは
責務の一である。

エフタルの出自をアルタイに近しなどとし
た重松俊章(一九一九)は、エフタル王治だ
と(周書)異域傳にみえ、拔底延城を吐
火羅國王の住城と慧超が記した縛底耶とか
(唐書)石汗那國傳の「縛底野」と同一原音
異記とし、縛喝(唐西域記)・慈恩傳)
ヤ縛渴羅(唐西域求法高僧傳)と同じ
城で、今のバルフであるといふ。宮崎五十騎
(一九三一、一九三五)は城邑にふらず、し
かも未完。エフタルをトハリスターン出身

とみる榎一雄（一九五一—一九三三—一九三九）は、滑（『梁書』）、活（『大唐西域記』）他玄奘関係のもの、活路（『兩唐書地理志』）、拔底延（『周書』）、挹怛國都（『隋書』）、
 『北史』をすべて同一だと見て、Goto（Procopius）にあて、ゴルゴをいまのゴール（Ghor）（クンドゥズ流域）とする。これは冬營地であり、夏營地は『西域記』・『慈恩傳』の西摩旦羅（フアイザード西方）としている。同氏は、唐の安西都護府下吐火羅葉護

の所治たる過換城（阿緩城）をクンドゥズ附近にあるとした。冬夏の行營地をグール・西摩旦羅と榎案を承認した船木勝馬（一九五四、六四—六九）は、西摩旦羅を拔底延・薄提（『魏書』吐呼羅國傳）にあてている。内田吟風（一九七二—一九六一—一〇五一）は、『太平寰宇記』を利用して、薄提＝薄底延＝拔底延とし、阿緩、アラブ地理書の Samaritan アルメニア史書の Martians と同じもので、みなクンドゥズ河北にあったという。松田壽

男「一九七〇...ニ一七、ニ一八、四四〇一四
 四一、四三四」は、活路を Ghur、滑を Ghor、
 拔底延を縛底野とした。藤田豊八「一九三一
 ..五五六一五八」は、縛喝、拔底延、縛底
 野、薄提、縛叱（月氏都督府下の大夏州）を
 バルフと一、過換（阿緩）、活國都城を Kufan-
 diz (→ Kunduz) とした。
 活をワルワリーズにあり、クンドゥズに比
 定したユール「一八七三」が「大唐西域記」
 の觀貨選諸國を山川に従って現實の地形にふ

りあつた地圖は今日なお價値を失つていない。
 シヤザアーン「一九〇三」は、タバリ、ア
 ブールフェダ、ヤークイトに據つて、Badghis
 の中心をバリーミヤーンとして、こゝをエフタ
 ルの主邑とみ、拔底延をバードギースだとい
 ったスペヒト「一八八三」を認め、拔底延は
 バードギースはバリーミヤーンはエフタル主邑
 といふ説である。彼によつてエフタル副邑は
 縛喝である。「西域記」が縛喝國都を小玉舎
 城といひ、「周書」が拔底延を玉舎城といふ。

からである。敦煌出土、パリオ同定以来實體
 がはつきりした。往五天竺國傳に、バーミ
 ヤーン王は胡、餘國に屬さず、諸國あえて來
 侵せずといふ點を考慮すると、シャヴァンヌ
 説はもはや成立しない。マルクヴァー
 九〇三、八四、八五、二一四以下は、薄提
 縛底耶、縛底野をバルフ、活路をトルコ語の
 オルドの轉化だと一つ、呬摩坦羅にあつた
 かれによると、拔底延 Pao-tien (北京音) は
 近世ペルシア語に復原すると Padišāh だといふ

が、中古音にもどすべきである。活 Oat、阿
 緩 A-hwan、Warwaliz, Warcan はみな War に
 由来するといふ。クンドウズ附近にある [Mar-
 kwart 1938: 35f, 43-45]。ヒンドウークシユ
 南麓、パンジューシール左岸に發見したセトカ
 ーバード墓坑出土の貨幣をもとに、同種の貨
 幣を収集分類し、銘文を試讀してエフタル貨
 を設定したギルシユマン「一九四八」は、考
 古・文字兩資料を合わせてエフタル問題全般
 にせまつたかみえた。一か、現地を知り

ながらトハリスターンにおけるバルフの自
然又文兩方面の地理上の位置を考慮せず、遊
牧族の動きの歴史的傾向を無視した。エフタ
ル夏都をヘルマンハー一九ニ五〇に従いつつ抜
底延とし、ボハラクなるバダフシヤーシンの一
遺迹にあつた。カーピシ一の都城をベグラ
ムでなく、グンデハパイサにあつたニとと
もに粗相だといわざるをえまい [Ghishshman
1946: 41; Kudayama 1974, 76-77]。
かく異見續出したのは、史料が質量ともに

限定さハテいゝうえに、一單なる名稱の類似
や發音の類だけをもちつてすぐさまむすびつけ
る。へ松田一九七〇の主観が先行したからで
ある。さらに根本問題として、トハリスター
ンといふ地域そのものに對する認識が欠如
して、いたのである。机上にいろげた一枚の地
圖と文獻の操作とから一體何が出てくるであ
らう。冒頭にトハリスターンの自然を記し
たのは、單なる導入のためではなく、地圖か
らではといてい認識がまなないトハリスター

ンを示し、そのことが本論の問題に深くかかわることを豫報したのである。

宋雲らはフツハーインの隘路からトハーリス
ターインへ出て、「田畑がひろびろと続き、山
澤がかなたにつらなる」(洛陽伽藍記)卷
五)エフタル王庭の地に至った。人口は一〇
萬。妻を別處にニ、三〇〇里はなしておき、
城郭に住むことなく、遊軍統治し、毛織物で
テントをづくり、水や草をおう。王は月ごと
に居處をかえ、冬三月は移りすまない(魏書)

嘽傳、口洛陽伽藍記四卷五。口城郭内には
 住まないけれどもトハリスターン有数の城
 郭一圓に冬營した。口周書四異域傳の拔底延
 城とはそのような城郭である。五五五年には
 ガンダラを出發し、カーピシ、バミヤ
 ーンまわりでトハリスターンに入つたジナ
 グアタは、口エフタル國についてはじめて逗
 留した。野は空莫として人口は稀薄、必要な
 食料を人はつくらない。グアタはついに具足
 戒を捨て、力をつくしてエフタル王につかえ

一は一は時局の困難にあつたが、冥靈の祐け
 るところ幸にして災を免れた。口續高僧傳
四卷二。口宋雲がエフタル王に會見した時節
 は一十月之初レであるから、冬營地で會つた。
 宋雲・ジナグアタともに山澤いやのぞむ地と
 エフタル國を表わしてゐる。冬營地になりう
 る地方はトハリスターンでは限定される。
 夏營地と對になること、夏營地はバダフシヤ
 ーン一帯であることを考慮し、現今の遊牧民
 の動向をながめると、東部トハリスターン

の河川中下流域が冬營地である。城郭はその地方にあったのである。宋雲・ジナグパとくに呬摩咀羅なる山岳地帯でエフタル王に會ったとは解せない。そこに拔底延城があったとは笑止である。

五五五年（西魏恭帝二年）に突厥の木杆可汗は柔然を西魏に奔らせ、エフタルも攻破した（日通典、日北史の蠕蠕傳、日周書、日隋書、日北史の突厥傳）。さきに柔然婆羅門の姉妹とみたひ娶ったエフタルはこのつ

ながりをたのんで、ソグドヤターリム盆地西縁をおさえたいたるう。柔然を破った突厥にいてみれば、當然次は西なるエフタルを攻略するわけである。五五八年、室點密可汗は柔然を壊滅させ、女婿ホスロウ一世と協調しつつエフタルを攻めた。タシエケント、フェルガーナ、サマルカンドは突厥下に入った。五六二年、室點密は再度エフタルを攻めた。五六八年までには、アームー以南へ勢が及んだ（ALTHEIM 1969: 260-261, HAUSSIG 1956）。エフタル

ルは北周明帝二年（五五八）に中國に對する最後の朝貢をおこなったのち、突厥に破られ、部落分散、職貢ついに絶った（可周書に噉達傳）。可隋書に挹怛國傳は「先時、國亂、突厥は通設字詰を派遣してその國を強領した」と。通設が送りこまれたエフタルの地、トハリスターンに關する情報は可隋書に吐火羅國傳・挹怛國傳であり、また今はない可西蕃記に、可西域圖記に、可達摩笈多傳にであつ

たはずである「桑山一九八三—一七六一七七」。可隋書に吐火羅と挹怛とはその位置をカリピシなる漕國「桑山一九八二—一七六一七六—一〇八〇」から計測してある。漕から北へ一七〇〇里が吐火羅、北へ一五〇〇里が挹怛である。同様に帆延へバリミヤーンは漕の北七〇〇里にあると、可隋書にはする。カリピシ、バリミヤーン、エフタル、トハリは南から北へ疆域をつらぬ、なかんづくトハリ—エフタル間は二〇〇里といふ關係

である。隋書に挹怛國傳に、挹怛の中心の
 城邑は烏澹水の南二〇〇餘里にあるという。
 だからその北二〇〇里にある吐火羅とは烏
 澹水岸にあることになる。通典に辺防九に
 吐火羅の都は葱嶺の西五〇〇里、烏澹水の
 南にあるとすのは、まさしくこのことを
 證明している。魏書に吐呼羅國は四至を一
 東至范陽國、西至悉萬斤國、南至連山不
 知名。北至波斯として地理の實情と離
 れるが（桑山一九八四—一九九一）、玄奘が指

桑山

した範圍に近い。玄奘は南北千餘里、東西三
 千餘里、東は葱嶺を阨し、西は波斯に接し、
 南は大雪山、北は鐵門に據り、縛芻河が境域
 のまゝ人中を西へ流小すという範圍を示して
 る。また、アラブ地理家は、アム以南バ
 ルフ以東を指していたらしい（Minorovsky 1937:
 337）。隋書にはこのようなトハリスター
 ンのごく一部を指して吐火羅といつたのであ
 る。裴矩の西域圖記に自序にみるように、隋
 代に西海に達する三道中、南道は敦煌からタ

ーリム盆地南縁を進み、葱嶺をこえ、護密、
 吐火羅、挹怛、帆延、漕、北婆羅門の順にす
 ずんで西海に達する。吐火羅と挹怛とははつ
 きり區別さ小い。このような吐火羅を正しく「活」とよんだ
 のは玄奘である。正確に現地音をとらえんと
 した玄奘にして一字表記の國名は「活」のみであ
 る。その「活」につき玄奘は、西突厥統葉護
 可汗の長男咀度設が治め、さらに咀度設の息
 子たる特勤が篡奪して新しく「設」となり、

吐火羅葉護と名のつた時點までを伝える（「
 葱恩傳」卷一・卷五）。六二八年から六四四
 年までのことである。吐火羅葉護の衙所「活」
 は、「縛芻河側にあり、その都城は河の南岸
 に在った」（「葱恩傳」卷五）。隋書に吐
 火羅の位置はまさに「活」である。エフタルの勢
 をそいで、まず通設、ついで咀度設、そして
 吐火羅葉護の官稱を帯いた人物をもってトハ
 ーリスターンをおさえたテユルは、「活」を
 根據、南牙と（「續高僧傳」玄奘傳）、縛喝

五所部と一(一) 慈恩傳(卷二)、鐵門以南の
 ろもろの小國を管轄し、鳥のように各地を移
 りまわり、その居處を定めず(一) 大唐西域
 記(治國)、一野を畫し、區分けいたし、ハ
 スターンを役屬させていた(一) 大唐西域記
 區觀貨邏綜述)。一方、エフタルは部落分散
 して中國に對する貿易を絶たざるをえない状
 況にありながら、一部は「活」地方に牧民の
 ガループを残り(一) 與挹怛雜居(一) 隋書(吐
 火羅傳)、異域に流離する部族もあつたが、

テュルクの侵掠に對しては牧民としてのテリ
 トリーを保ち(一) 又為侵掠。自守其境。故此國
 人流離異域。數十堅城。各別立主。穹廬毳帳。
 遷徙往來(一) 大唐西域記(卷一二、呬摩咄羅
 國)、依然として「活」の南方ニ。〇里の土地を
 本據として保有していた。五八八―五八九年
 ホルミズド四世代にバードギース、ヘラート
 へ侵入し、バフラーム、チヨービンに破られ
 バエフタルはその一部であつた(一) ALTHEIM
 1969: 261)。

玄装は歸途にカーピシーからヒンドゥーク
 シュをハフーク峠（婆羅摩那大嶺）でこえて
 アンダラーグ（安咀羅縛）上流域へ下り、北
 西三〇〇里ほどで闊悉多（*Khosht* 又ハ *Nahis* 地方）
 に至り、再びそこから北西三〇〇餘里に活地
 方へ到つた。活は、縛伽浪の北東、咀蜜から
 縛伽河を南渡したところにある。活の西に縛
 喝、活・縛喝間には忽懐がある。忽懐は、紇
 露悉泯健の北西、紇露悉泯健の北に縛伽浪が
 あつた。紇露の紇は中國語にない音声トの入

りわたりを示す（水谷一九七一三三ハ
 紇露は *ス* に對し、悉泯健は *Simian* 對應す
 る（*Minor sky* 1937: 338）。現今のルイーと
 サマンガーン、フルム河の上流と下流とにあ
 る村落である。同じ川の流域にあつた合成さ
 した不思議ない兩地方である。紇露悉泯健の
 北西の忽懐、すなわちサマンガーンの北西は
 フルムたの扇状地の村落である。フルムの東
 方、バグラーンの北東、アンダラーグの北西
 六〇〇里、そしてアームーの南にある活

は、スルハーブとターラカーン^{Thalys}ハーナールバ
 ード合流地帯の沃野である。この河が^{Thalys}
 トライトル^{Thalys}を通過するところ、河の南岸に南邊一ハ
 〇〇メートルの、長方形平面のパーラー^{Thalys}ヒ
 サール遺迹があり、河北、アムール河との間
 にタフテ^{Thalys}カワードなる孤立山塊があり、都
 城の北の障となつてゐる。カライエザール^{Thalys}
 クンドラズ平野において、河の南岸の名に値
 して位置する都城迹はこのパーラー^{Thalys}ヒサール
 をおりてほかに見あたらない。表面採集土器

は、正確に編年へ位置づけられていないが、
 ギリシア^{Thalys}バクトリア時代のアイ^{Thalys}ハ
 ムヤスル^{Thalys}フ^{Thalys}コタルの土器よりも後代へとつ
 ながり型式である (LEBERRE 1968, BERNARD 1978,
 GARDIN 1957, GARDIN 1982)。ル^{Thalys}スト^{Thalys}リン
 ジ^{Thalys} [1905:408] によれば、ハウカルヤムカツ^{Thalys}
 シーは、フルムとターラー^{Thalys}カーンとの間にど
 ちらから二日行程の^{Thalys}マル^{Thalys}マリン^{Thalys}なる町の在
 在を言う。葛西傳^{Thalys}で玄奘は「涇上から東
 二日にして曹健に至つてゐる。曹健がターラ^{Thalys}

ーカーンであることは疑いない。そこは「活
 しの東鄰りであり、フルムは「活」の西鄰り
 であり、「活」がフルリスに當ることは
 まずまちがいない。
 テュルクが根拠としたトハラであり「活」
 である地方には、大きな都城があり、河川下
 流域の平野であるから、そこは冬營地である。
 對する夏營地はバダフシャーンである。七二
 六、七年ごろに慧超は吐火羅國の玉の住城へ
 行った。カーンはアウグが鎮軍していた

ので、テュルクである吐火羅王（吐火羅葉護）
 は、そのため東方一月行程の「蒲特山」に在っ
 て住んでいた。（「往五天竺國傳」）。慧超
 は蒲特山について「玉の住城」と言わないうこ
 とを考慮に入れると、冬營地をアウグに駐屯
 させたテュルク王は夏營地にとどまりがりを
 えなかつたともみられよう。鉢鐸創那と「大
 唐西域記」に示された蒲特山の實際の位置は
 どこか。「大唐西域記」によると、アム
 以南、「活」以東鉢鐸創那までに、曹健、訖

栗瑟摩、呬摩咀羅となりんびいる。また鉢鐸
創那の東南には注薄健、すなわちジヨルムを
中心とするコクチヤ流域のヤムガーン地方で
ある。タールカーンとジヨルムとの間に訖栗
瑟摩、呬摩咀羅、鉢鐸創那が存在する。タール
カーンから東のかたへ峻嶺を踰えて訖栗瑟
摩へ至るのであるから、この水はタールカーン
河からコクチヤ河へと峠をこして別の流域
に出たのである。キシユムに至ったのである
じ。そこから東へ山をこえ川をこえして呬摩

咀羅である。大唐西域記に「山川灑迤
土地沃壤。宜穀稼。多宿麥。百卉滋茂。衆果
具繁。」とある。次東の鉢鐸創那は、「山川灑
迤。沙石彌漫。土宜菽・麥。多蒲萄・胡桃・
梨・柰等果。」とあり、兩地を比較すると呬摩咀羅の
方が鉢鐸創那より土地はこえて、鉢鐸創那は
山岳地帯の産物ばかりである。したがって呬
摩咀羅はコクチヤの流域でも山岳地帯にま
だ入らない地方であろう。呬摩咀羅から鉢鐸
創那へは、東谷行二百餘里である。コ!

クチヤの谷をまさしく東へと入って行った。とを示している。また鉢鐸創那から沙薄健までには、從此東南山谷中行ニ百餘里にて、此れまた正しくコルクチヤにそってジヨルム方向へ行つたこととをのべている。鉢鐸創那はいまのフアイザードをおいてほかに考えられはない。この國域は、山崖上に據る周圍が、七里であつた。

六五八年に唐はクチヤ王と妻阿史那氏との内紛に干渉して武力で治め、交河城の安西都

護府をクチヤに移す一方、右國で沙鉢羅可汗賀魯を捕え、所部であつたヘルシアに至る才アシス國家を州府とし、都護府に組みこんだ。吐火羅葉護の稱をもちて貞觀一九年正月朝賀以來、ゲク中國へかよつたトハリスターンのテユルクは、六五三年に「烏涇（涇）波」なる人物がトハリラハググになつたことを唐に報じた（『唐會要』）。このとき、その治所なす「活」は月氏府、自身は月氏都督となつた（『冊府元龜』卷九七〇、『繼襲』）。六

五八年の州府設置でも、吐火羅葉護阿史那氏は月氏都督、その阿緩城は月氏府であった（口唐書口吐火羅國傳）。六五九年には一ニ七州縣府が、右・米・史・大安・小安・曹・拔汗那・疏勒、口として挹怛に設置された（口通鑑口顯慶四年九月條）。六五八年のペルシア口東の設置には月氏都督府だけが知られるにすぎない。挹怛まで及んで廣く設置されたのは實は六五九年になつてからだったのである。口。いずれにしても、パミール以西における

治地方のテュルクがとりわけ意識され、重要な位置を占めていたのである。この設置が單に建て前だけにすぎなかつたとしても、完璧に各地に割りふられ、整備されたのは、思結部の侯斤都曼が討滅されたのちの六六一年である。このときもやはり治地方が重視された。ホタン以西ペルシア口東一六國に設けるといふのに、吐火羅道置州縣使が發令され、吐火羅（治）に聖德碑を立てたことが示してゐる（口通典口吐火羅國條）。

可舊唐書地理志は、月氏都督府・吐火
 羅國の所治たる遏換城に置く。其の王葉護を
 以てこれを領めしむ。其の部内に二十四州を
 分置し、都督これをつぶし、唐書に
 地理志は阿緩城とし、二五州とし、各州の城
 名を記す。エフタルも月氏都督府と同列であ
 った。可舊唐書には、噉達部落の所治たる活
 路城に太汗（可唐書に大汗と）都督府をお
 いて、その太汗が領め、その部一五を州とし
 て太汗が領めると。一五州は吐火羅葉護の二

四州に次ぐ数であり、修鮮都督府カーピシー
 の所治一一州を上まわっている。これは各府
 の所治面積の大小には必ずしもないけれども、
 所治の州数は現実のものである。カーピシー
 の役属國を玄奘が十餘國と可大唐西域記に
 記し、修鮮都督府下の州数と符合するからであ
 る。とすると、エフタルはテユルクに壓迫
 されてから一〇〇年のちも、なおヒンドウ
 クシユ山地ではトハイラヤグと山南では
設香薛王朝カーピシーと五角の勢をもつていた

のである。すなわち山の地でテユルクとテリ
 トリとエわかちつつ共生していったのでなけれ
 ばならない。完全に分解し去って各部族は
 ばりであったなら、太汗都督府なる府州設置
 はなく、月氏都督府にすべて入っていったあ
 るう。
 可隋書吐火羅國と玄奘の活地方、テユル
 クのトハラヤブグが依存した冬營地とみ
 立場に立つと、こゝにエフタル太汗の依存
 していた活路域も可隋書吐火羅國以来の
 ムー南方二〇〇里の地であったはずである。
 可隋書吐火羅と挹怛とは南北の關係にあり、
 吐火羅がフンドゥス河口地帯であるからには、
 冬營地として成り立つエフタルの活路域はス
 ルハールの中流域に求められよう。バグラ
 ンゴリーリーの平野を置いて他にそのよ
 地は見當らない。バグラーンの野は、東方の
 高地からナフリン河が急激に落ちて四散す
 る沃野である。南からはゴリー河が同様に
 入って四散する。スルハールはここから北流

のである。すなわち山の地でテユルクとテリ
 トリとエわかちつつ共生していったのでなけれ
 ばならない。完全に分解し去って各部族は
 ばりであったなら、太汗都督府なる府州設置
 はなく、月氏都督府にすべて入っていったあ
 るう。
 可隋書吐火羅國と玄奘の活地方、テユル
 クのトハラヤブグが依存した冬營地とみ
 立場に立つと、こゝにエフタル太汗の依存
 していた活路域も可隋書吐火羅國以来の
 ムー南方二〇〇里の地であったはずである。
 可隋書吐火羅と挹怛とは南北の關係にあり、
 吐火羅がフンドゥス河口地帯であるからには、
 冬營地として成り立つエフタルの活路域はス
 ルハールの中流域に求められよう。バグラ
 ンゴリーリーの平野を置いて他にそのよ
 地は見當らない。バグラーンの野は、東方の
 高地からナフリン河が急激に落ちて四散す
 る沃野である。南からはゴリー河が同様に
 入って四散する。スルハールはここから北流

一、低い丘陵地帯を貫流し、クンドウズの平原に出る。この丘陵は北のテエルク、南のエフタルの境界であったろう。バグラーンゴ
 ーリー平野はエフタルに先立つクシャーン時代の
 時代にもクシャーンの本拠地であった。平野
 を一望におさめる西方チエシユメシールの
 丘陵に、カルリが壮大なスルフコタル神殿を
 造営したことはあきらかである。その碑文に
 示されるたゞとく、こゝは *bago lango* (神のい
 ますところ) といわれ、一方の要マトウライ

のマート神殿が *dovakuro* と名づけられたこ
 とと對になら「点」をフスマンは注意する
 [Fussman 1983: 150-152]。また、タバリーの記
 すように、クタイバの攻略に對處するエフタ
 ルの主タルハーンニザーク *Tarkhan Nizak* が
 バグラーンに兵をかまえたとする點も、この
 地がエフタルにとって重要な地であったこと
 と
 遊牧族の依存する場は古今にかわりない。
 と語る (Minorisky 1937: 338, Frye 1979: xviii)。
 遊

赫超は吐火羅王の住域を縛底耶とてい
 阿緩、邊換と同城であり、治國の大
 了。また唐書に石汗那國傳に「石汗
 は斫汗那と曰う。縛底野より南の
 入り、行くに四百里、帆延を得。東
 鳥澣水に臨む。石汗那は赤鄂衍那
 大唐西域記に「アム川の支流スルハ
 ンガリヤ上流にある。傍點部を挿入

此は、吐火羅の縛底耶。千ヤガ
 縛底野ともみることかできる。フ
 三九、四四九は、縛底耶、縛底野
 魏書に吐呼羅國の中の薄提にあ
 だといふ。慧超は縛底耶へバ
 は二〇日、カスニまで七日の行
 イスタフリヤハウカルは、バ
 カスナとを八日行程、バ
 と一〇日行程とする(桑山一九
 三一、四四)。二つの全く異種

ニ一、バミヤン間所要日数がほぼ同じな
 のに、かたやバルフまでは一日、かたや縛
 底耶までがその倍の二日だと言はんでは
 バルフ縛底耶と誰が承認できようか。縛底
 耶はバルフとは別である。
 薄提にフいて曰魏書吐火羅國傳は、一國
 中に薄提城がある。周匝六十里。城南に西流
 の大水があり、漢樓河と名づける。と。バル
 フの南に大水はない。薄提は *Baxtri* であるが
 アヴェスタの後のバルフにあり、四、五世紀

はバルフは *Baxtri* といわれた (WITTELL 1980: 98)
 だからウィツェルによっても薄提をバルフだ
 とは言えない。曰太平寰宇記卷一八六吐火
 羅國に、いつのこととは知れぬが、薄提城
 今、薄底延城と名づく。國の北に在りと。
 薄提は、薄底延が薄提延となつて、延字かぬ
 けたものかもし小ない。いむ小にても薄提
 や縛底耶やバルフではない。
 曰太平寰宇記には、つづけて、後魏書西
 域傳吐火羅國に薄提城有り、周匝六十里なり

と。西蕃記薄提城の十四五里ばかりと小異なり。といふ。西蕃記に吐火羅國の條があつたのであろう。そこに、薄提城、方十四五里といふ記載があつたのである。一か、一薄提城。今名薄底延城。在國北。が西蕃記の引用だが、いはわからない。魏書に薄提城は「國中」にあつた。わがわがごうことわつた以上、これは周禮に戴師の「任國中之地」の「國中」と同じ意義が與えらるやう。西流大水は、アム、コク、チヤ、タ、ラ、カ

ン、ハ、ナ、バ、ド、河、の、水、か、で、あ、る、ほ
 か、は、北、流、ア、ム、以、北、の、河、は、み、な、南、流、ト
 ハ、リ、ス、タ、ン、西、部、は、伊、河、川、り、き、河、川、は、な
 い。し、て、あ、げ、て、も、み、な、北、流、は、か、り、で、あ、る。
 西流大水で國の中心となりうる平野は、タ、ラ、カ、ン、ハ、リ、ナ、バ、ド、ク、ン、ド、リ、ス、ホ
 ー、ジ、ア、ガ、ル、な、ど、の、地、域、の、み、だ、が、そ、の、北
 岸に都城迹などない。クンドゥス北方のイマ
 ム、サ、ヒ、ブ、の、平、野、は、ア、ム、が、形、成、し
 た、も、の、六、角、平、面、の、バ、ラ、ウ、ヒ、サ、ル、は、あ

るが當該の時代のものではなく、またアム
一河の南岸だから、候補から外れる。となる
と、都城迹として候補が多いアム北岸
に、魏書に薄提城は求められさうだと、か
えない (BERNARD 1978: 56-61, 99-100)。縛底耶
と薄提とは自ら別處であり、縛底耶・縛底野
が普通で異記、薄提、薄底、延、薄底延もまた
そ小と同じ原音を寫したものとすると、各地
にそういった名の城があったことになり、こ
れらが普通名詞であった可能性をおおせす

「周書に異域傳の厭達國傳に、「其王治拔
底延城。蓋王舍城。其城方十餘里。」と。吐火
羅國傳のない「周書に示された、エフタル
の中心地拔底延城とはどこか。呬摩咀羅は
ない。「大唐西域記には呬摩咀羅にわがわが
都城の存在を記さなかった。拔底延が方一〇
餘里だといふ點で、周六〇里(方一五里)の
魏書に薄提や方十四五里の「西蕃記に薄提
に結びつけられてゐる(船木一九五四、松田
一九七〇)。エフタルがアム河北に中心

と据えた證據はないから、いまのところは魏書に薄提城は論外におちる。西蕃記にもみると、挹怛國都城は方一〇餘里である。城郭の規模で比較すると、利は西蕃記にあり、西蕃記にはない。西蕃記にもみると、西蕃記の同時代のことを言っているのだから、西蕃記に薄提城は、隋書に挹怛の都城とは異なる。大唐西域記に國の都城の大きさをどう表示しているかと調べると、闐爛達羅大都城の周と迦溼彌羅新城の南北長とを一二

三里とするほか、一〇里以上の表示は、十餘里、十四、五里、十五、六里、十六、七里、二十餘里の五種しかない。だが、十餘里といふのは、十四、五里にほゞうてい達しない程度の里數表示であることがわかる。北魏の尺長は、27.9, 28, 29.6と三變し、北周・隋では29.6(以上cm)である(曾武秀一九六四)。魏周隋の三書も西蕃記にも絶對値に大差はない。このようにみると、拔在延と魏書と西蕃記の薄提

につなぐより、隋書に挹怛の都城につなげ
る方がまじである。

拔底延を隋書に吐火羅都城（活の阿緩な
いし過換、縛底耶）につなぐことは如何。隋
書に吐火羅都城は方二里であり、大唐西
域記に活の都城は周二十餘里、すなわち方五
里の大城である。方一〇餘里の拔底延城が急
速に二里ないし五里に縮小したとは考えにく
い。城郭の規模がわずかの期間に擴張なり知
らざる、小さくなるとは判りにくい。隋書に

西域傳は都城一邊の里數をほとんど一〇里以
下に記して概して小さめに記録していか、
そんななかで挹怛の都城は、波斯のそれと
もに突出していす。吐火羅や挹怛だけが誤算
誤寫だとは言えない。このようにみると、
周書に拔底延は、隋書に挹怛の都城へつな
がっていく。すなわちのち、活路城としてあ
らわれる都城である。そこで、西蕃記にの
薄提城は、隋書に吐火羅都城とも別處だと
いふことにもなつてこよう。

松田ハ一九七〇…一七八一、一八六、四四〇
 一四四一〇・船木ハ一九五四…六六〇は拔底
 延を魏書に薄提とする。魏書には代から
 吐呼羅まで一、二〇〇里、周書には長安か
 ら嘯達まで一〇〇里とする。松田ハ一
 九七〇…四四一〇によれば、長安一代は一九
 〇〇里である。周書には拔底延までの距離
 を魏書にのり數から一九〇〇減いて机上操
 作した。だから薄提に拔底延となるのではない
 かと。魏から周に至ってトハリスターンは

エフタリスターンと化した。代からではな
 に長安からの距離に改めておけば、あつたに
 知り小た拔底延までの距離になる。というの
 は周書に異域傳の作者の考えである。だが
 り薄提と拔底延とが同じ城だといふんでは歴
 史地理の實情にもとる。歴代トハリスター
 ンに城邑が唯一つだと、認識に立った人に
 してはじめて可能な理窟である。単純な漢文
 史料の操作と原音不確かな名稱の重収合わせ
 (内田一九七二)は、太平寰宇記に薄底延

と日周書に拔在延とは音において通ずると
とに依っていたりと此は机上の遊戯にもなら
ない。

拔在延城は「蓋、王舎城也」といふ。玄奘
が縛喝國都を小王舎城と記したのも、ラージ
ヤグリハとか、エフタルの拔在延城に對して
言つたものではなからう。薄提、薄在延、縛
在耶、縛在野、拔在延、こらがみな同一原
音を寫していたと假定すると、原音の意味は、
王居のある所といふ意味があり、土地の人が

そのよくな町を指す普通名詞の呼稱ではなか
ったか。薄提は少くともアム河にあり、
縛在耶はカライエ「ザール」にあり、拔在延は
バグラーン「ゴリ」平原にあつたことは否
定できまい。そうすると同じような名稱が各
地の中心と目される場所存在したことになる。
いまカーブルの東南にある「小カーブル」
Khorā Kābul はカーブルと何れも関係ない。大小
とか主副とかのかがかり方で、王舎城とか小
王舎城をとらえたことは、全く無意味なよう

である。カーブル周辺の人はカーブルをシャ
 ール *Shahr* とよび、カーブルとよぶ場合はと
 くに尋常の場合ではないことを注意しておく
 エフタルはクシャーンと同一くバグラーン
 ンゴリー平野の冬営に本拠をもった。また
 夏営地は呬摩坦羅。テユルク南下以前にか
 ンリが活ヤバダフシャーンをどうおさえてい
 たか、これを示す資料はない。活、活路はよ
 く似た原音が豫想されるが、全く場所は異な

る。活はエフタルの盛期に活路を中心とする
 エフタルにとつて、アムー南岸の要衝であ
 り、ある部族の有力な冬営地であったとみ
 よい。テユルク南下後にもエフタルが居を雑
 えるといふのはその名残りである。『梁書』
 にある滑とは、活・活路にいたエフタルを指
 す南朝の理解である。テユルクが南下すると、
 活地方はテユルクがおさえ、バダフシャーン
 もテユルリの夏営地となった。エフタルは太
 汗が統轄し、バグラーンゴリーは保つて

いた。テウルクは吐火羅葉護が統率し、スル
 ハーグの中流と下流とに各々よりながら、牧
 民としてこのテリトリーを分けて共存した。そ
 北でも玄奘當時、安曇羅婆、闐悉多などはテ
 ユルクに属していたから、政治上のテリトリ
 ーは複雑であつたろう。エフタルは分解し去
 ったのではなく、七世紀後半にもまだカーヒ
 シーヒかテウルクに互すかを保っていた。七
 ニ九年、骨咄祿達度^{ブツトクダツ}がトハーウヤ
 グに即いたこと、さらにエフタル王を兼収

たことを中國史料は傳へる(『唐會要』卷九
 九、『唐書』西域傳、『冊府元龜』卷九十四封
 冊二、卷九十六『繼襲一』)。吐火羅葉護怛王
 のタイトルにテウルクのエフタル支配開始と
 みよいとすると、このころ共存関係はくず
 小たのであろう。

引用文献

榎 一雄

一九五一 エフタール民族の起源 和田博

士還曆記念東洋史論叢誌。

藤田豊八

一九三一 智慧超往五天竺國傳箋釋。

船木勝馬

一九五四 エフタルに關する中國史料につ

いて 史淵 六一號。

桑山

桑山正進

一九八二 葱嶺山と阿路孫山 考古學論

考 小林行雄博士古稀記念論集

一九八三 インドへの道 玄奘とパラバ

カラミトラ 東方學報 京

都第五五冊。

一九八四 パーミヤーン私注 建築史學子

第二號。

一九八五 パーミヤーン大佛成立にかかわ

りふたつの道 東方學報 京

都第五七冊。

松田壽男

一九七〇 口古代天山の歴史地理學的研究

口増補版。

宮崎五十騎

一九三一 嘸達種族の發展 口青丘學叢口

第二號、第四號

一九三五 嘸達種族の發展 口青丘學叢口

第二一號

水谷真成

一九七一 口大唐西域記口、平凡社。

重松俊章

一九一九 嘸達種族考(一)(二) 口史學雜誌口

第二八卷第一號、第二號。

内田吟風

一九七二 吐火羅國史考 口東方學會創立

二十五周年記念東方學論集口。

曾武秀

一九六四 中國歷代尺度概述 口歷史研究

口一九六四年第三期(北京)

ALTHEIM, F. 1969: <u>Geschichte der Hunnen</u> , Bd. II, Berlin.
BALTHOLD, W. 1968: <u>Turkestan down to the Mongol Invasion</u> , 3rd. ed., London.
BERNARD, P. 1978: <u>Etudes de géographie historique sur la plain d'Ai Khanoum (Afghanistan)</u> , Paris.
BIVAR, A.D.H. 1983: <u>The History of Eastern Iran, in the Cambridge History of Iran, Vol.3(1)</u> , Cambrdge.
CHAVANNES, E. 1903: <u>Documents sur les Fou-koue Occidentaux</u> , Paris.
CHAVANNES, E. 1905: <u>Jinagupta(528-605 après J.-C.)</u> , T'oung Pao, Série II, tome VI.
FRYE, R. N. 1979: <u>Islamic Iran and Central Asia (7th-12th centuries)</u> , London.

1686

FUCKS, W. 1939: <u>Huei-ch'ao's Pilgerreise durch Nordwest-Indien und Zentral-Asien um 726</u> , <u>Sitzungsberichte der Preussischen Akademie der Wissenschaften</u> , phil.-hist. Klasse, Bd.30, Berlin.
FUSSMAN, G. et al. 1983: <u>Surkh Kotal en Bactriane, Vol. I</u> , MDFAFA, tome XXV, Paris.
GARDIN, J.-C. 1957: <u>Céramique de Bactre</u> , MDFAFA, tome 15.
GARDIN, J.-C. 1982: <u>Les origines de la céramique kouchane</u> , Manuscrit offert à la Conference kouchane en Caboul 1982.
GHIRSHMAN, R. 1946: <u>Bégram, recherches historiques et archéologiques sur les kouchans</u> , MDFAFA, tome 12, Paris.
GHIRSHMAN, R. 1948: <u>Les chionites -Hephthalites</u> , MDFAFA, tome 13, Paris.
GÖBL, R. 1967: <u>Dokumente zur Geschichte der Iranischen Hunnen in Baktrien und Indien</u> , Bd. I, Wiesbaden.
HAUSSIG, H.W. 1956: <u>Quellen über die zentralasiatischen Herkunft der europä-</u>

1687

插圖

插圖
目次

9	8	7.	6.	5.	4.	3.	2.	1.
車輪状構造の墓廟建築	アーイッハーンム 柱頭	タキシラの神殿	柱礎 アーイッハーンム、ドゥルマンテヘ、チャカラクテヘ	アーイッハーンム平面圖	ダルマラジカー大塔の増廣	方形基壇（イフストゥーパ）平面・立面圖	タキシラ第三期都市第三期プランとストゥーパ	タキシラ地圖

18	17	16	15	14	13	12	11	10
シャージキテリー平面圖	メハサンダ塔院	タレーリ塔院（D區）	タフテッバリー平面圖	ジャマールガリ平面圖	ガンダラ 都市と佛迹	ジャウリアーン平面圖（最終段階）	タキシラ佛寺の基本セット（クナラ）	タキシラ佛寺の變遷

19 ブトカラ平面圖

20 インド・中央アジア要圖

21 ニ商主奉夢密圖（ベジャール博物館）

22 カラコルム・ヒンドウイクシエ交通路圖

23 四天王奉鉢圖（ラーホール博物館）

24 佛鉢供養圖

25 四一五世紀佛僧往來ルート

26 玄奘によるウツグイヤーナの聖迹

27 ジアララーバード遺迹分布圖

28 宋雲・慧生ルート

29 『西域圖記』南道の葱嶺以西路・ジナグプタ、ダルマグ

プタ經路

30 玄奘往還路

31 ガンダーラ、カシュミール、シアルコトの位置

32 サルサーン、エフタル、サマルカンドの朝貢

33 迦畢試とその周邊

34 『大唐西域記』に記されたカールブル河流域

35 圓形稜堡の建築

53 52 51 50 49 48 47 46 45

冠中の表現と衣紋
冠中の表現
大理石像細部表現
ウマー・マヘーシエグアラ並坐像
大理石像 (4)
大理石像 (3)
大理石像 (2)
大理石像 (1)
ハイルハーナ 平面・断面圖

44 43 42 41 40 39 38 37 36

テヘ・スカンダル 平面圖
シヨトラク 平面圖
コフナ・マスジツド 平面圖
スルフコタル、ディルバルジン 平面圖
印紋
ドウルマン・チャカラクの土器
ヒンドウ・クシエ北麓の土器遷移(表)
ヒンドウ・クシエ南麓の圓筒印紋
玄装の就學狀況(表)

59 58 57 56 55 54

涅槃像の位置
タパッサルダールの塑像
男神並坐像
バーミヤーン東大佛
バーミヤーン西大佛
バーミヤーン溪谷

ジャンディール

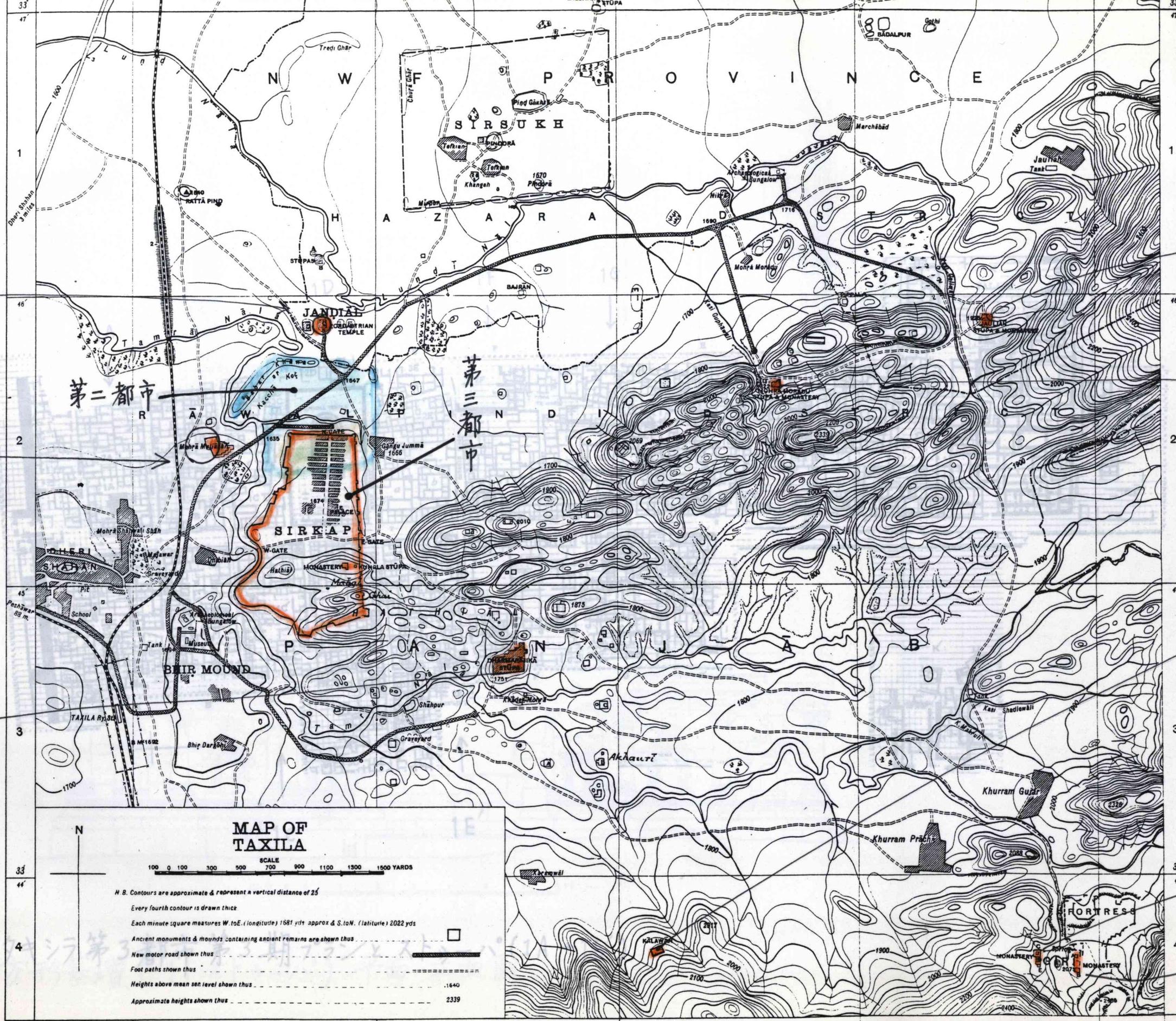
モフラー・モフラー

タルマラー・シカー

ジャンディール
モフラー・モフラー

カラフーン

ギリ



第二都市

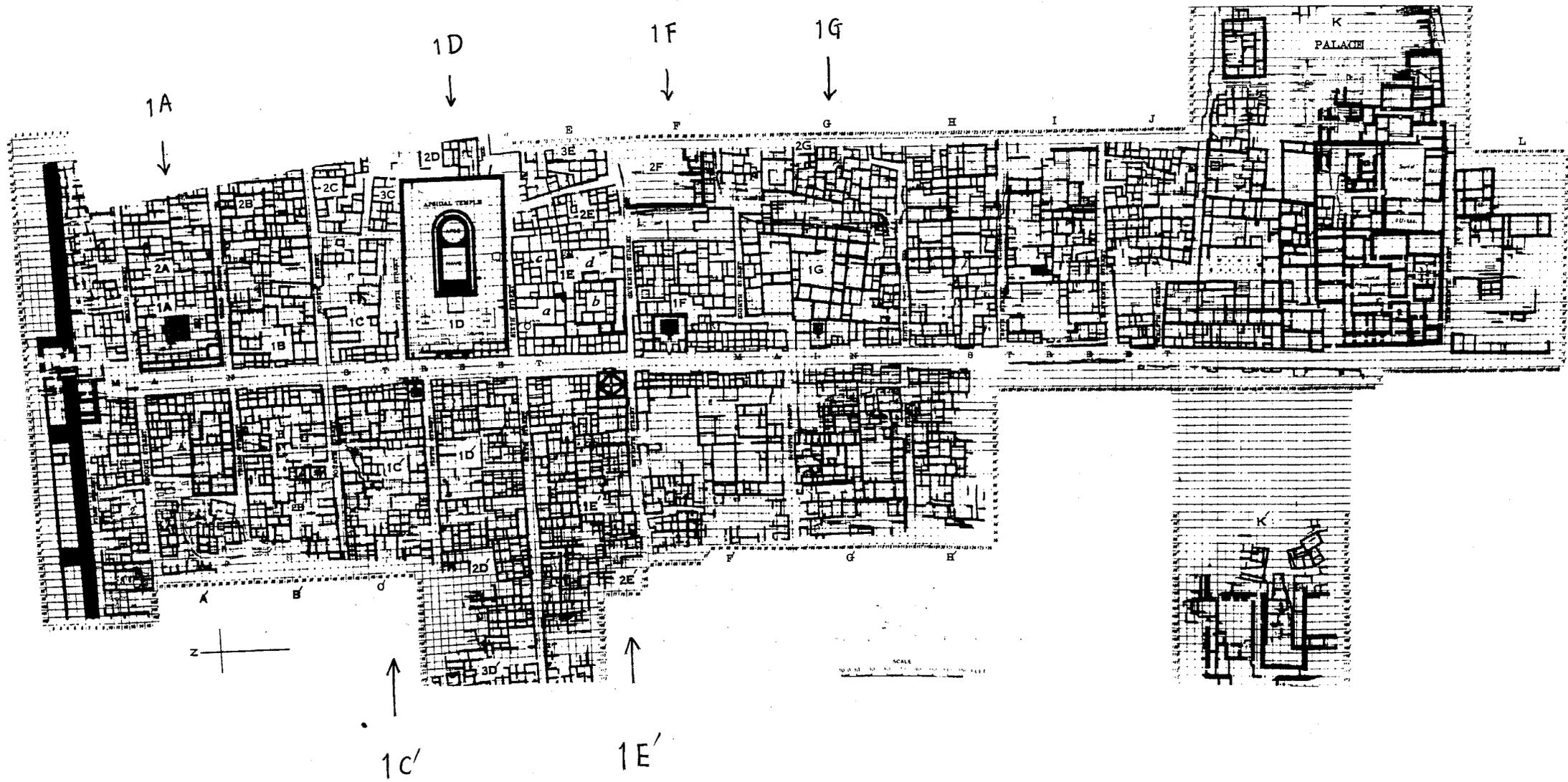
第三都市

2
1

A 72° 49' B 50' C 51' D 52' E 72° 53' F

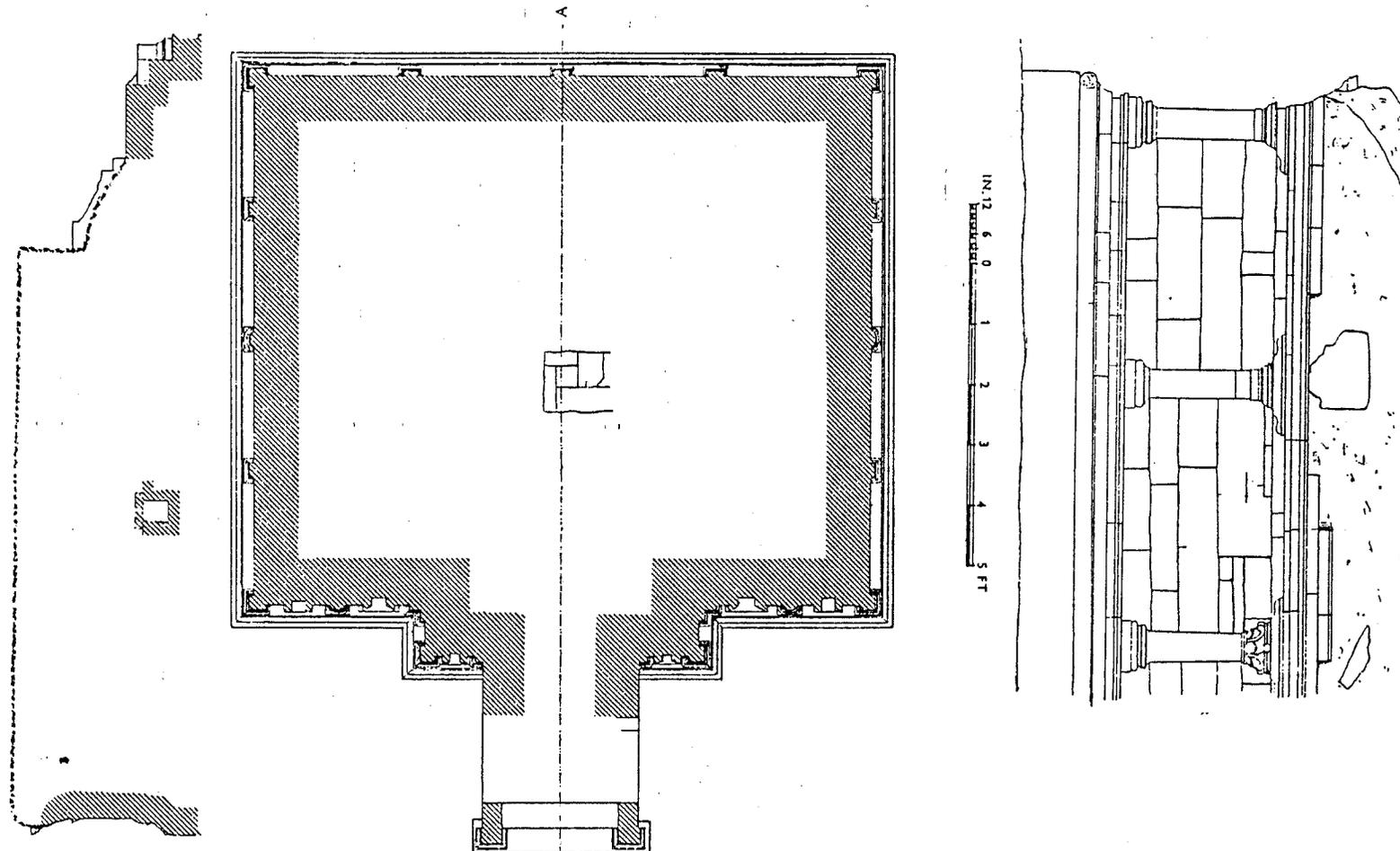
C D E

A B

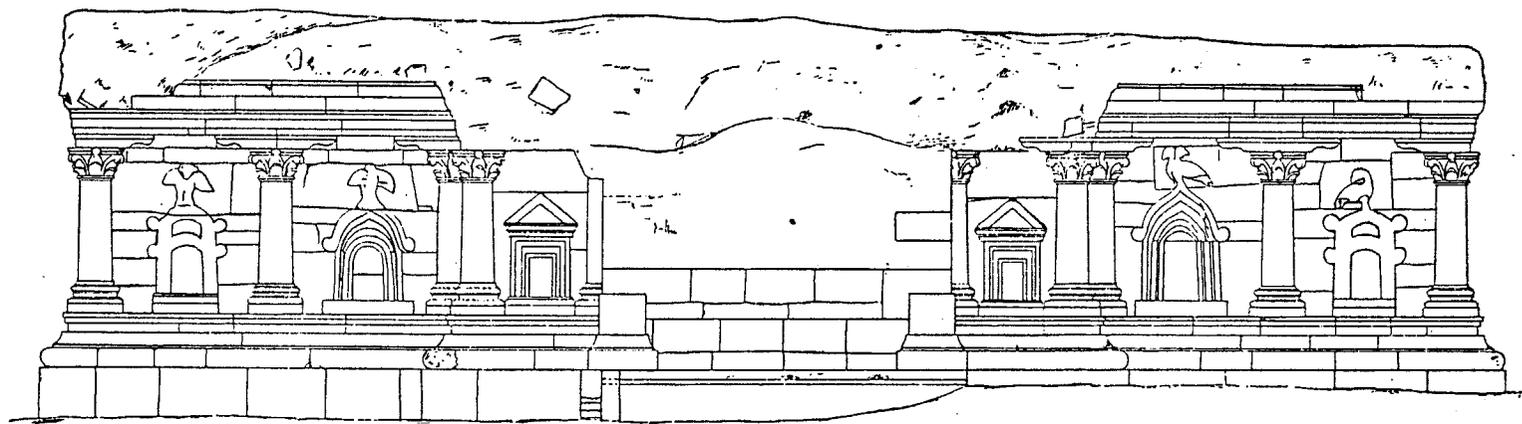


2 タキシラ第3都市第3期プランとストーリーパ(1A→1E')

SECTION ON A. B.



PLAN

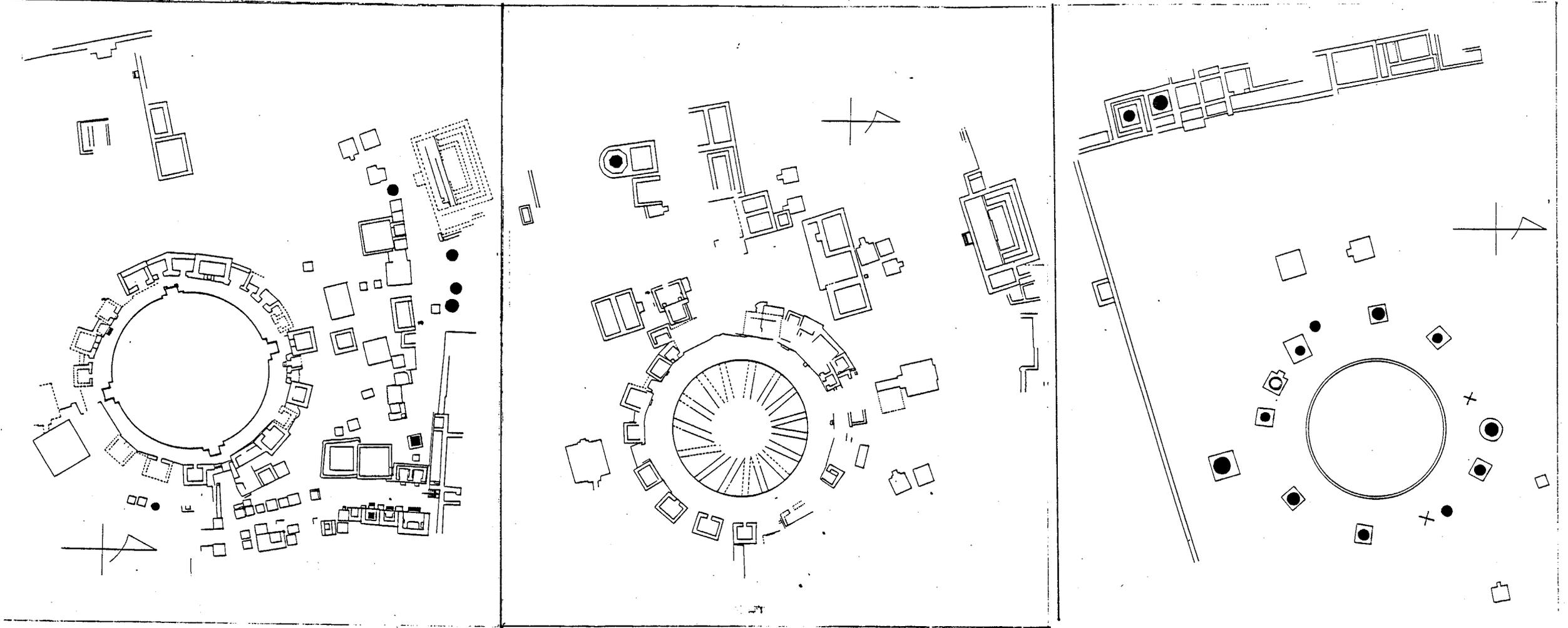


3 方形基壇(1Fストウパー) 平面・立面圖

第五、六期

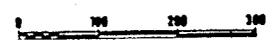
第二期

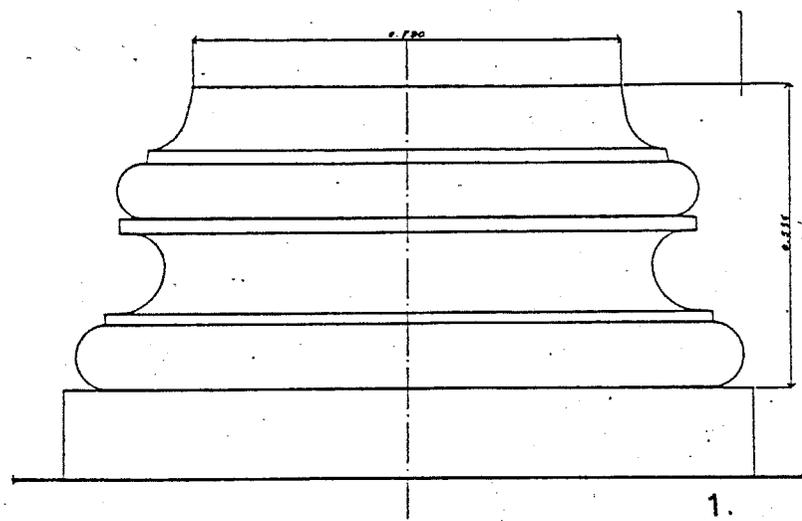
第一期



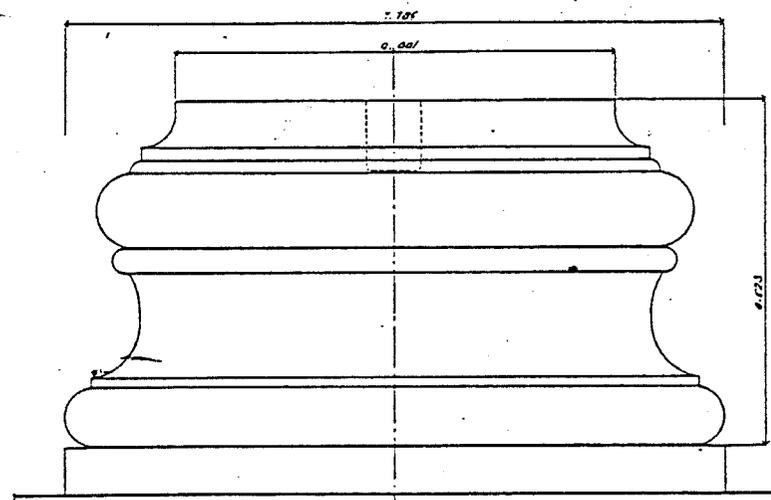
4 ダルマラジカー大塔の増廣

AÏ KHANOUM

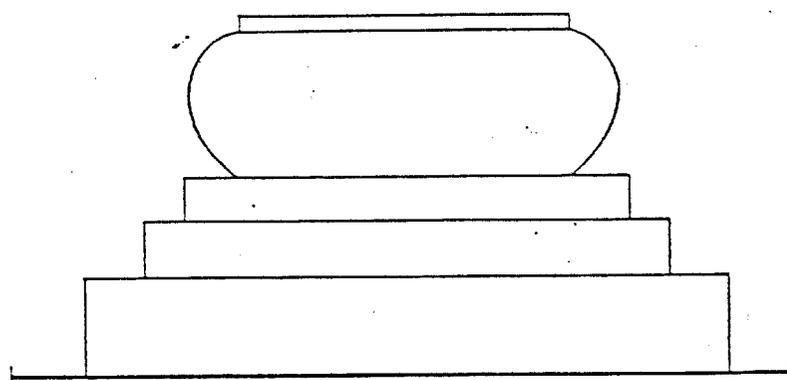




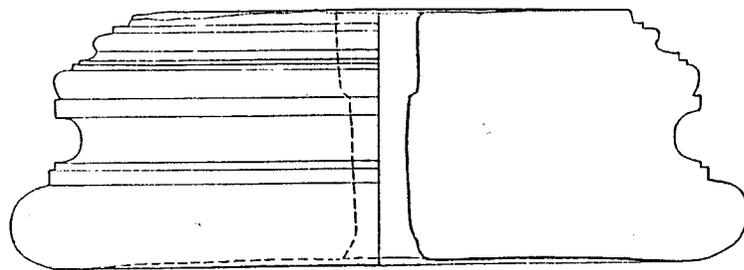
1.



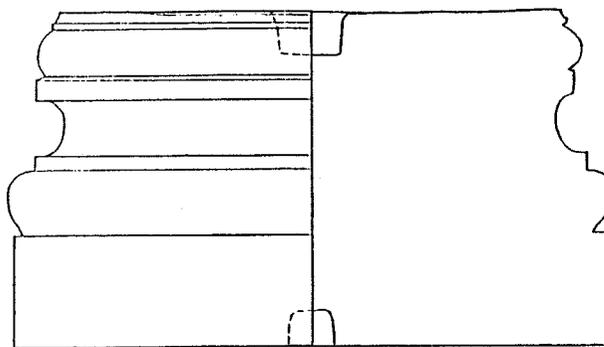
2



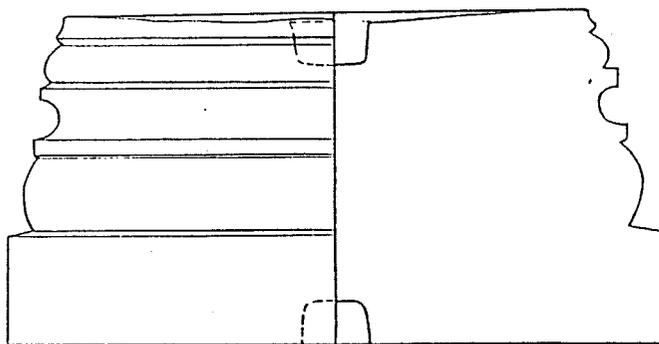
3



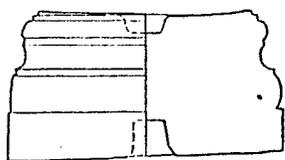
No. 1



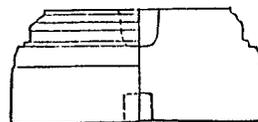
No. 2



No. 3



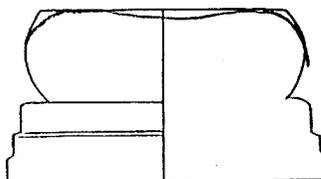
No. 5



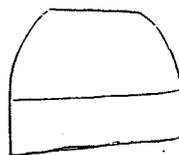
No. 4



No. 8

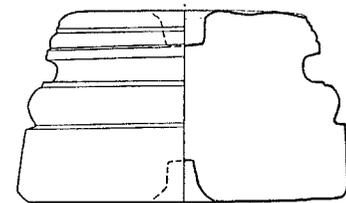


No. 6

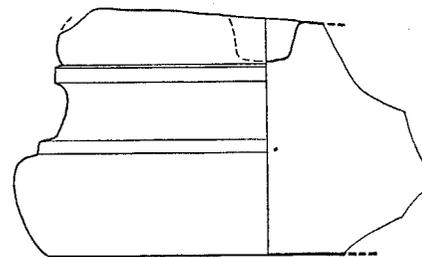


No. 7

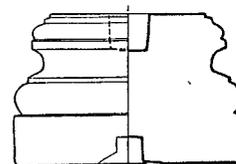
0 50 cm



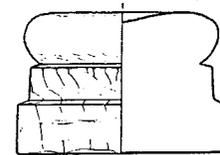
(1)



(2)



(3)



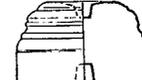
(4)



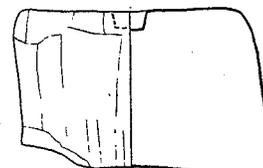
(5)



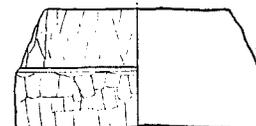
(6)



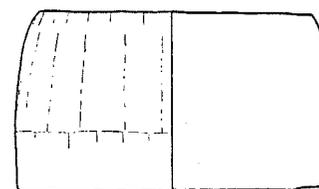
(7)



(8)

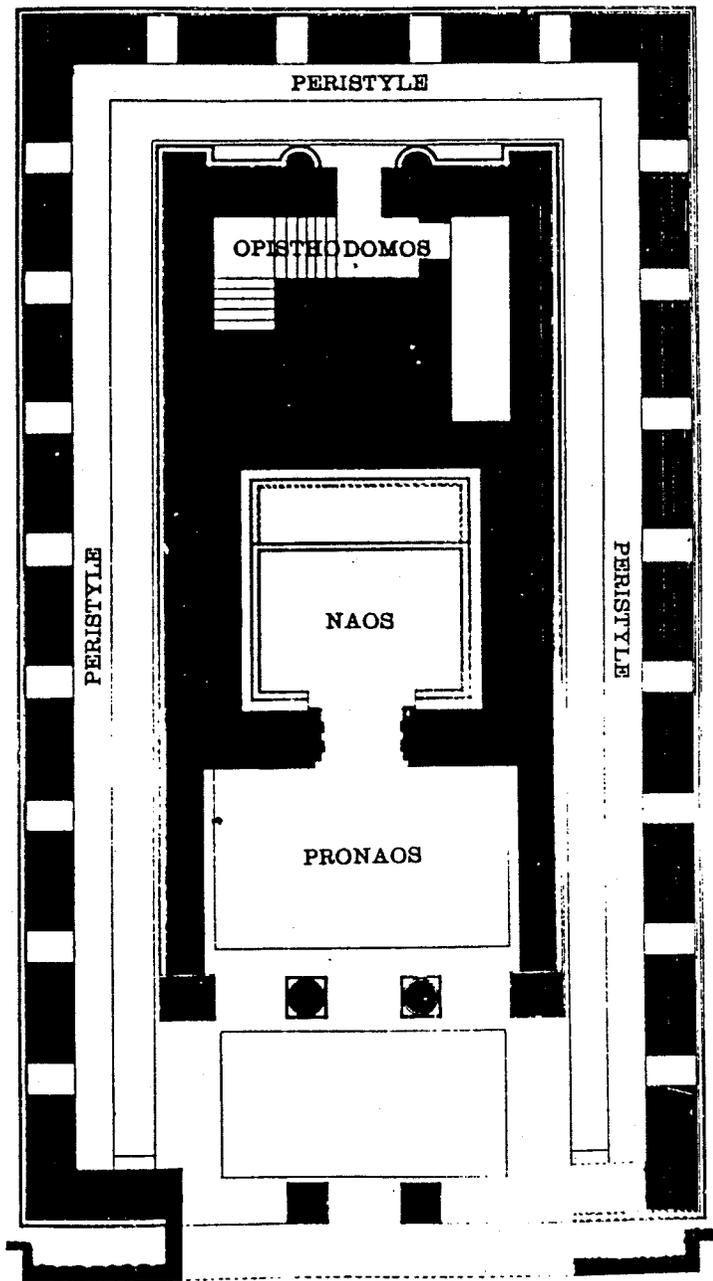


(9)

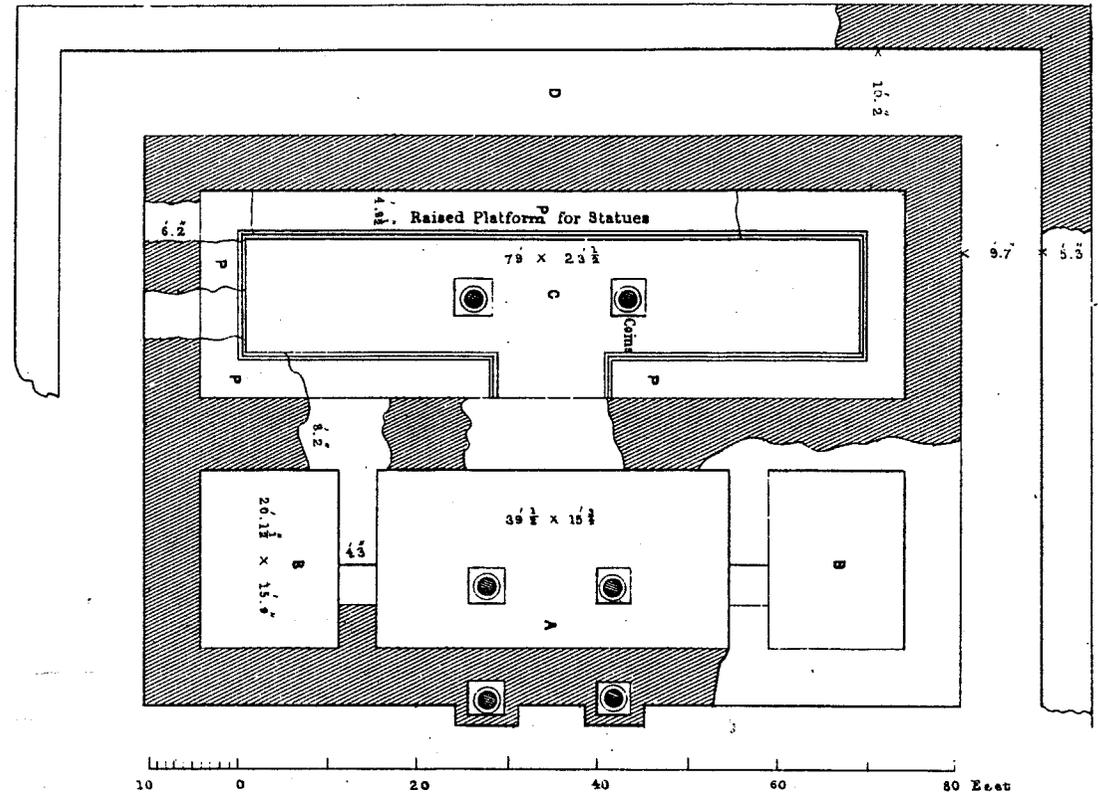


(10)

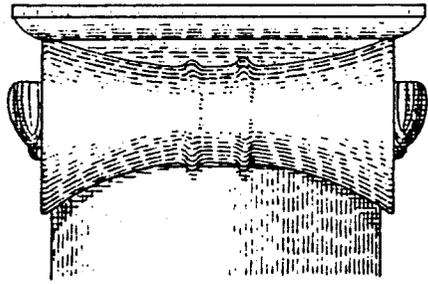
6 柱礎 1-3 ア-イ=ハ-ヌム, No.1-No.8 ドゥルマン=テハ°, (1)-(10) チャカラフ=テハ°



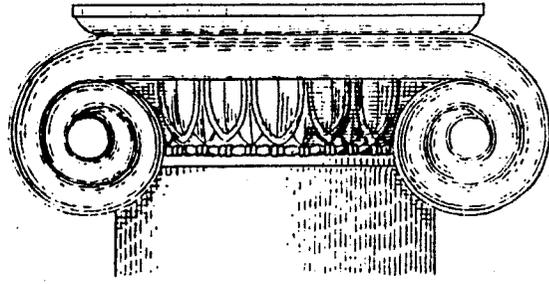
(1) ジャンティアル



(2) モフラー=マリアラーン

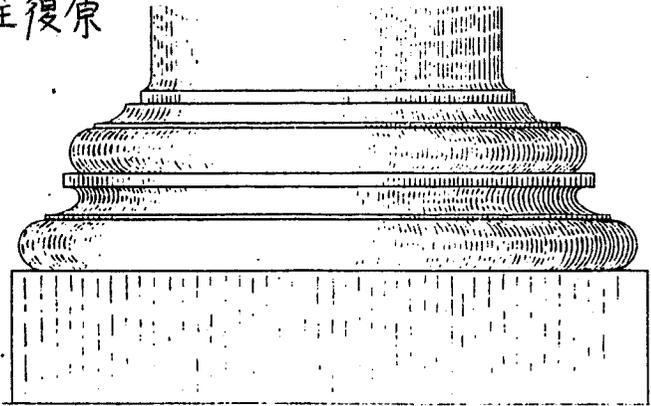


a



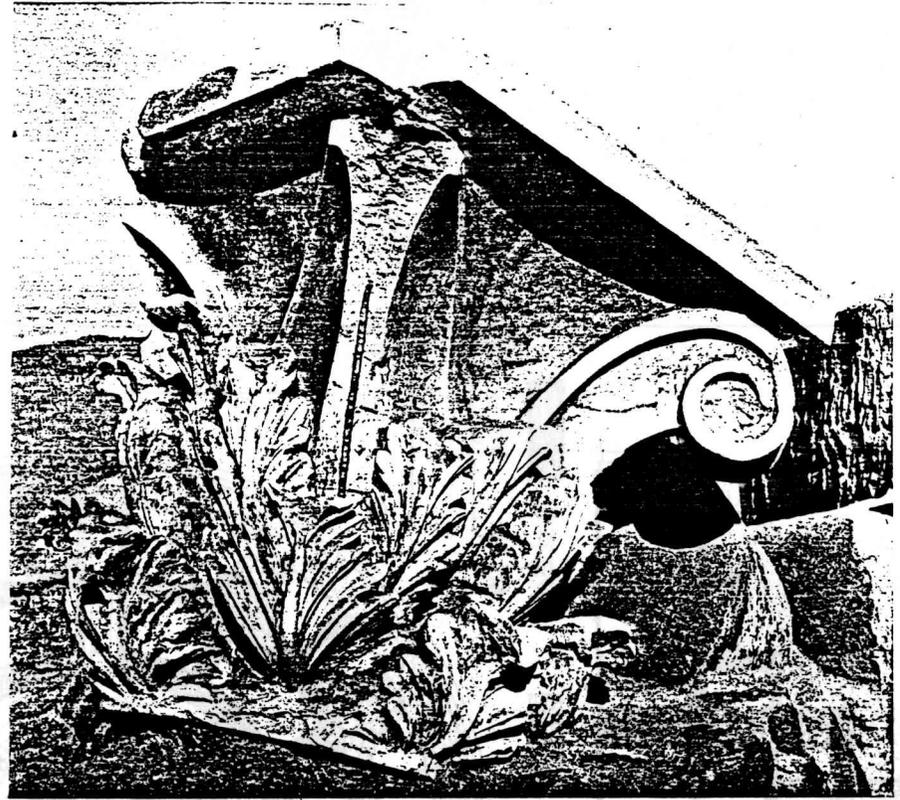
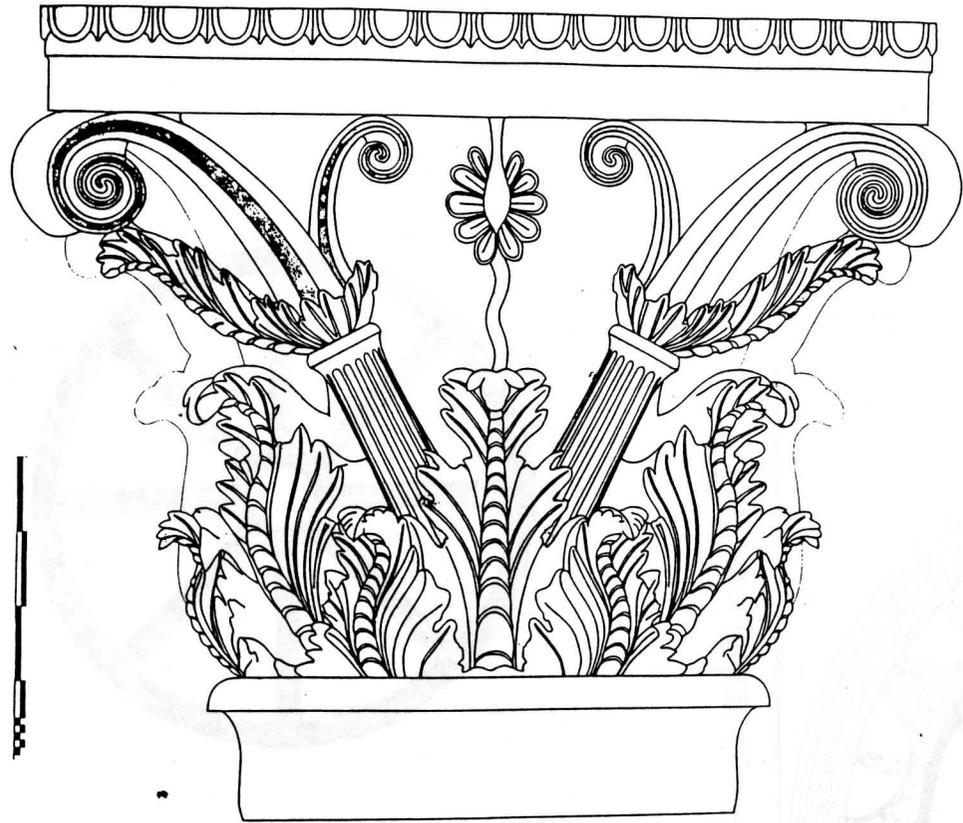
b

(3) ジャンティアル柱復原

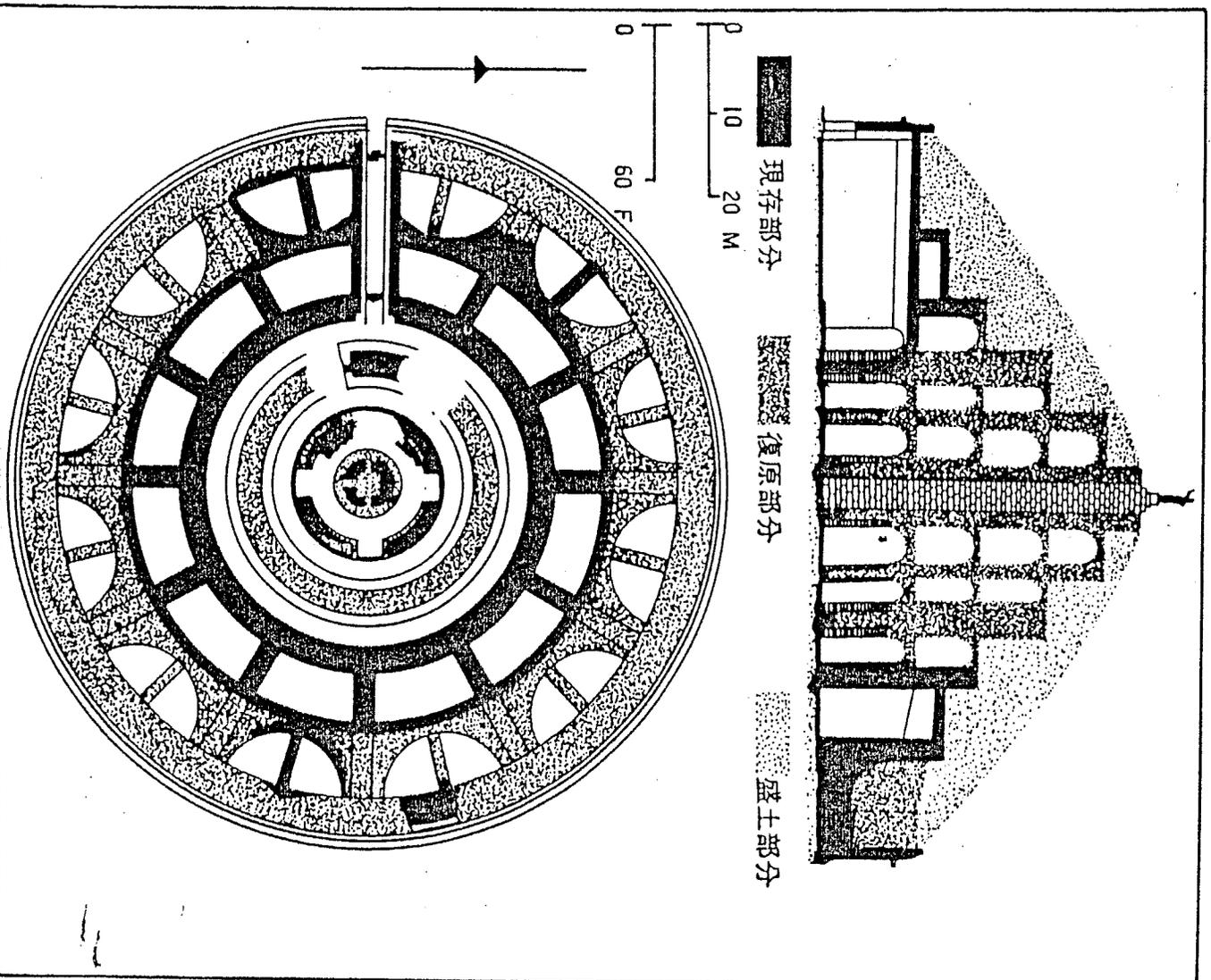


In. 12 0 1 2 Ft. Scale

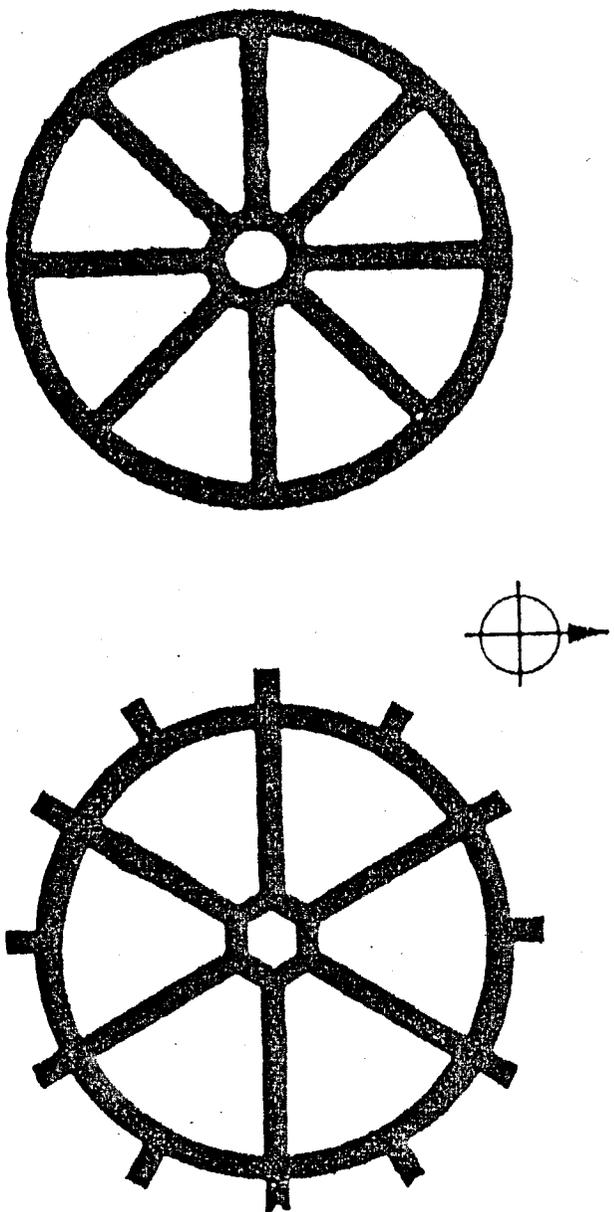
7. タキシラの神殿



8 アイ-ハ-74 柱頭

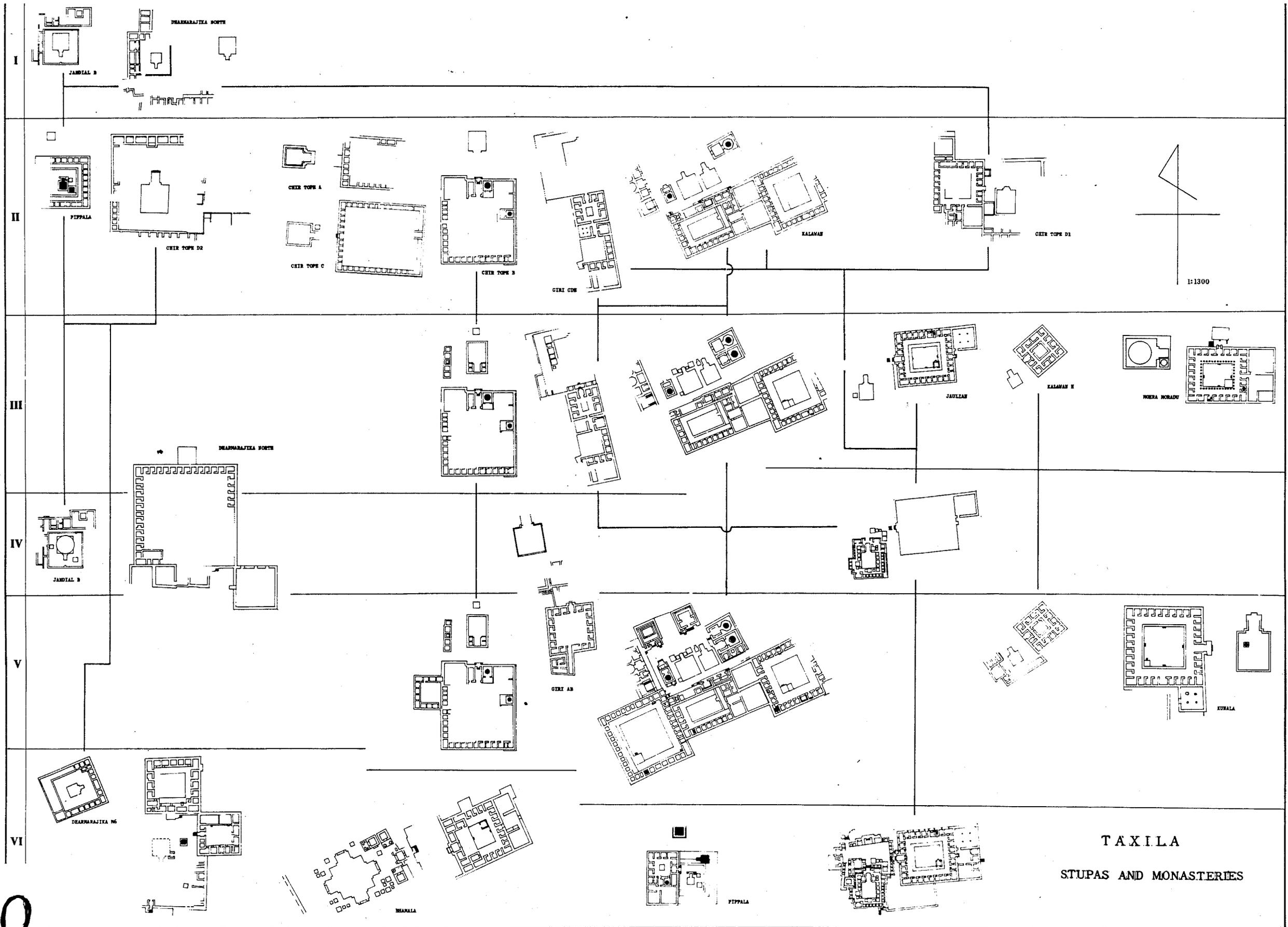


メジノミヤノ 皇帝廟 (『ローマ美術』新潮社、1974、493) 図による
 プラタニア

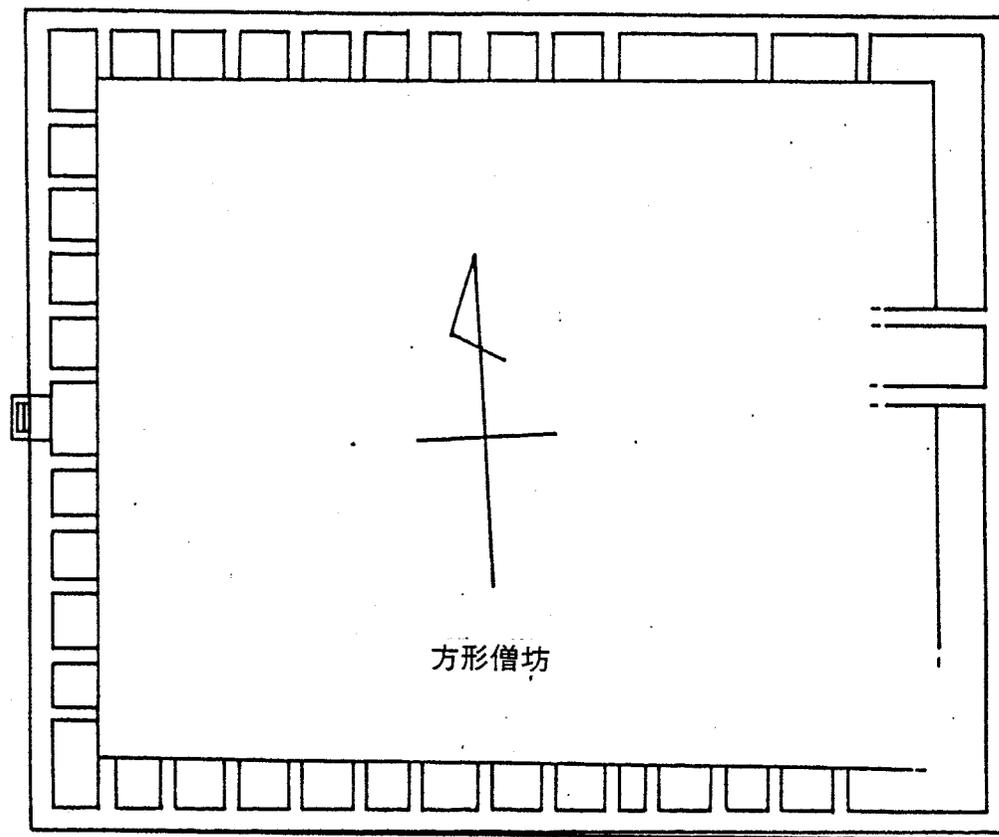
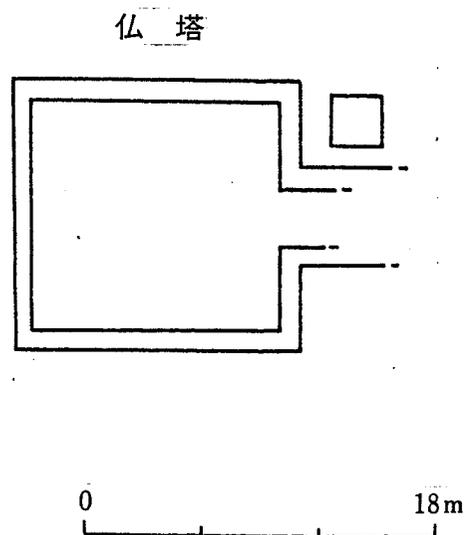


車輪状構造の墳墓, 左) ローマ, 右) プラタニア

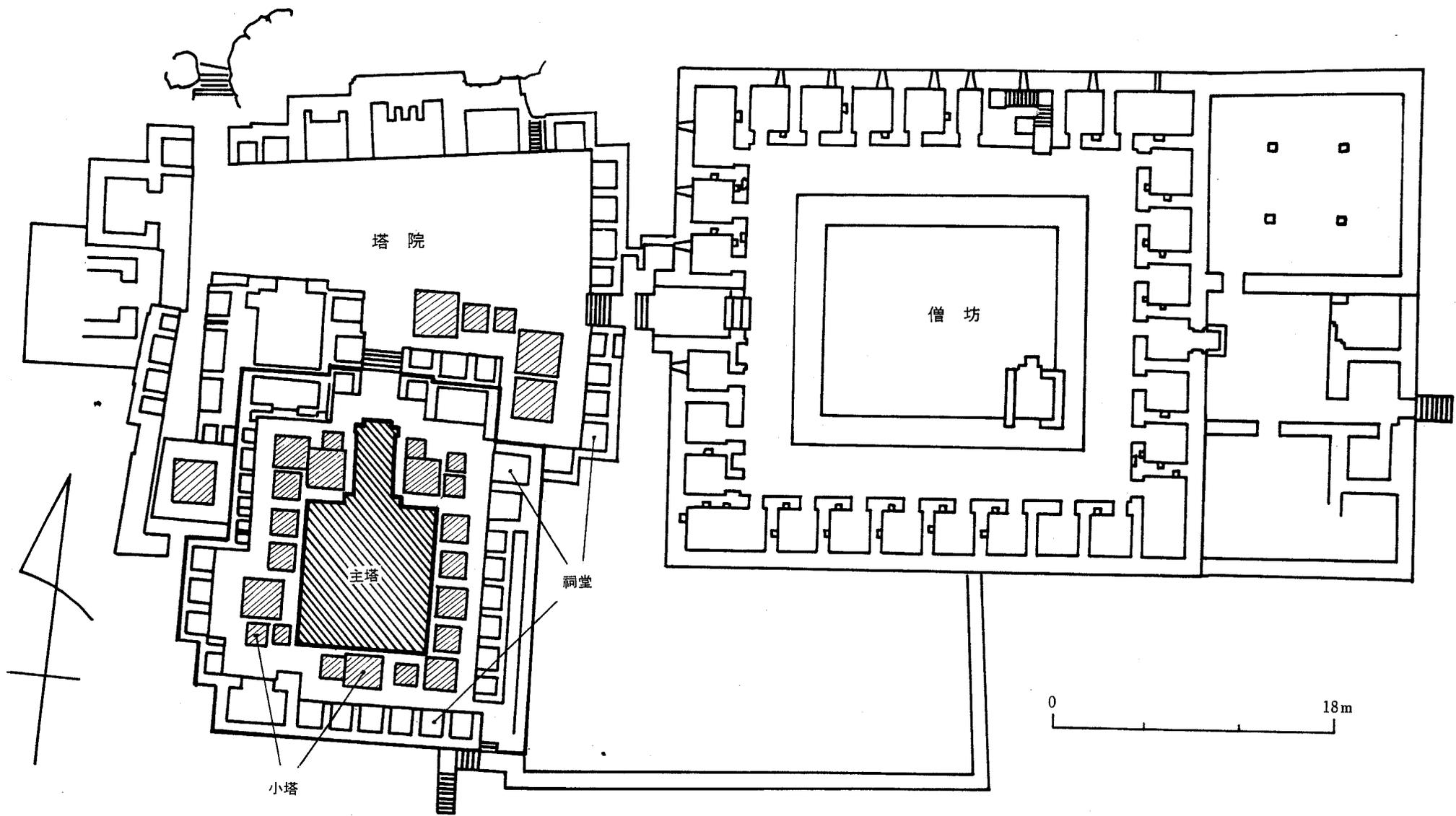
9 車輪状構造の墓廟建築



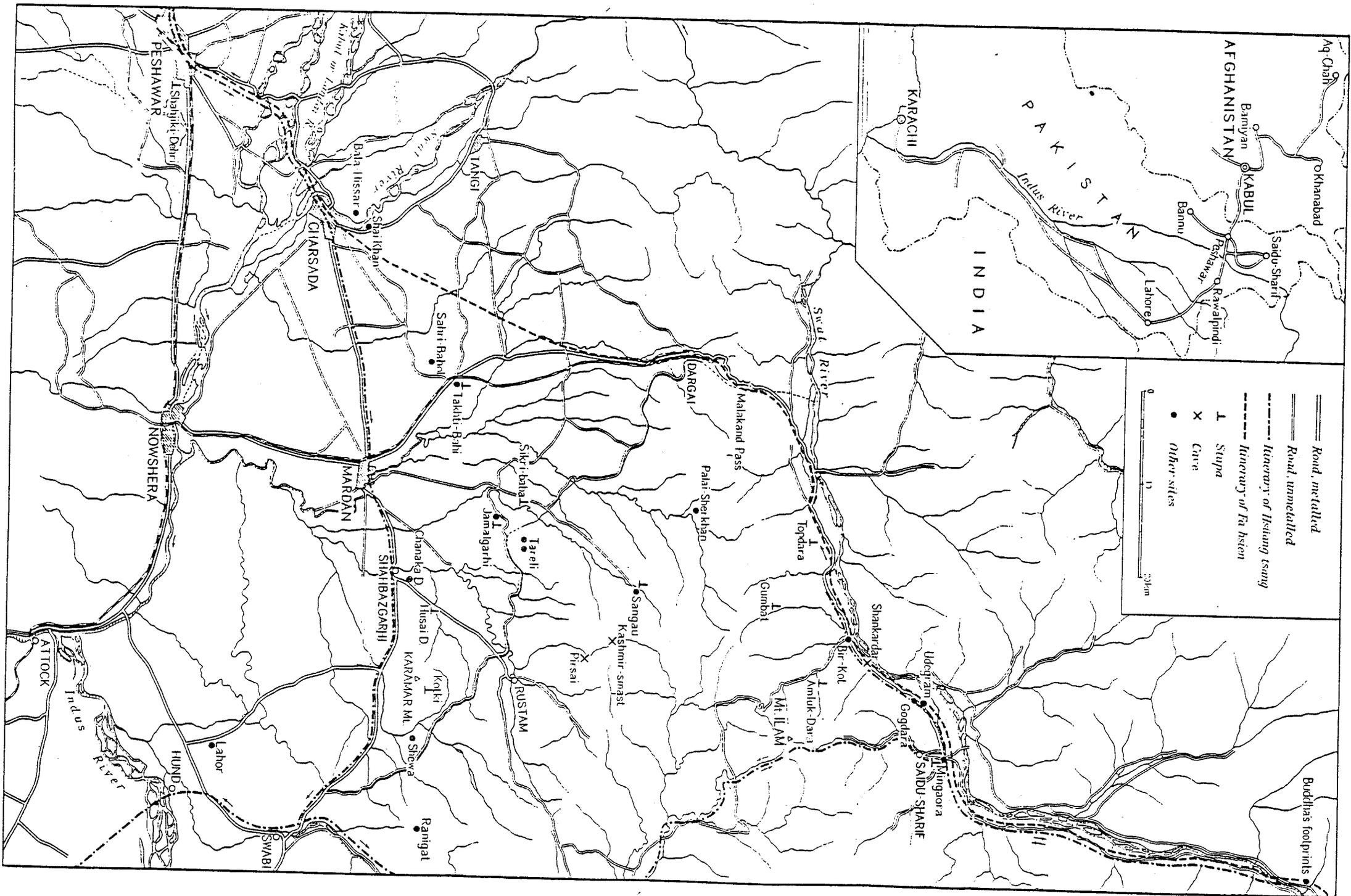
TAXILA
STUPAS AND MONASTERIES

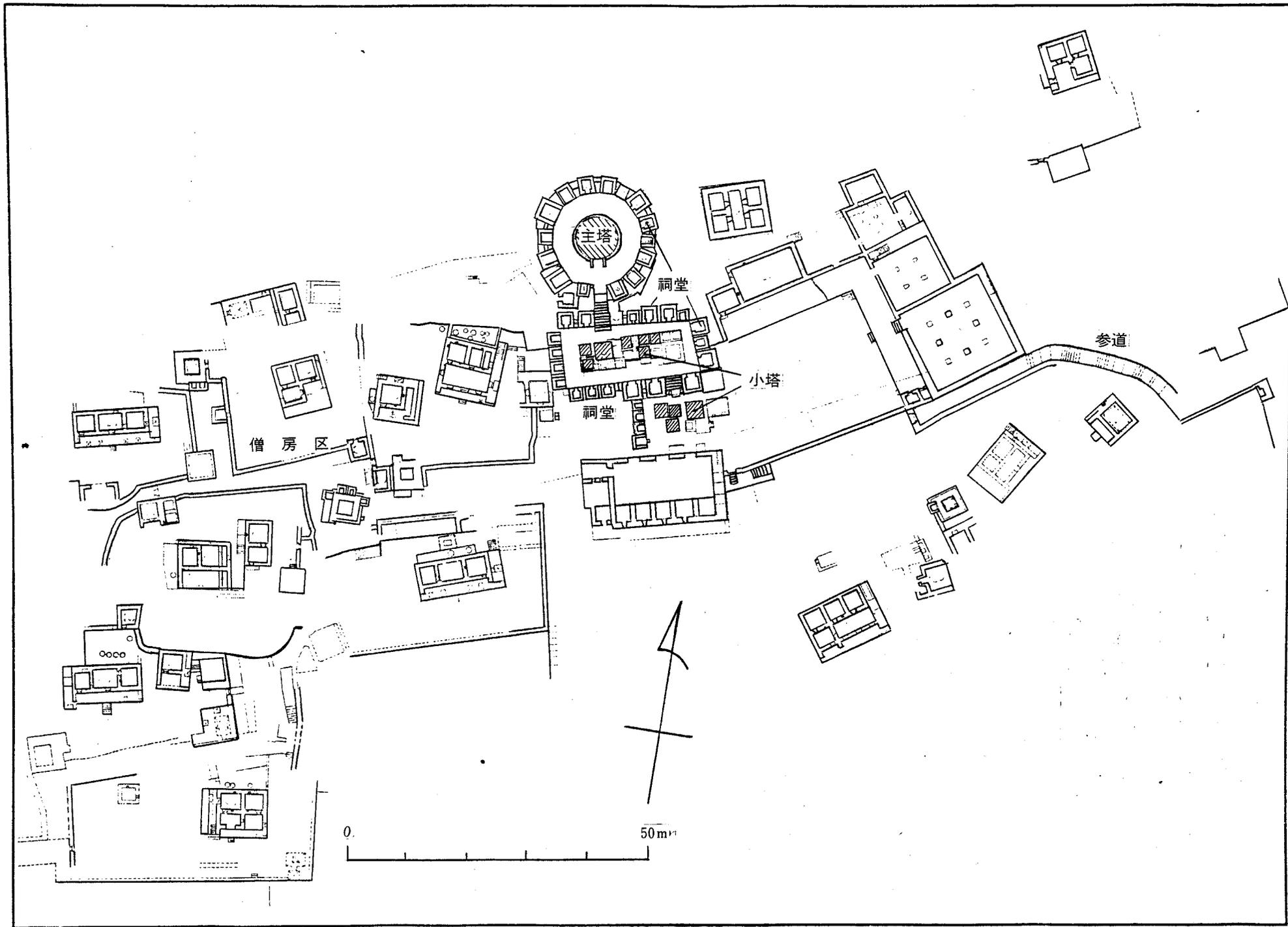


11 タキシラ佛寺の基本セット(クナーラ)



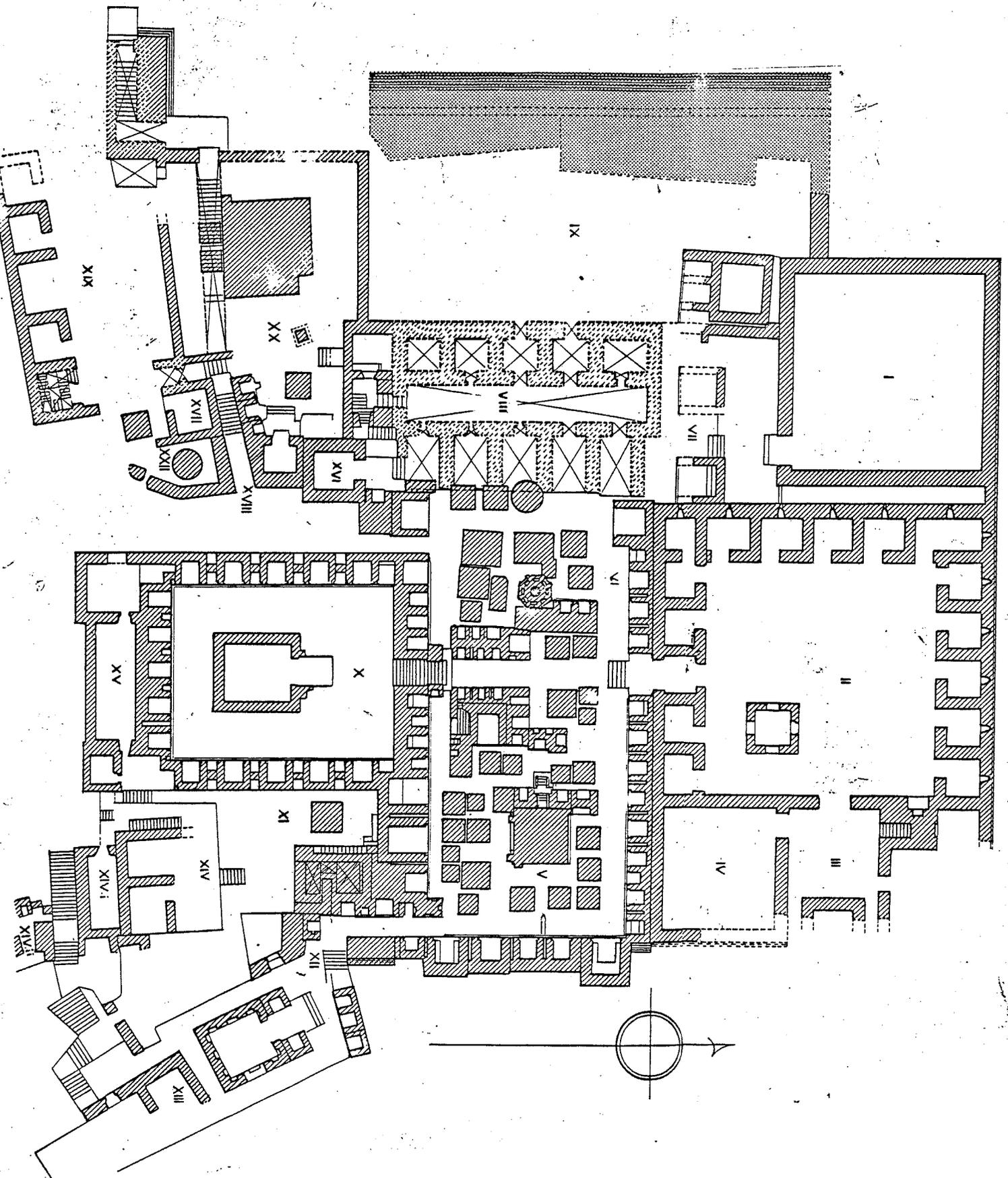
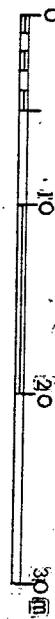
12 ジャウリアーン平面圖（最終段階）



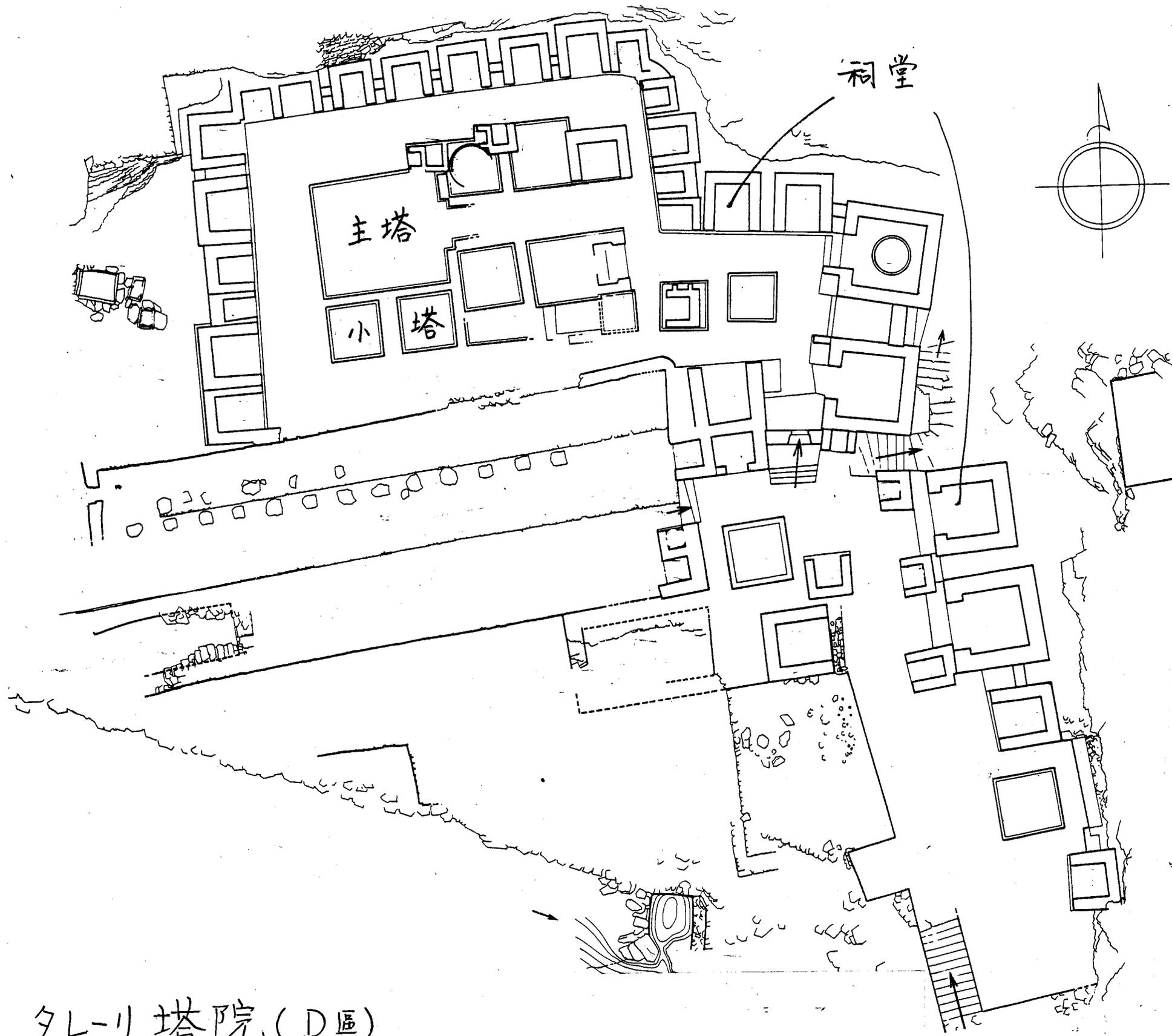


14 ジャマール=ガリ平面圖

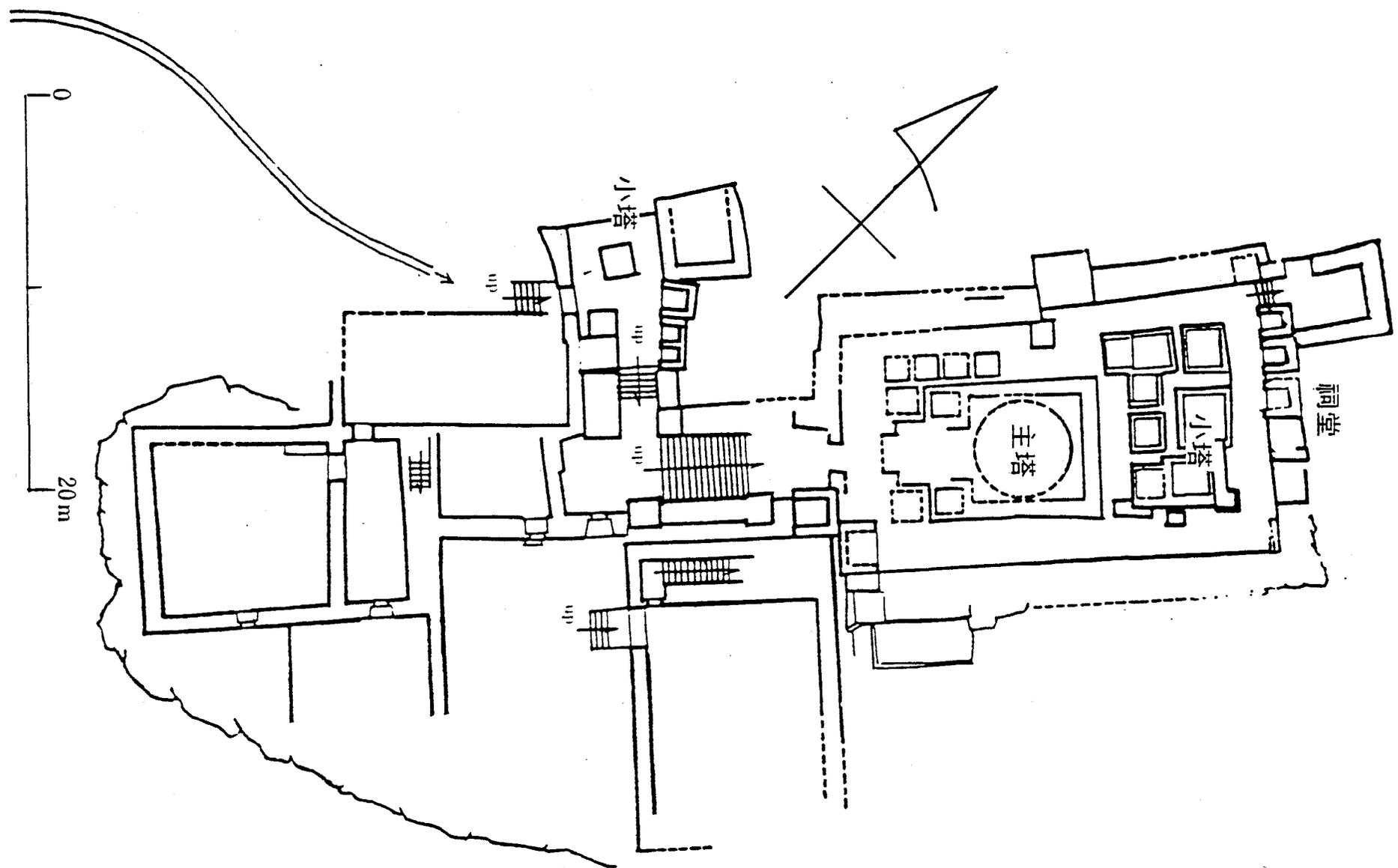
TAKHT-I-BAHI



15 タフテ=バーイ-平面圖

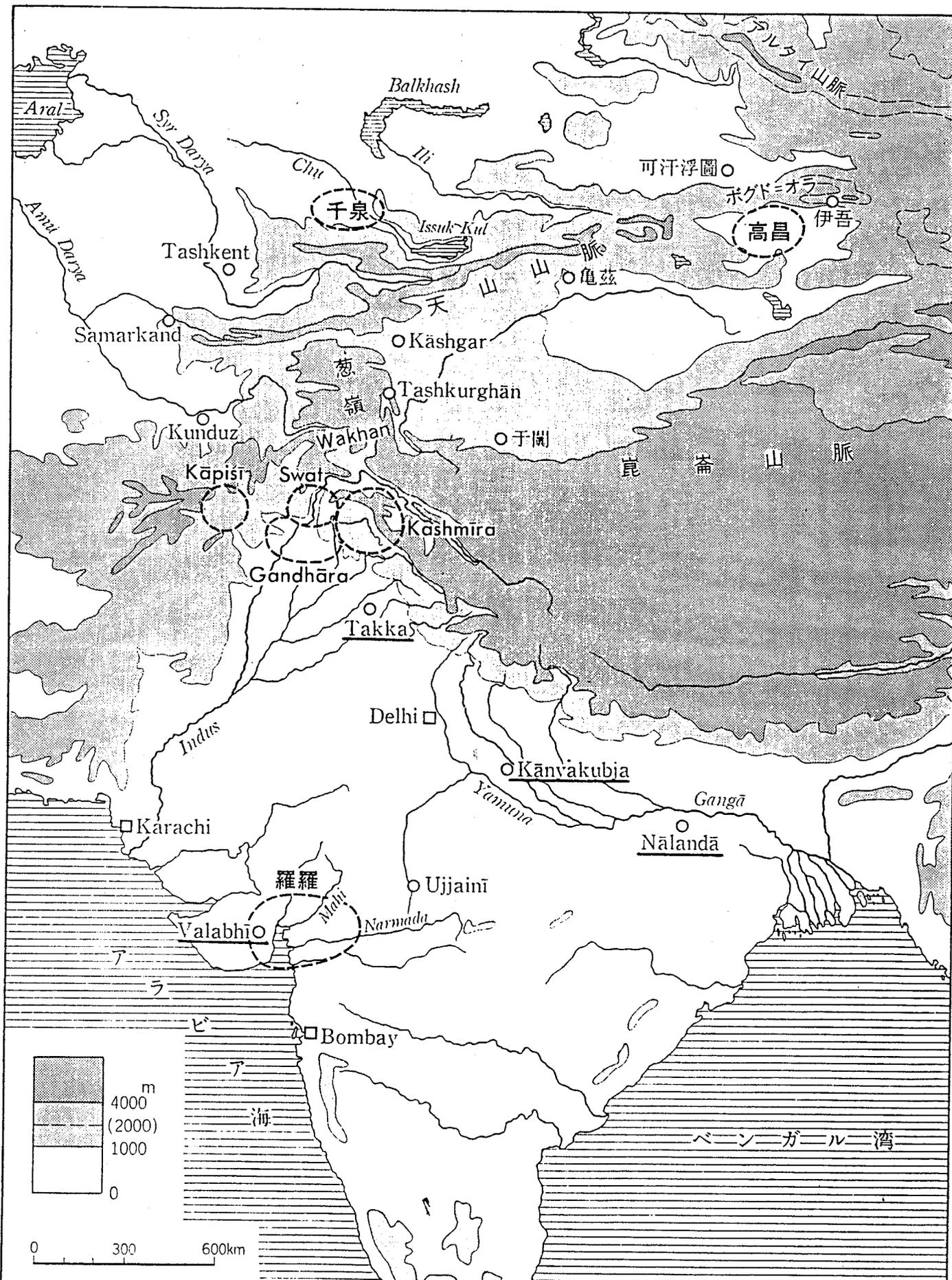


16 ターリ塔院(D區)



17 メハ=サンダ塔院





インド・中央アジア要圖



21 二商主奉妙蜜圖 (パシヤール博物館)

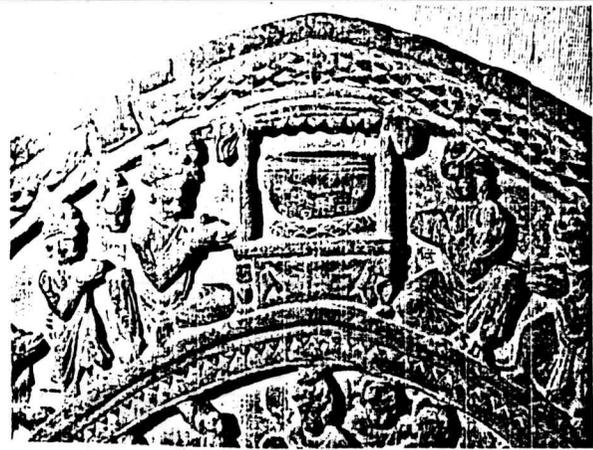
カラコルム-ヒンドク-交通路圖



23

四天王奉鉢圖
(三ホ一ル博物館)

24 佛鉢



1



2



3



4



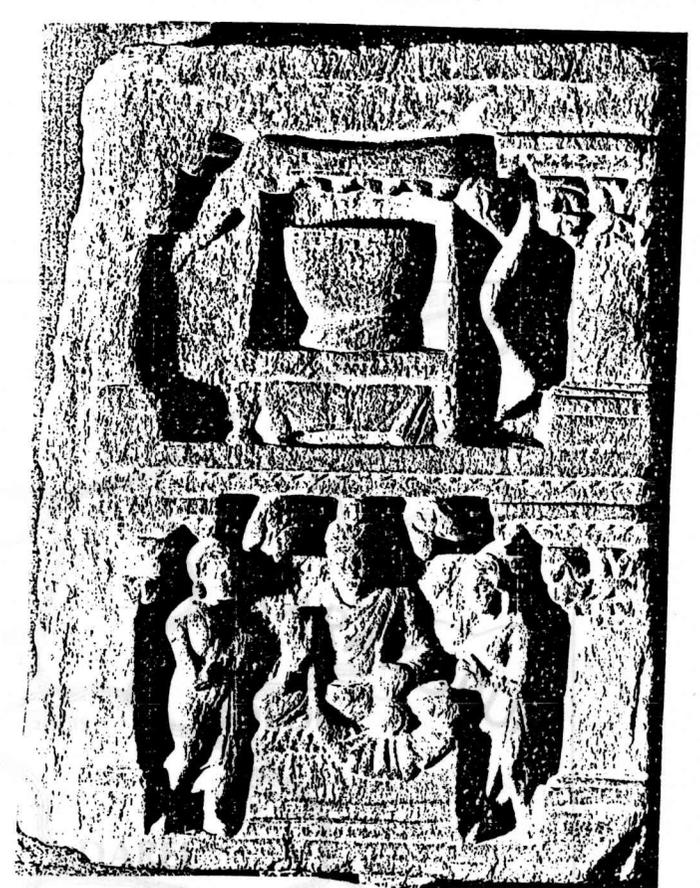
5



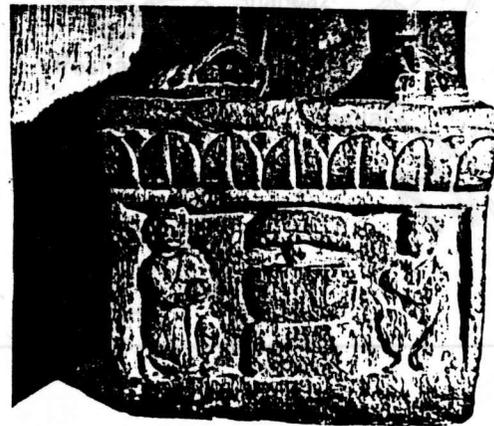
6



7



9



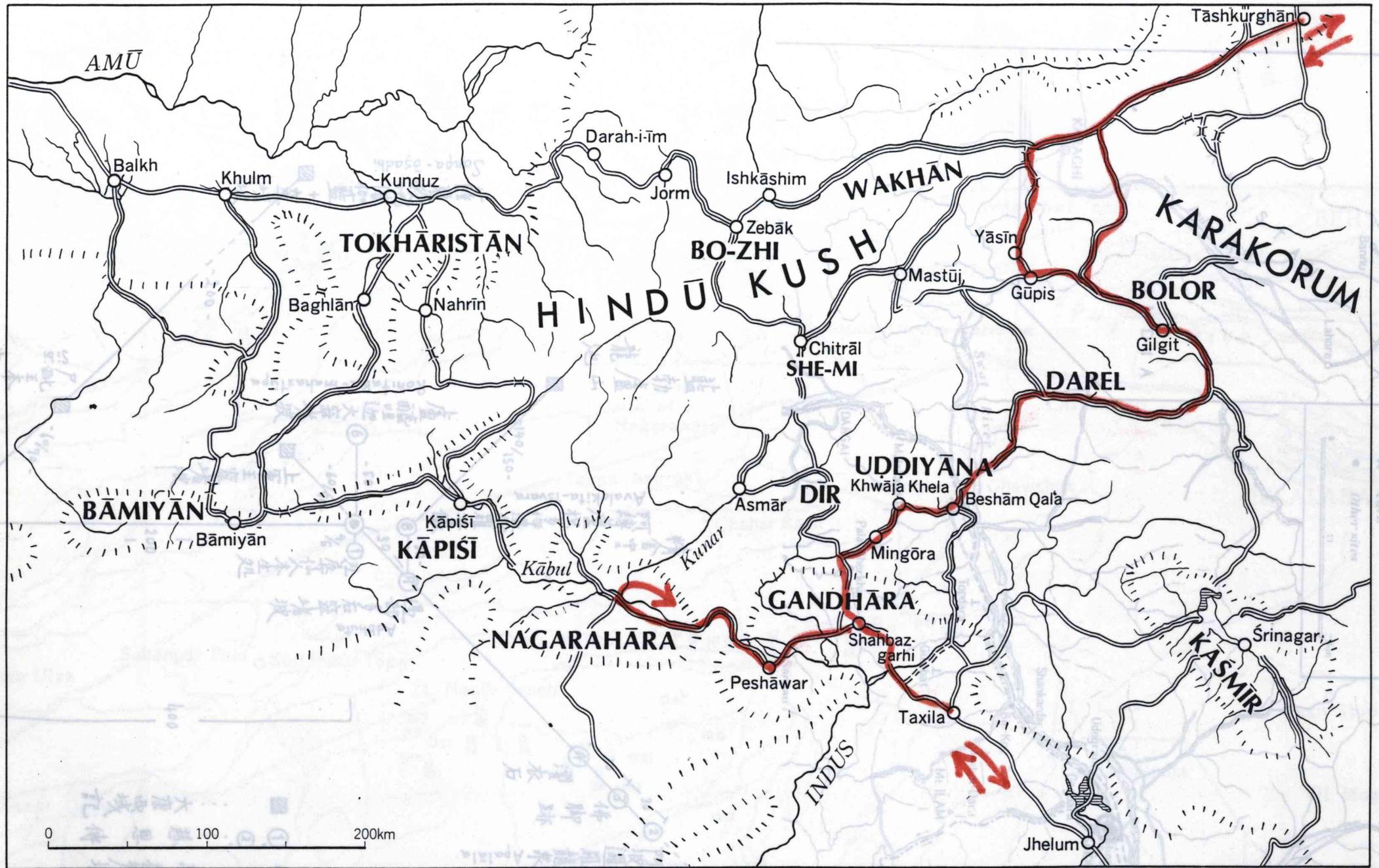
8



10

24 佛鉢供養圖

1, 3, 6-9, ラホ-ル博物館, 2, 4, 5 ペシャ-ワル博物館, 10 カラチ国立博物館

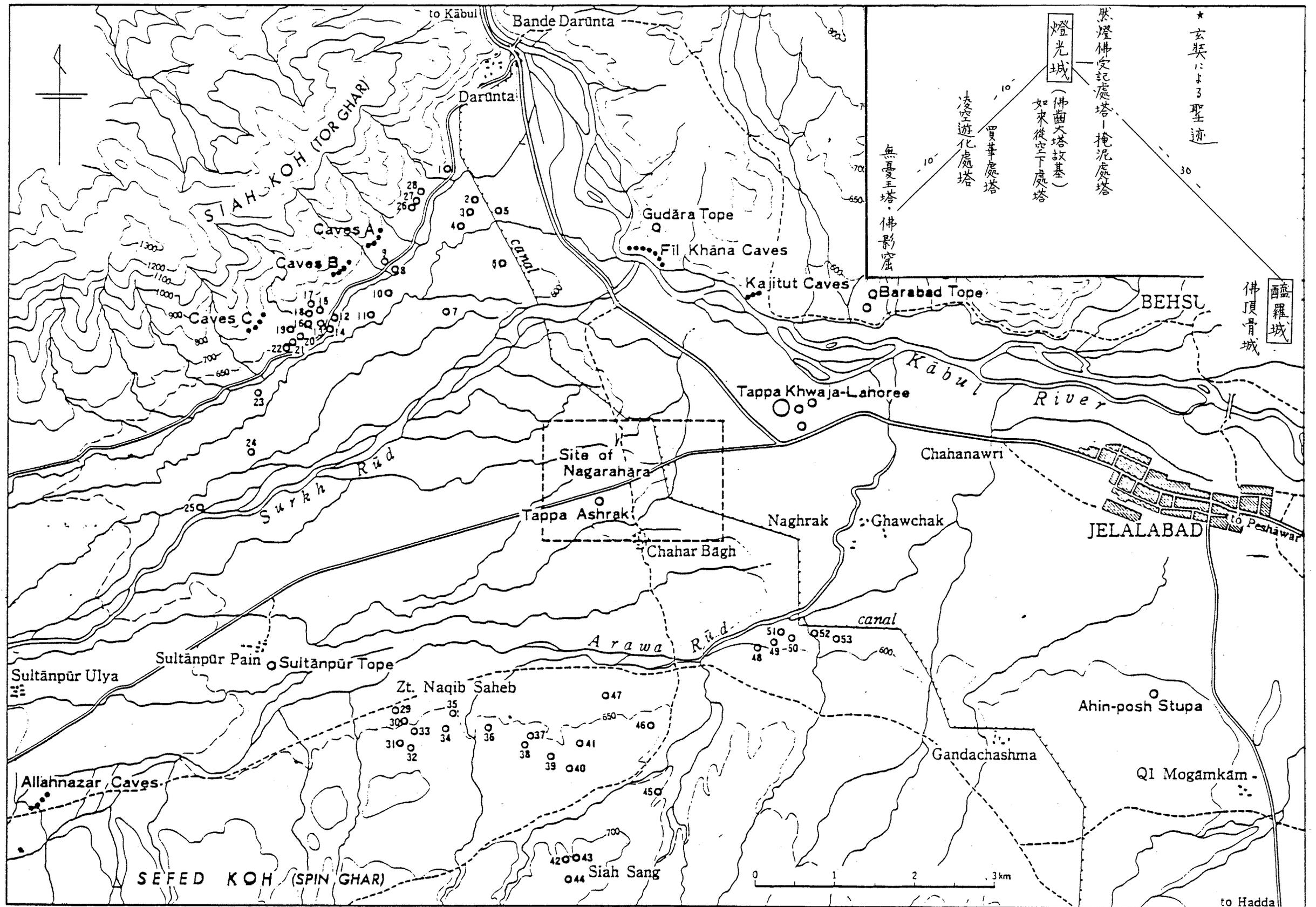


25

4-5世紀佛僧往來ルート

26

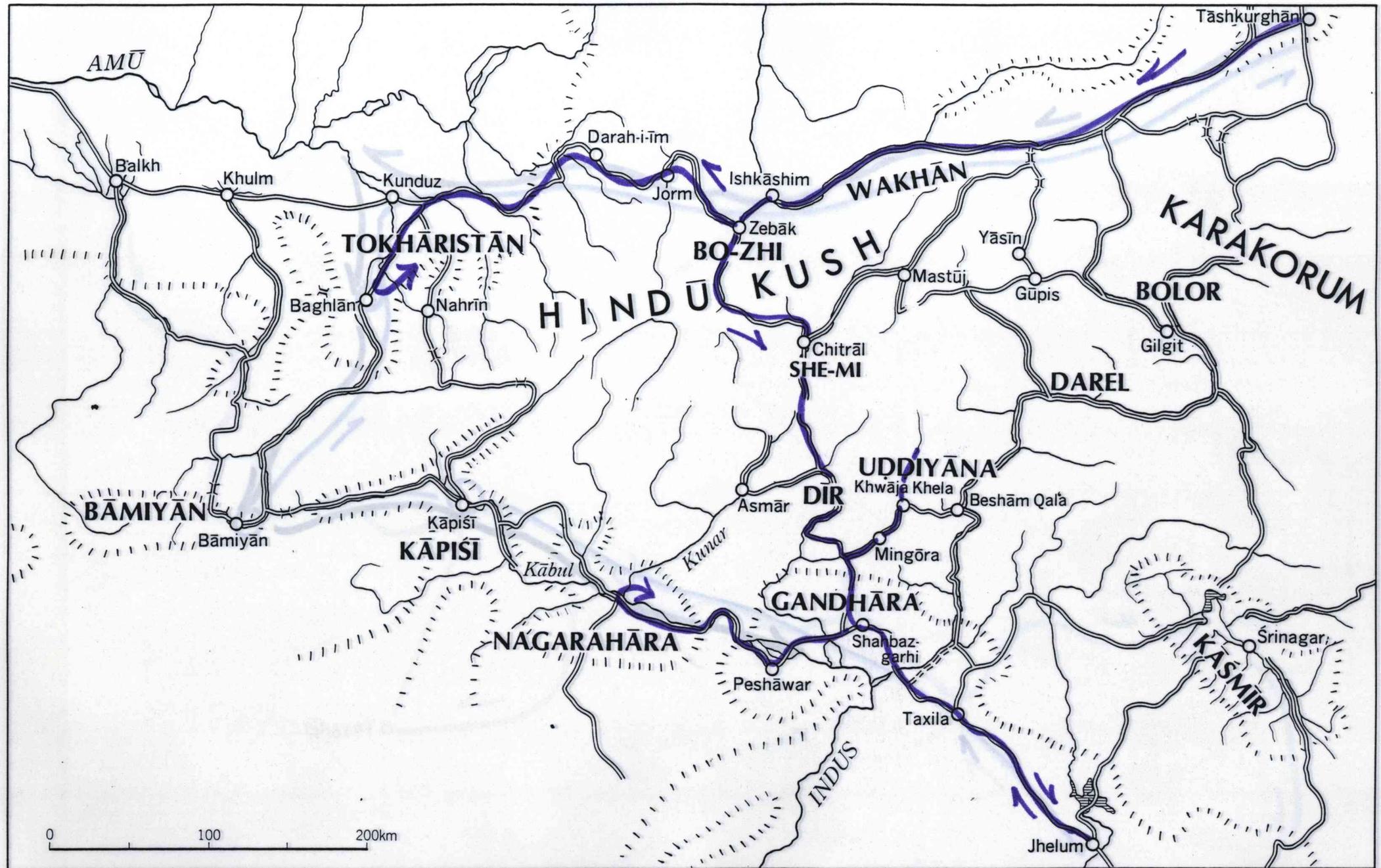
玄奘によるウッディヤーナの聖迹



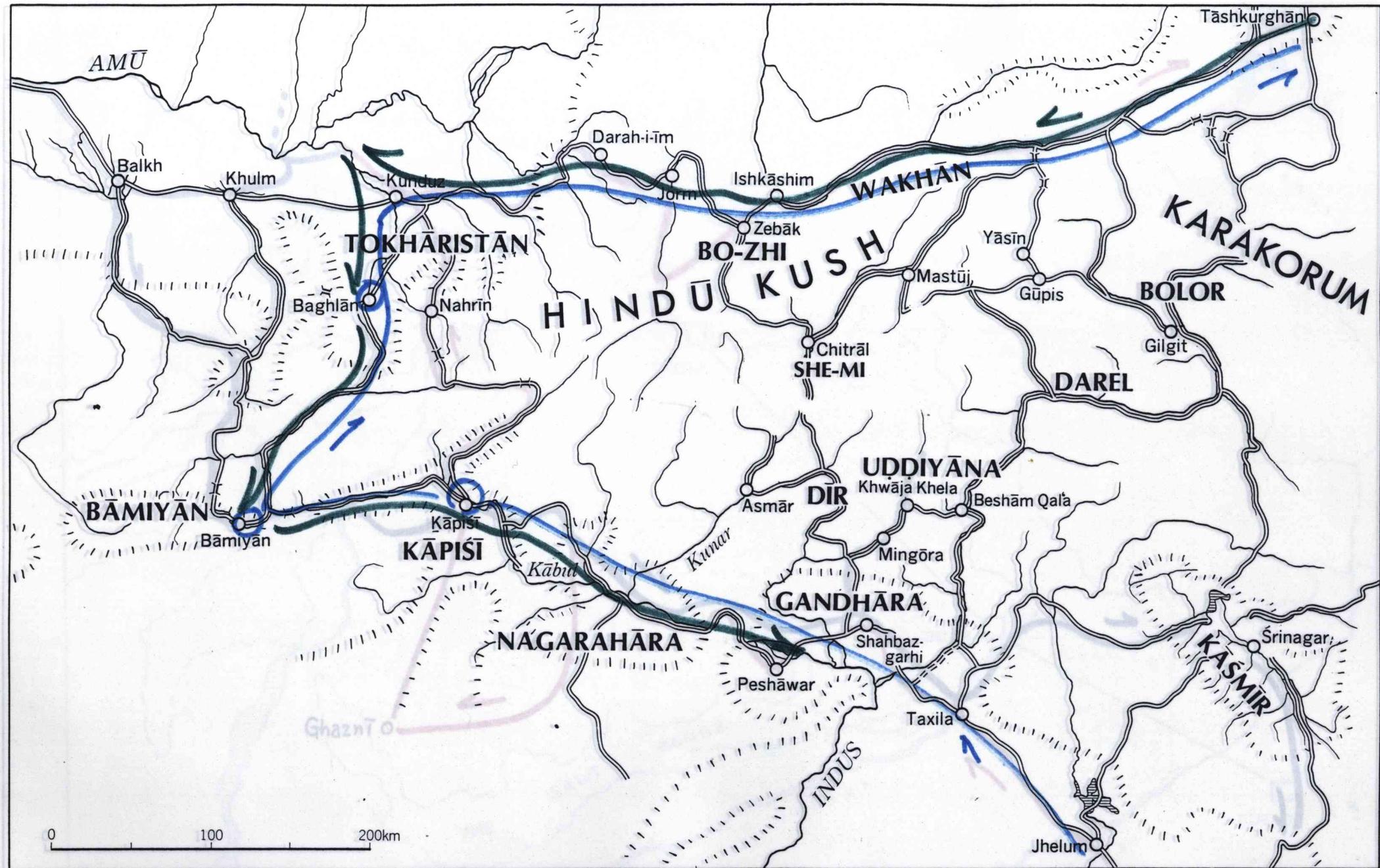
ジャラーラーバード遺跡分布図

Archaeological Map of Jalalabad

○ ストゥーパ ● 石窟

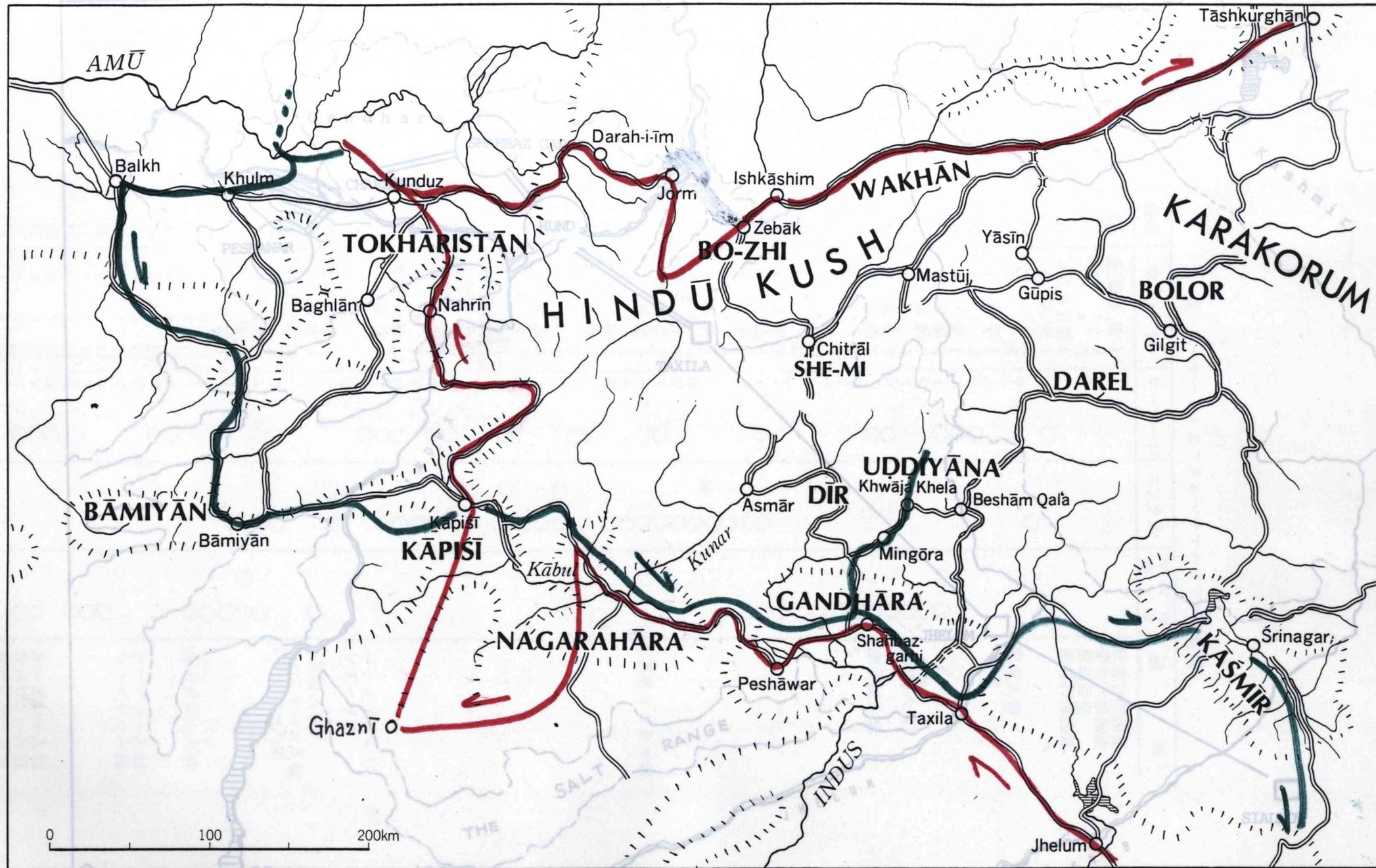


宋雲・慧生ルート
 西域記の南道の葱嶺以西路 →
 ジナグプタ・ダルマグプタ 経路 →



29

『西域圖記』南道の葱嶺以西路 →
 जिनाग्रता・दुर्माग्रता 經路 →

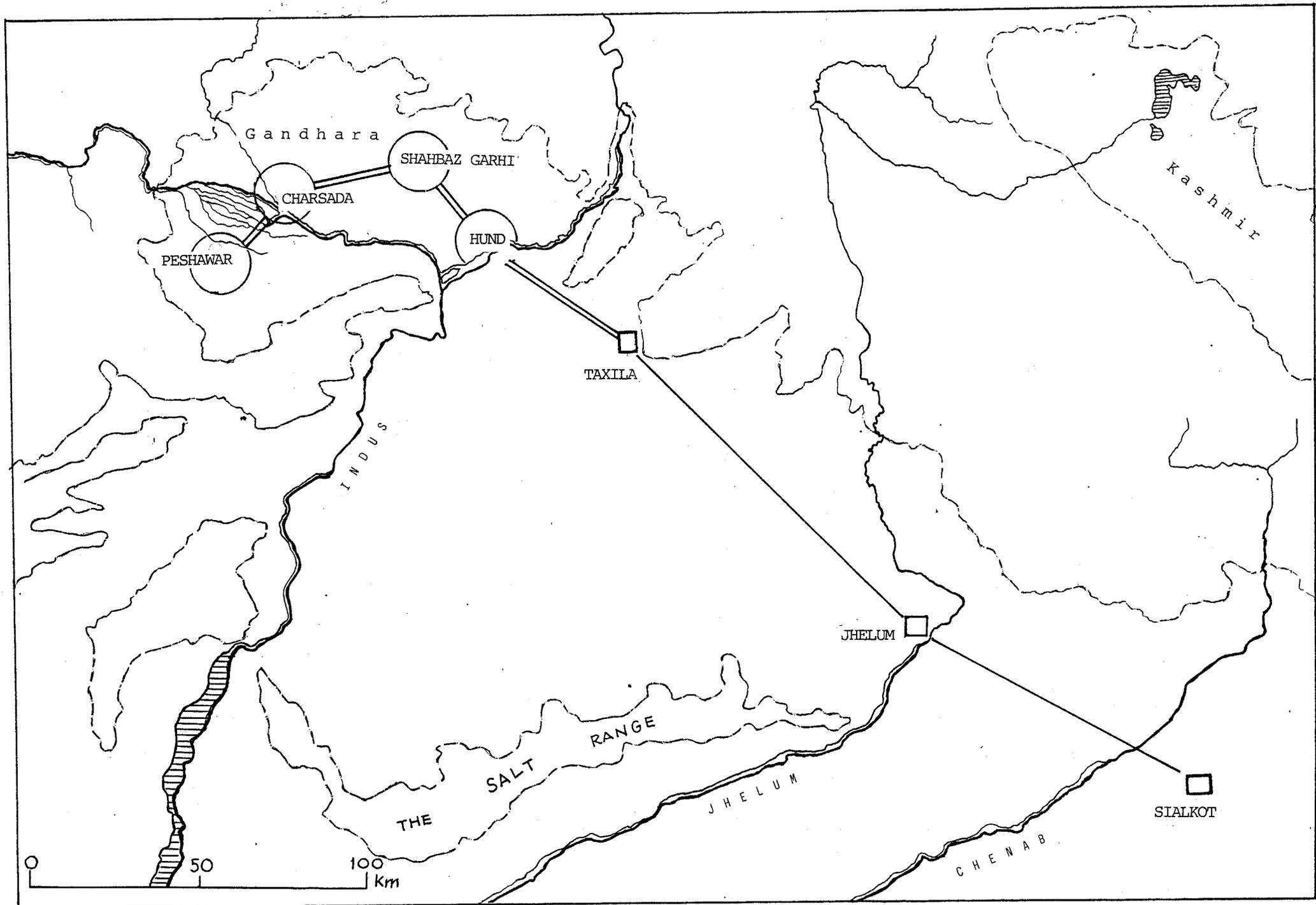


30

玄奘往(一)還(一)路

31

ガンダーラ カシミール シアルコトの位置

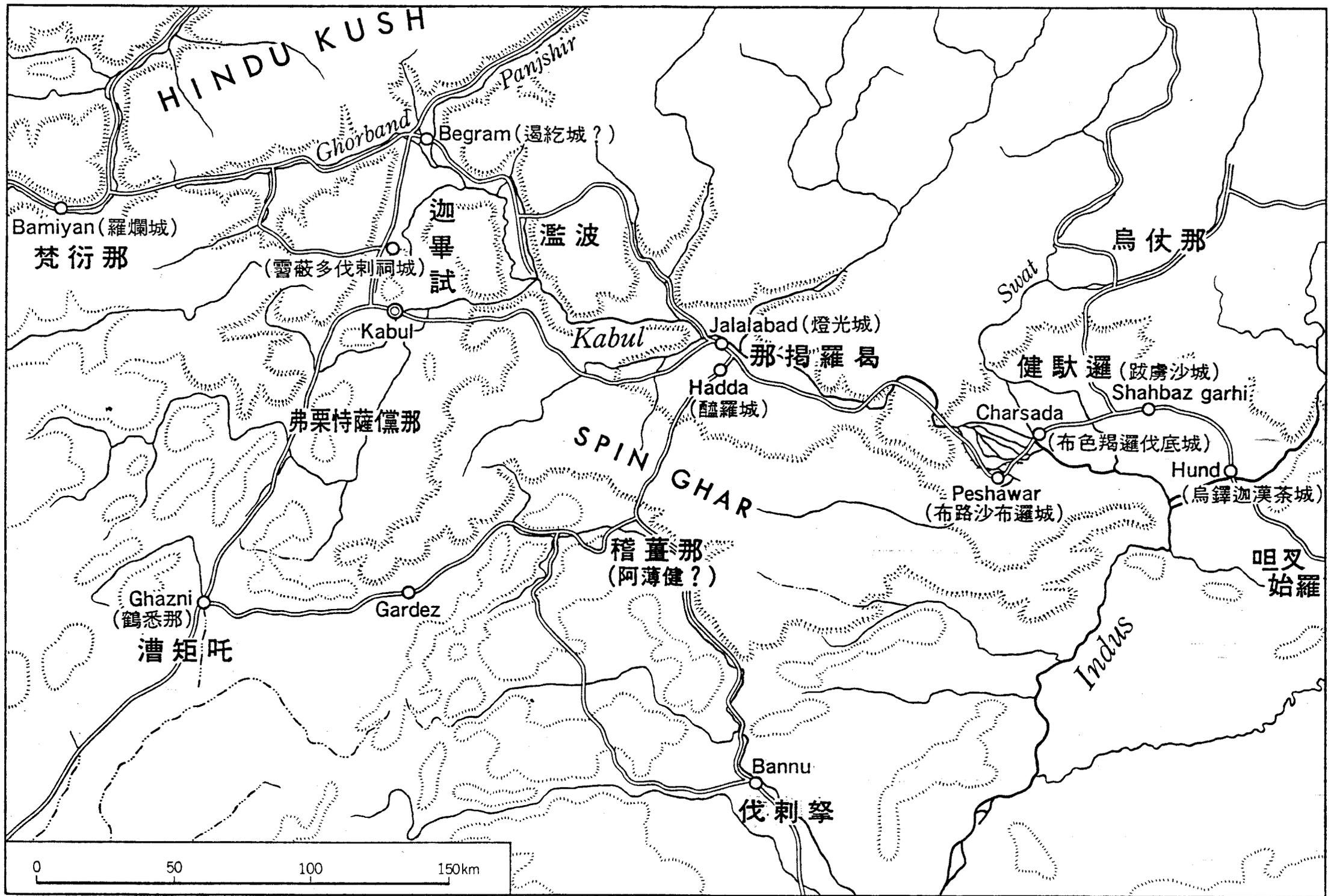


31 ガンダーラ、カシュミラ、シアルコトの位置

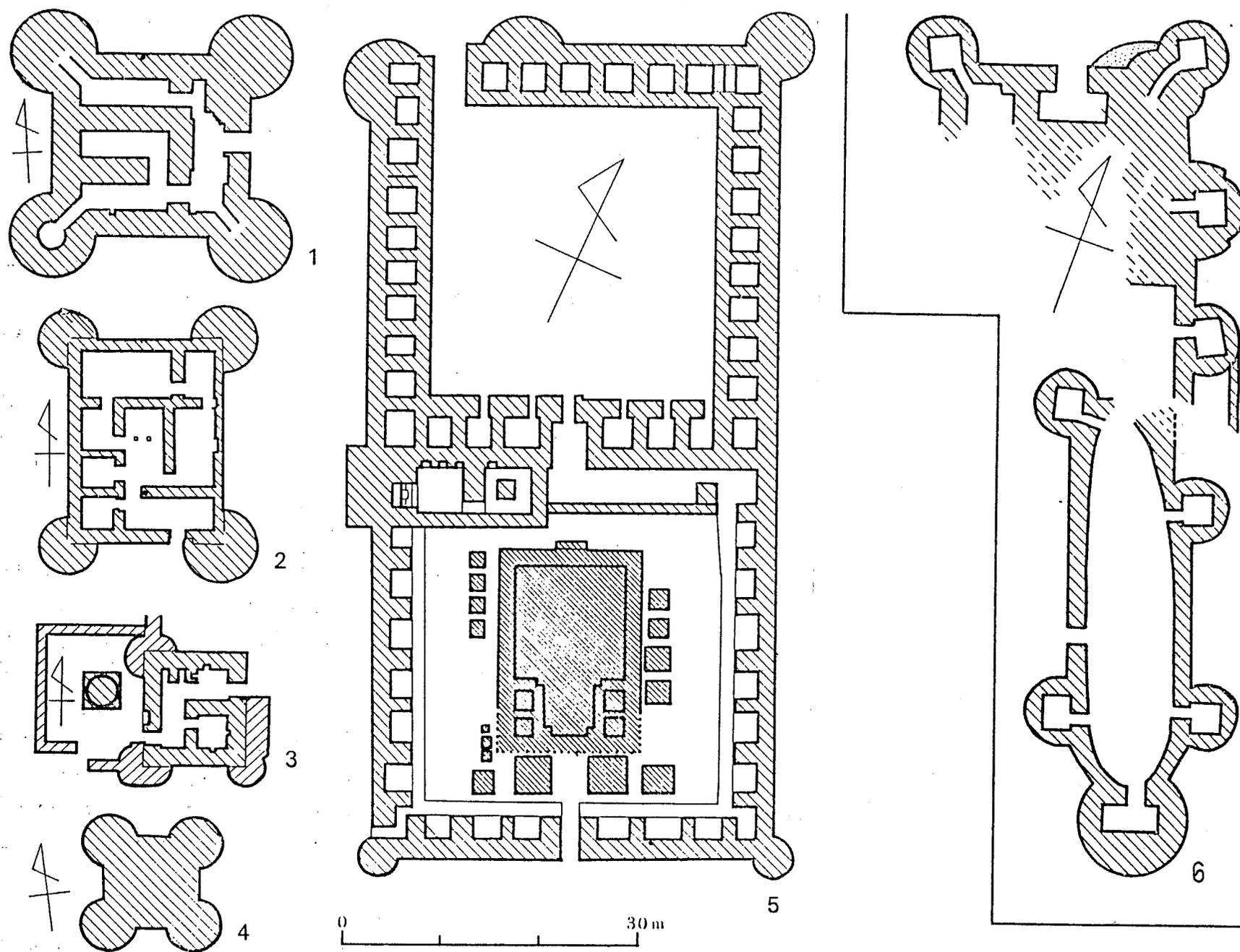
表 サーサーン・エフタル・サマルカンドの朝貢

西暦	中 國	サーサーン	エフタル	サマルカンド	備 考
435	北魏 太延 1				使者 甘犂西使 董瓌西使 董瓌西使
36	北魏 太平 2	○	○		居常入朝
37	北魏 太平 3				
44	北魏 太平 4				
455	北魏 太平 5				
56	北魏 太平 6				
59	北魏 太平 7				
60	北魏 太平 8				
61	北魏 太平 9				
66	北魏 太平 10				
68	北魏 太平 11				
73	北魏 太平 12				
74	北魏 太平 13				
76	北魏 太平 14				
77	北魏 太平 15				
79	北魏 太平 16				
80	北魏 太平 17				
87	北魏 太平 18				
91	北魏 太平 19				
502	北魏 太平 20				
07	北魏 太平 21				
09	北魏 太平 22				
11	北魏 太平 23				
12	北魏 太平 24				
13	北魏 太平 25				
16	北魏 太平 26				
17	北魏 太平 27				
18	北魏 太平 28				
19	北魏 太平 29				
20	北魏 太平 30				
21	北魏 太平 31				
22	北魏 太平 32				
24	北魏 太平 33				
25	北魏 太平 34				
26	北魏 太平 35				
30	北魏 太平 36				
32	北魏 太平 37				
33	北魏 太平 38				
35	北魏 太平 39				
37	北魏 太平 40				
46	北魏 太平 41				
553	北魏 太平 42				
55	北魏 太平 43				
58	北魏 太平 44				
64	北魏 太平 45				
615	北魏 太平 46				
16	北魏 太平 47				
24	北魏 太平 48				
27	北魏 太平 49				
35	北魏 太平 50				
37	北魏 太平 51				
38	北魏 太平 52				
39	北魏 太平 53				
40	北魏 太平 54				
42	北魏 太平 55				
43	北魏 太平 56				
44	北魏 太平 57				
45	北魏 太平 58				
46	北魏 太平 59				
47	北魏 太平 60				
48	北魏 太平 61				
649	北魏 太平 62				

33 (本文中にあり) 701頁参照



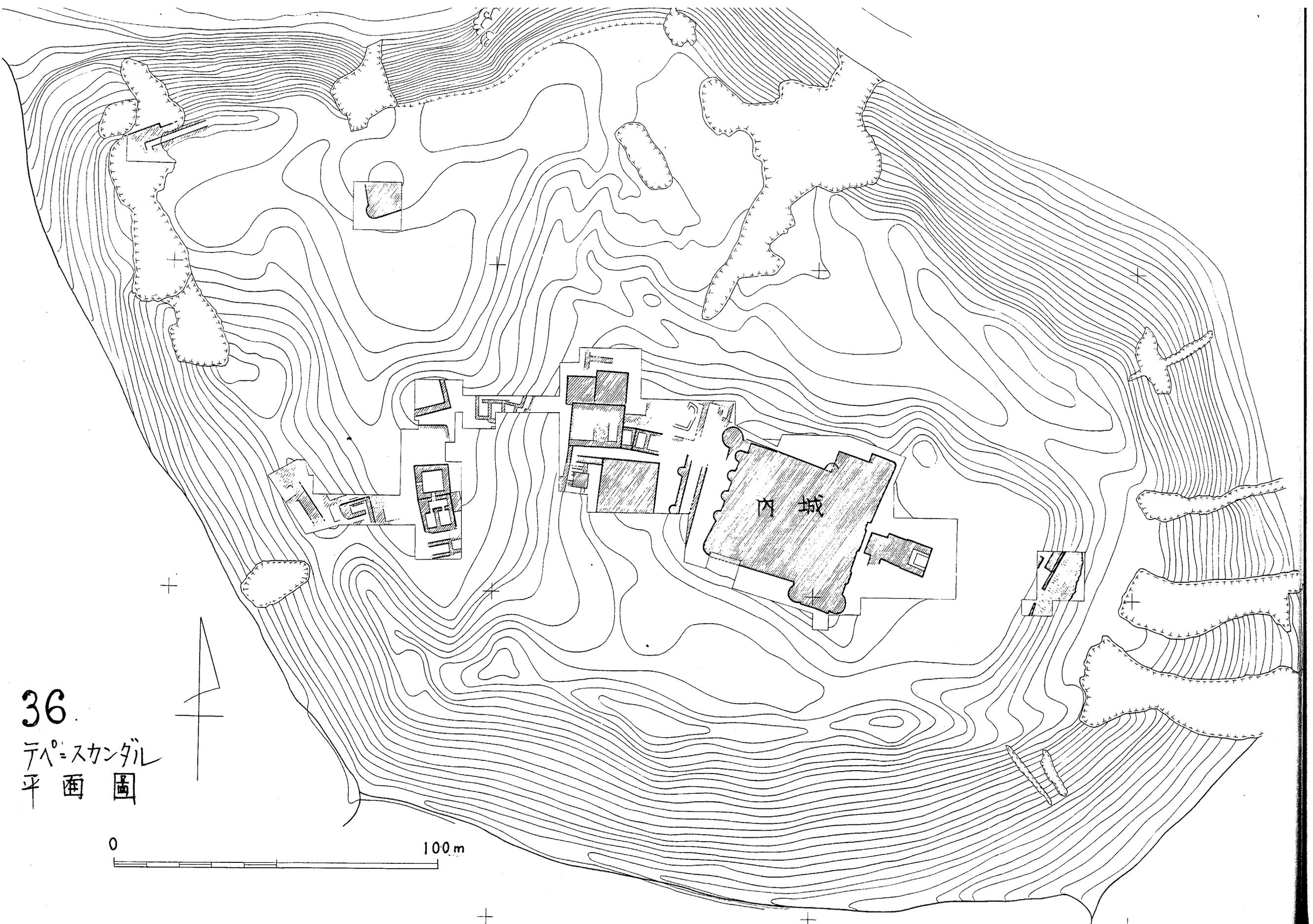
34 『大唐西域記』に記されたカーガル河流域



35

圓形稜堡の建築

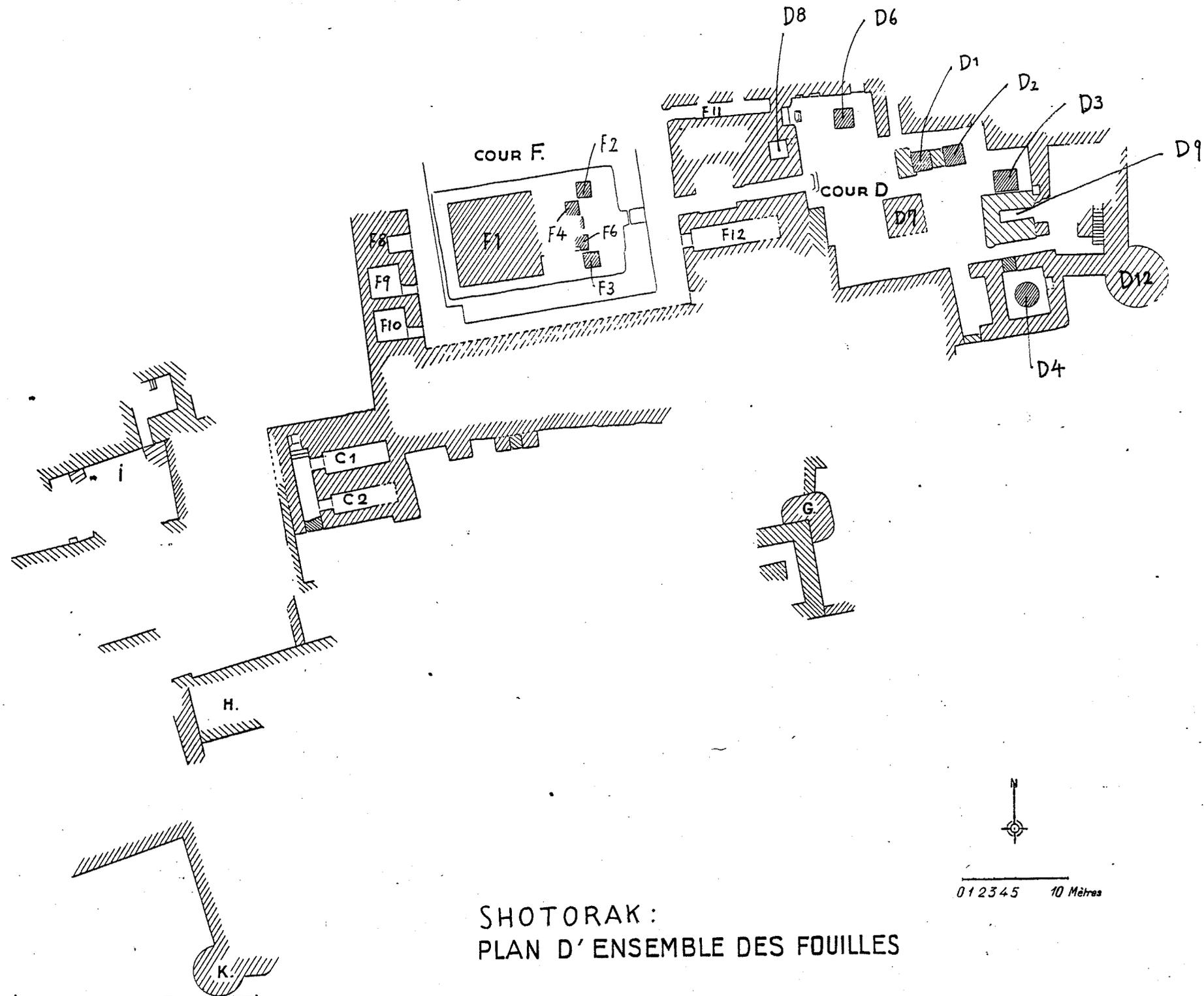
1. ベグラム市外, 2. ベグラム市内 3. テペ=マランジャン 4. ハイル=ハーナ
 5. バーグ=ガイ, 6. サカ (縮尺不明)



36.

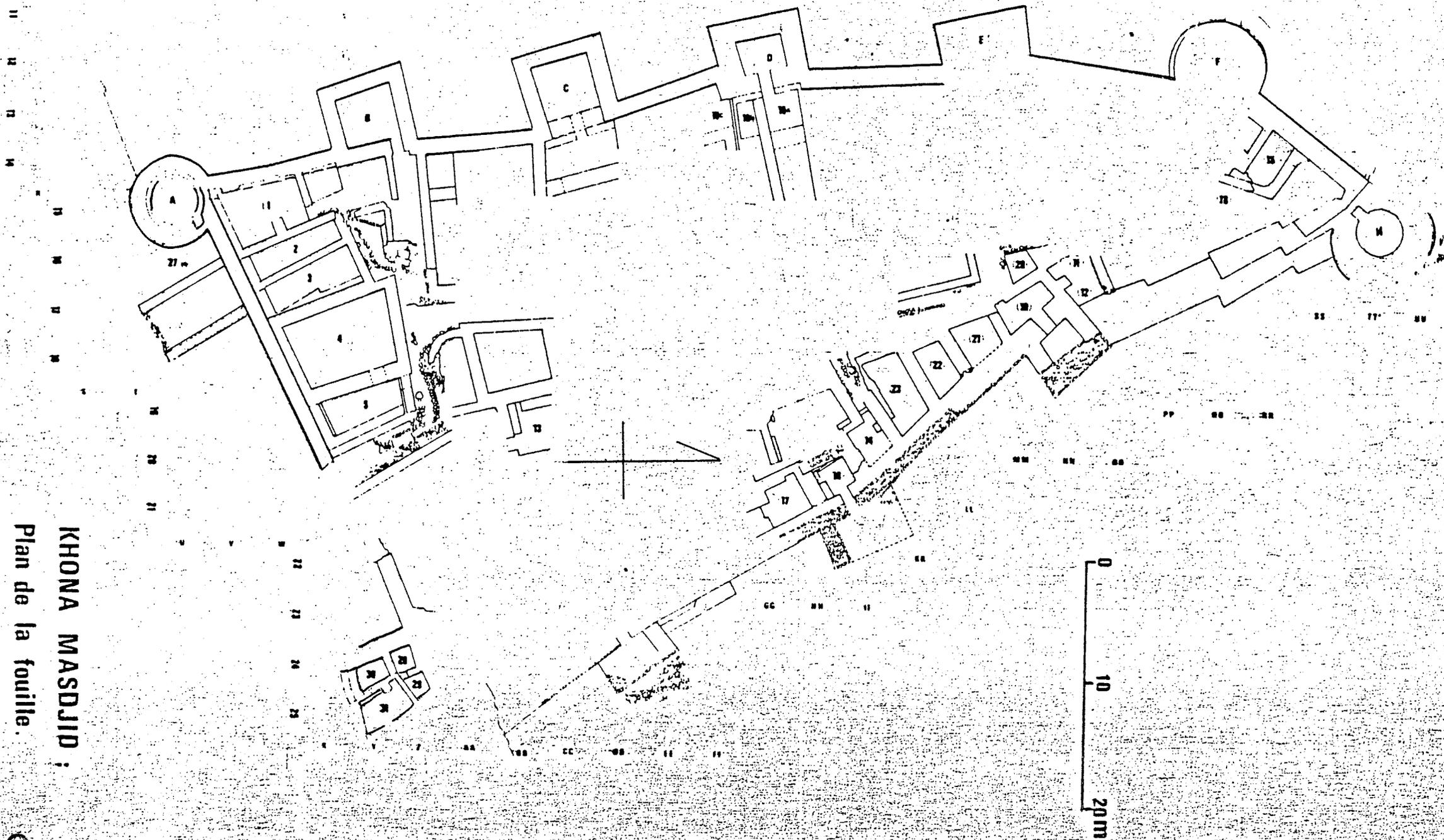
テペ=スキャンダル
平面圖

0 100m

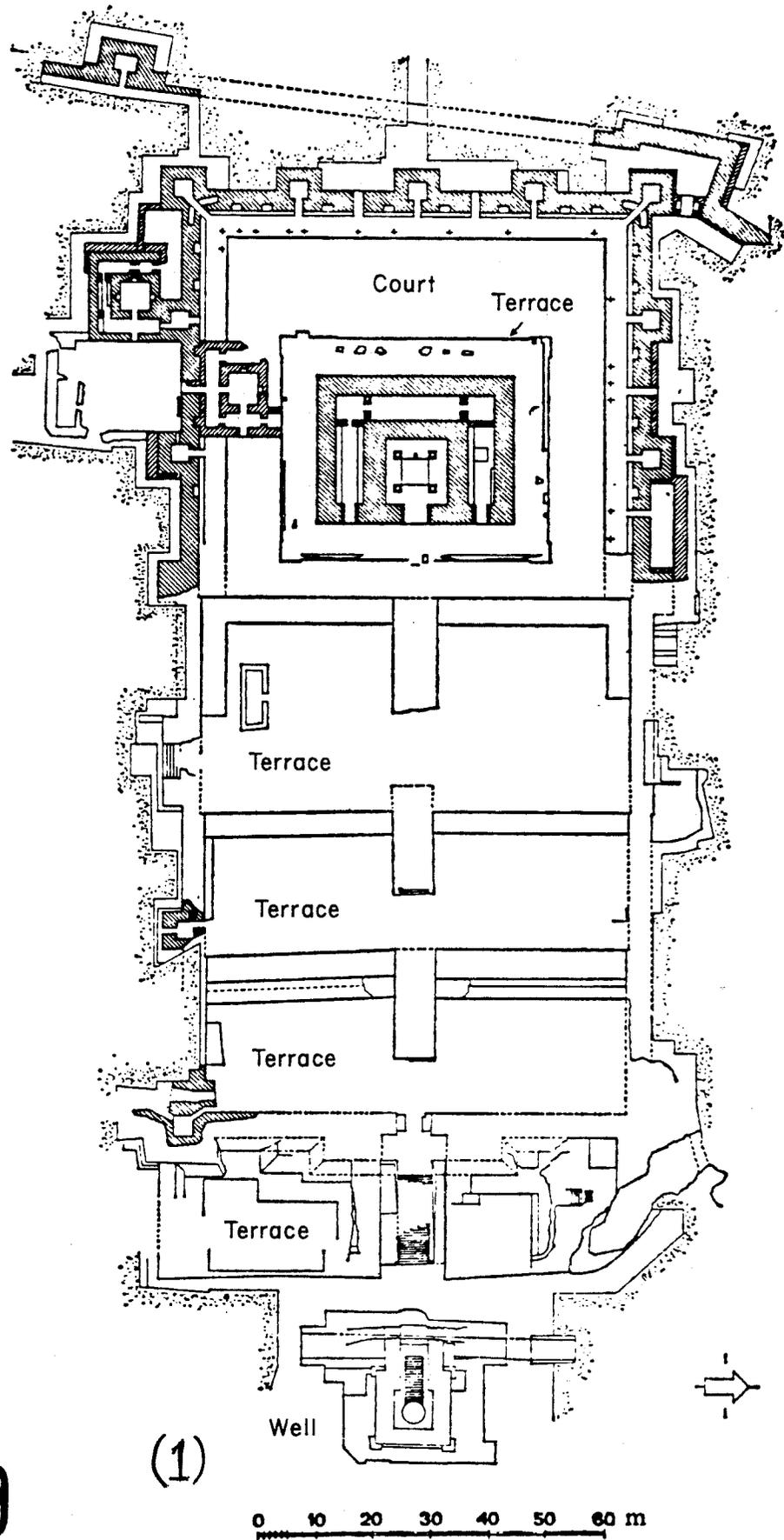


SHOTORAK :
 PLAN D'ENSEMBLE DES FOUILLES

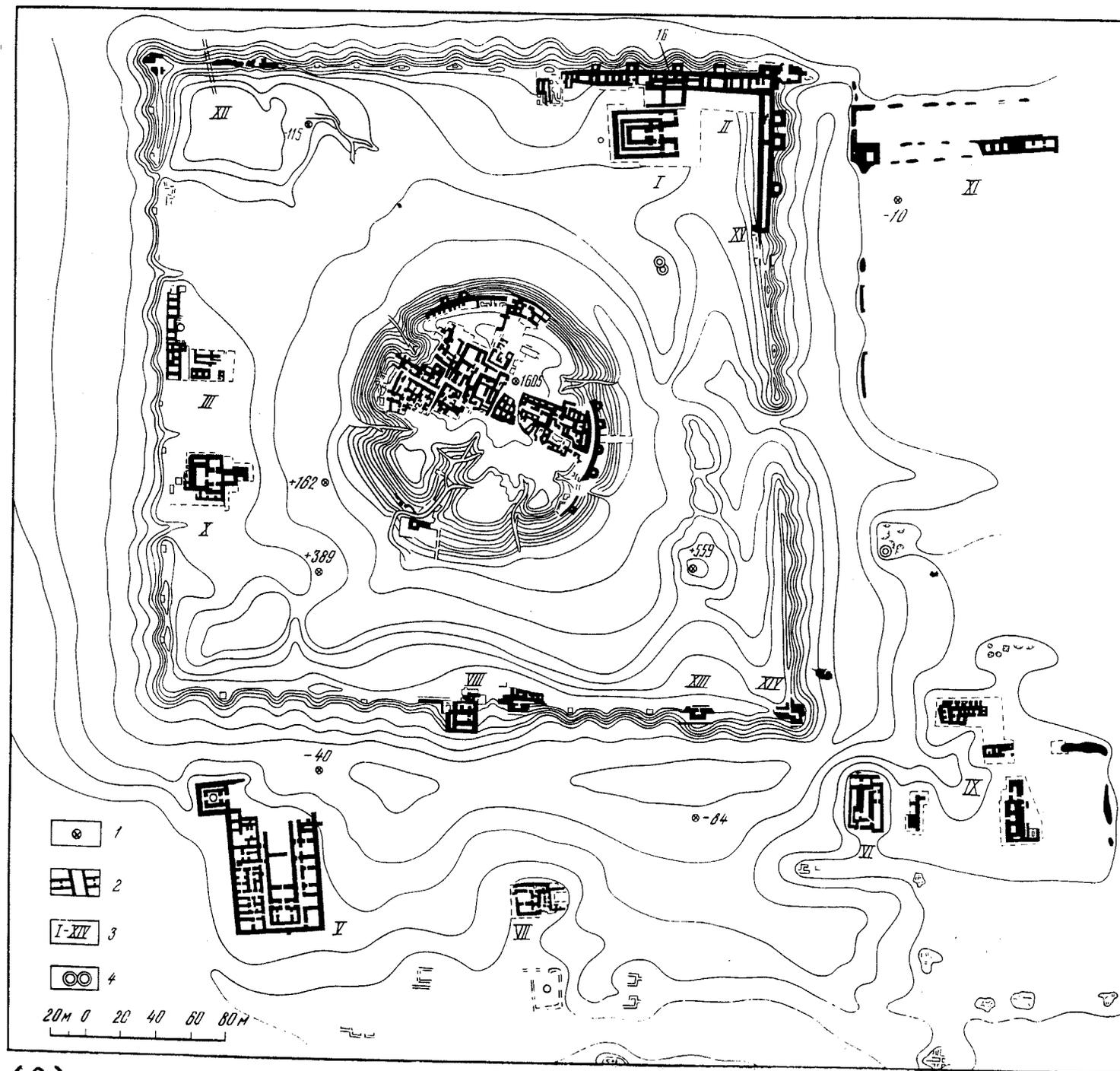
37 ショトラク平面圖



KHONA MASJID :
Plan de la fouille.

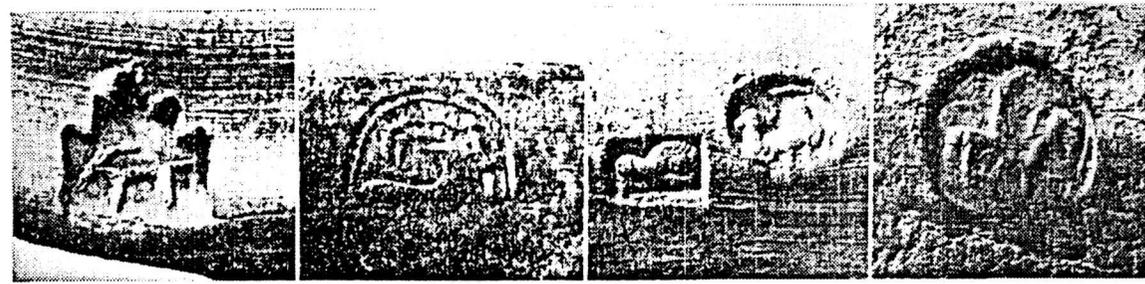


(1)



(2)

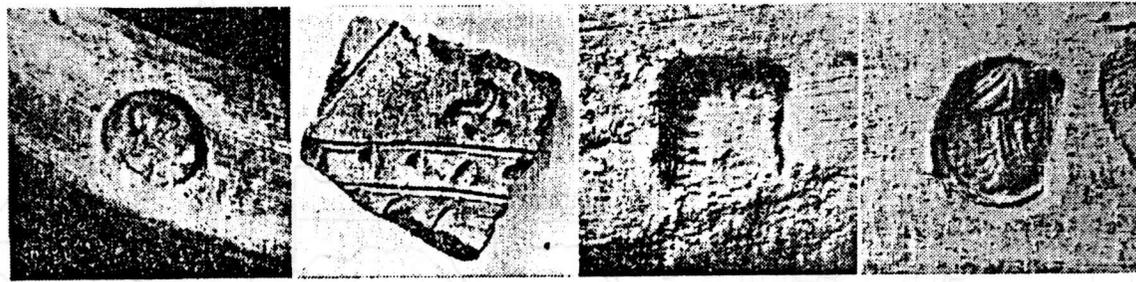
(1) スルフ=コタイル (2) テイルビルジン



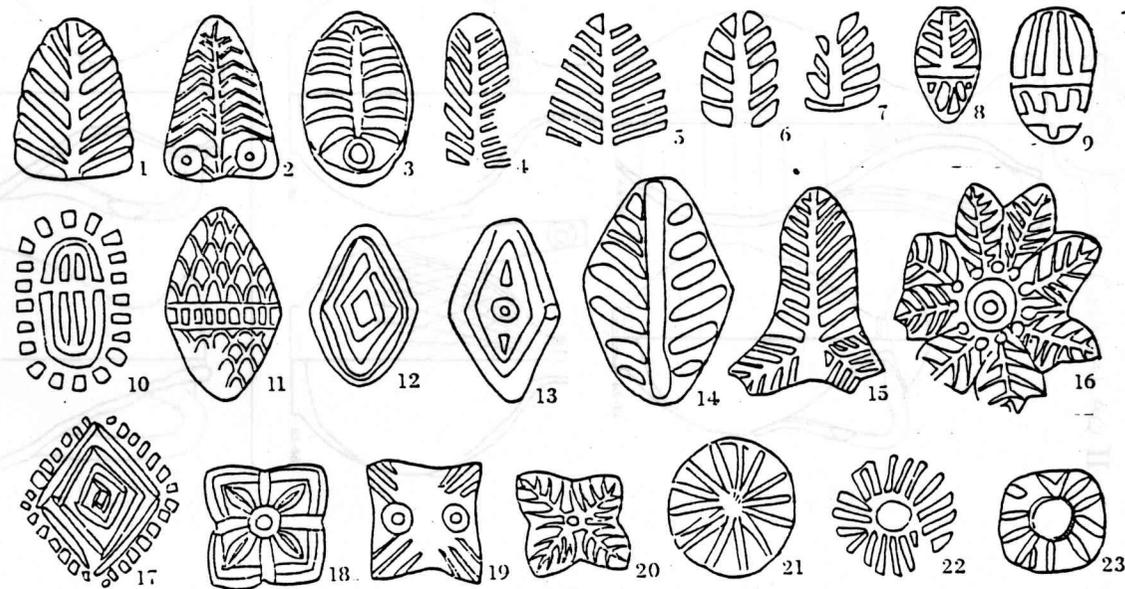
① ② ③ ④



⑤ ⑥ ⑦ ⑧



⑨ ⑩ ⑪ ⑫



印 紋

① - ③ チャカラク・テペ Ⅱ期

④ - ⑫ チャカラク・テペ Ⅲ期

1 - 3 ドゥルマン・テペ

11 ”

15, 16 ”

18 - 21 ”

23 ”

4, 5 バルフ

7, 8 ”

10 ”

12 ”

14 ”

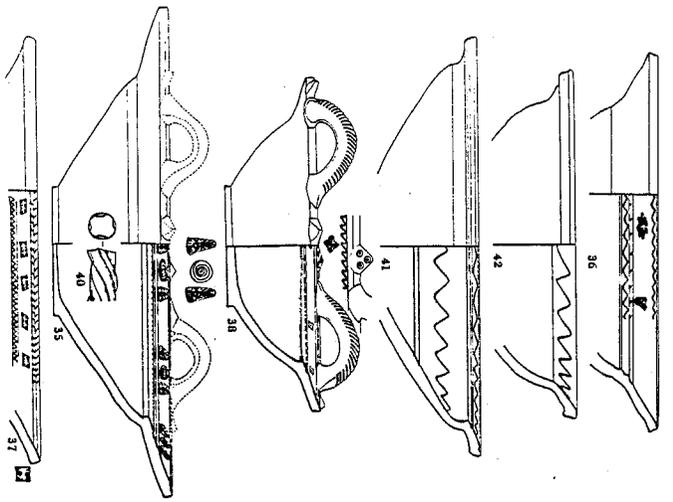
17 ”

22 ”

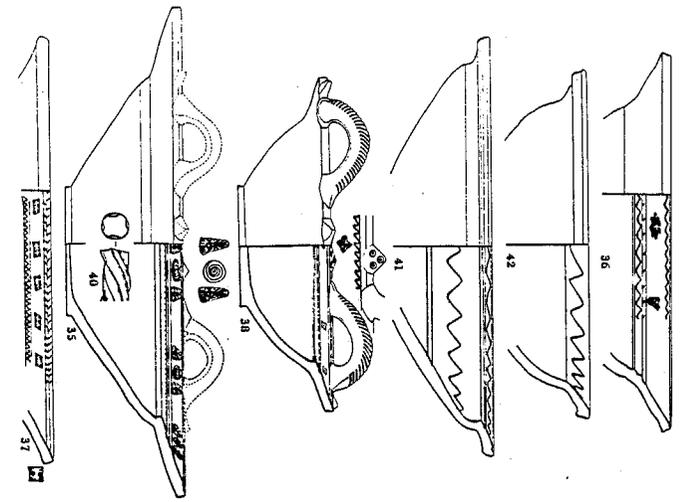
9 カラ・テペ (テルメズ)

13 ”

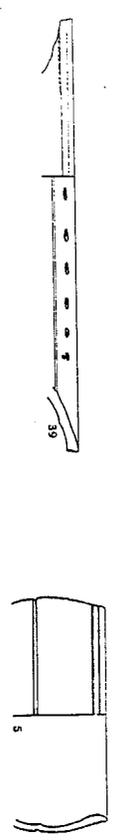
6 シャフレ = バヌー (フルム)



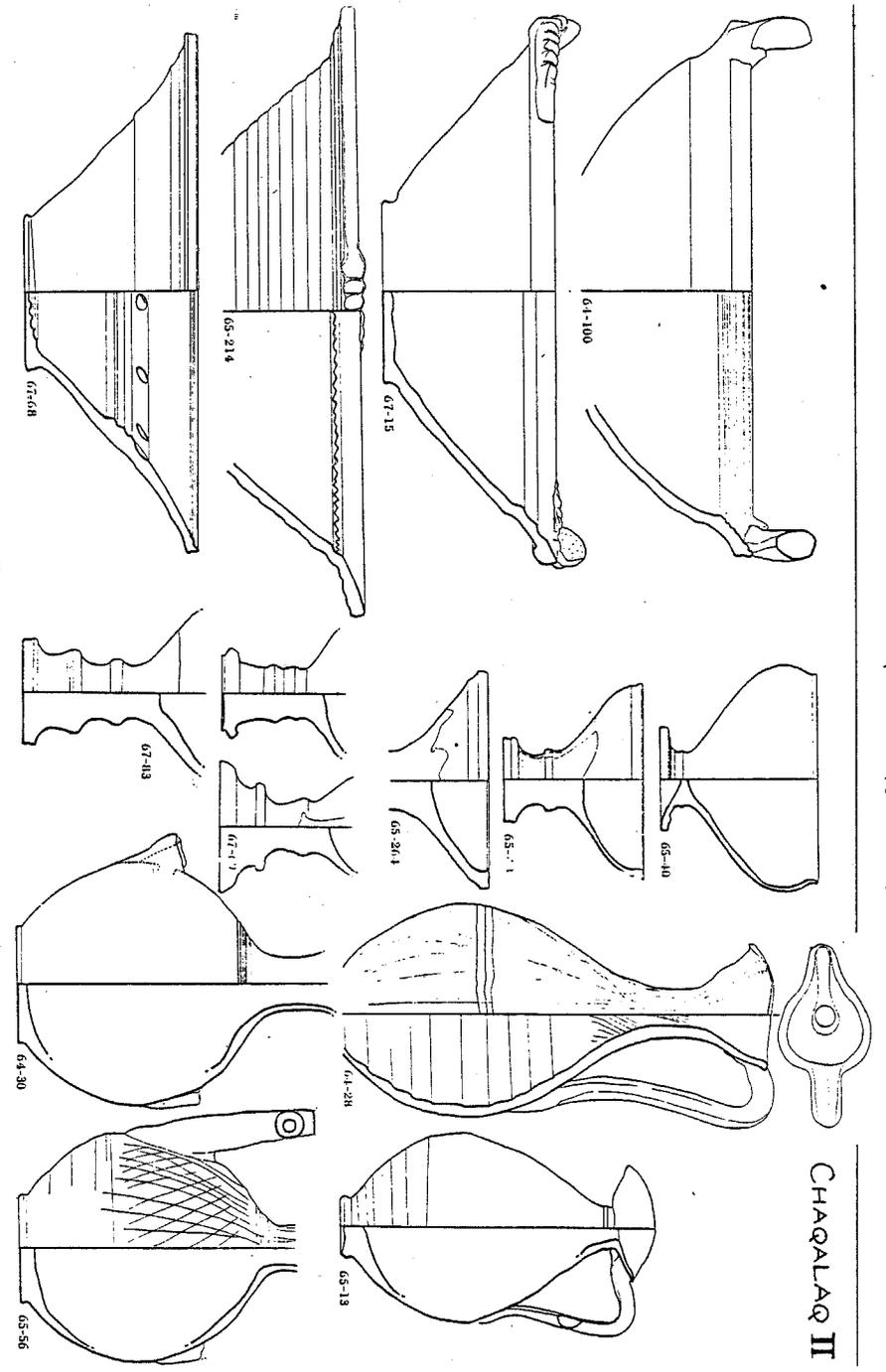
 36
 41
 42
 55



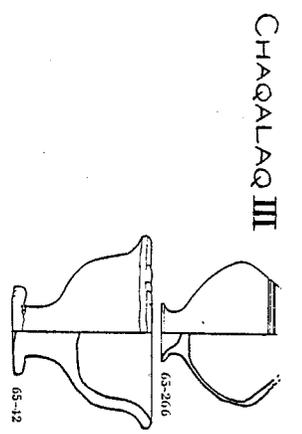
DURMAN III



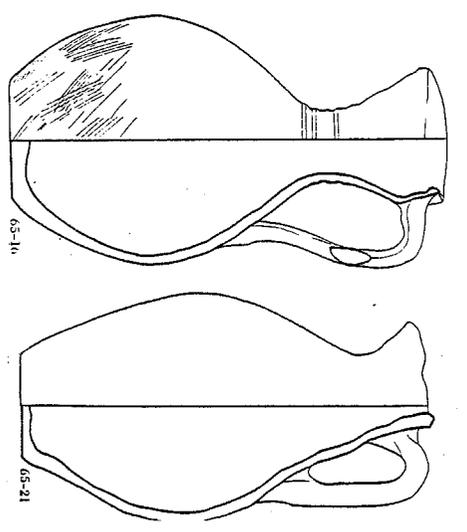
DURMAN IV



CHAQALAQ II



CHAQALAQ III



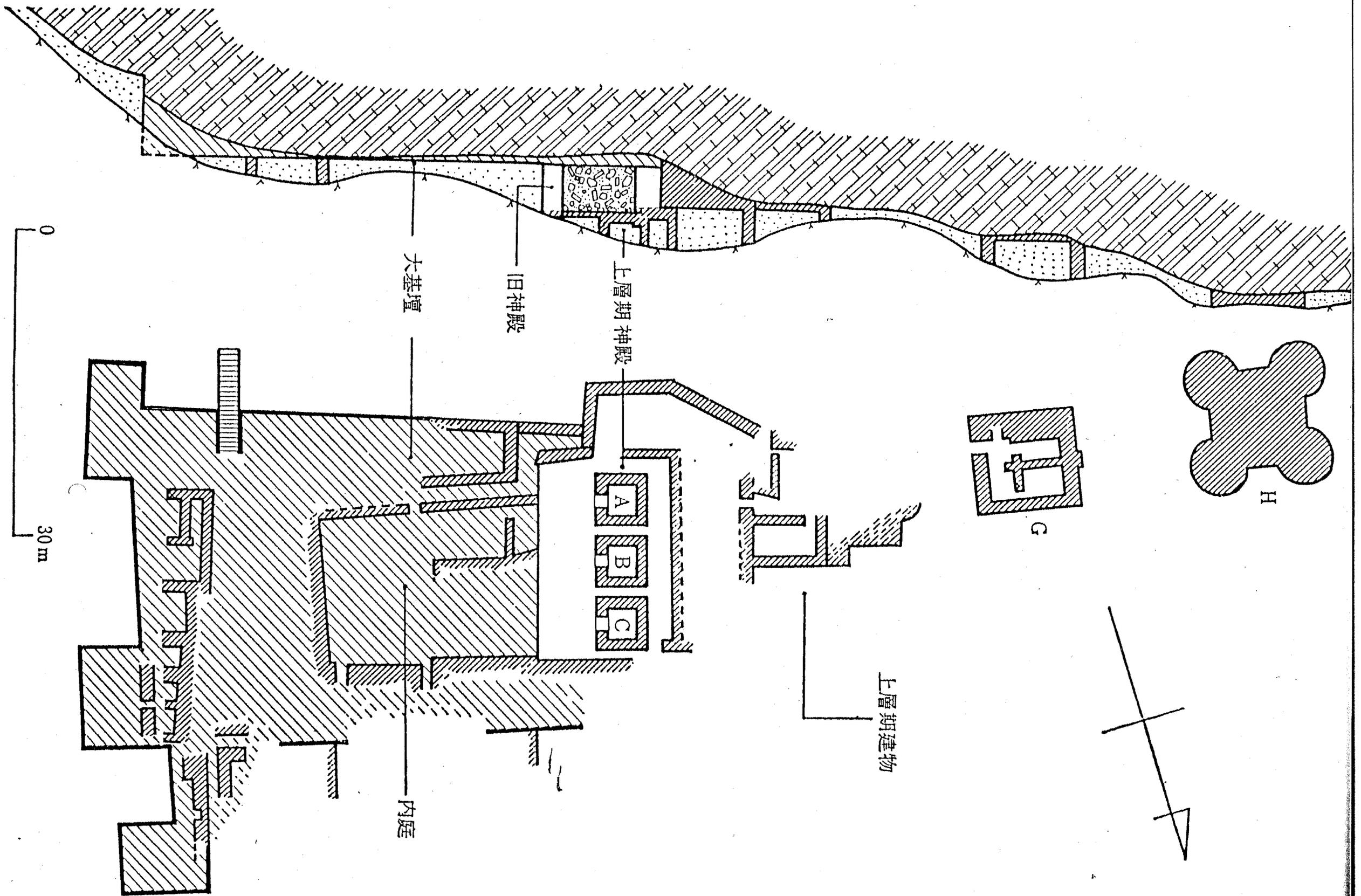
42 (本文中にあり) 859頁参照

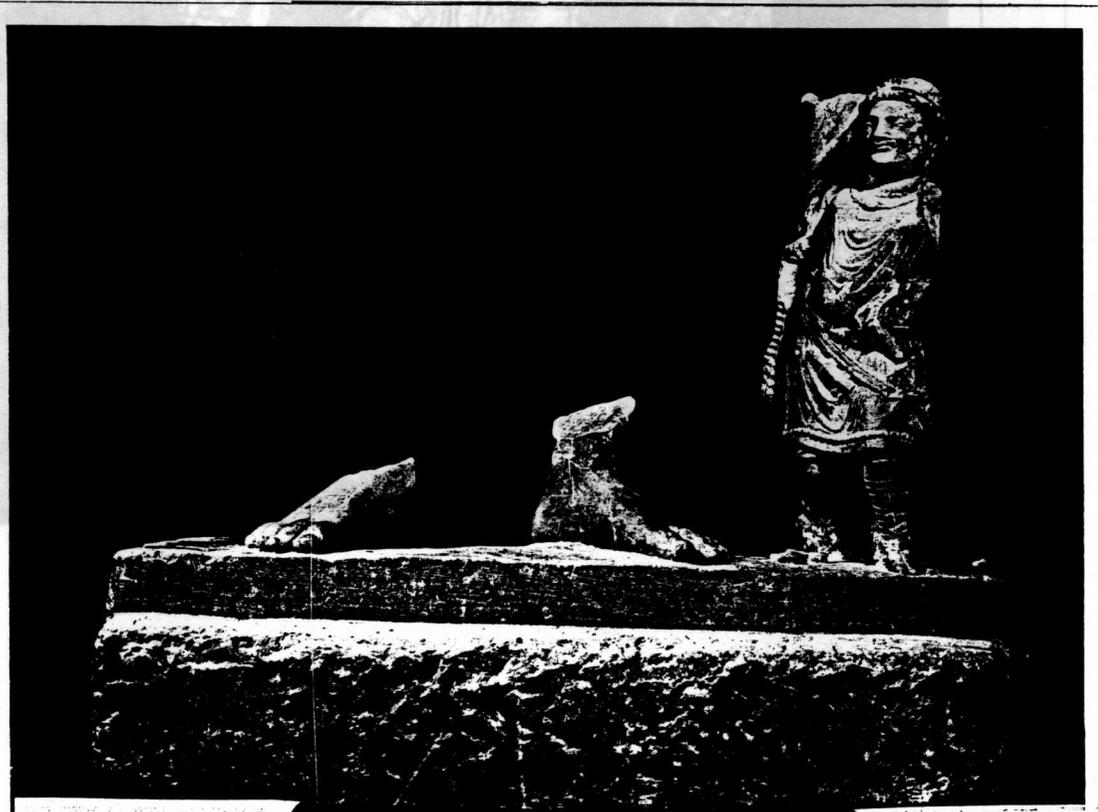
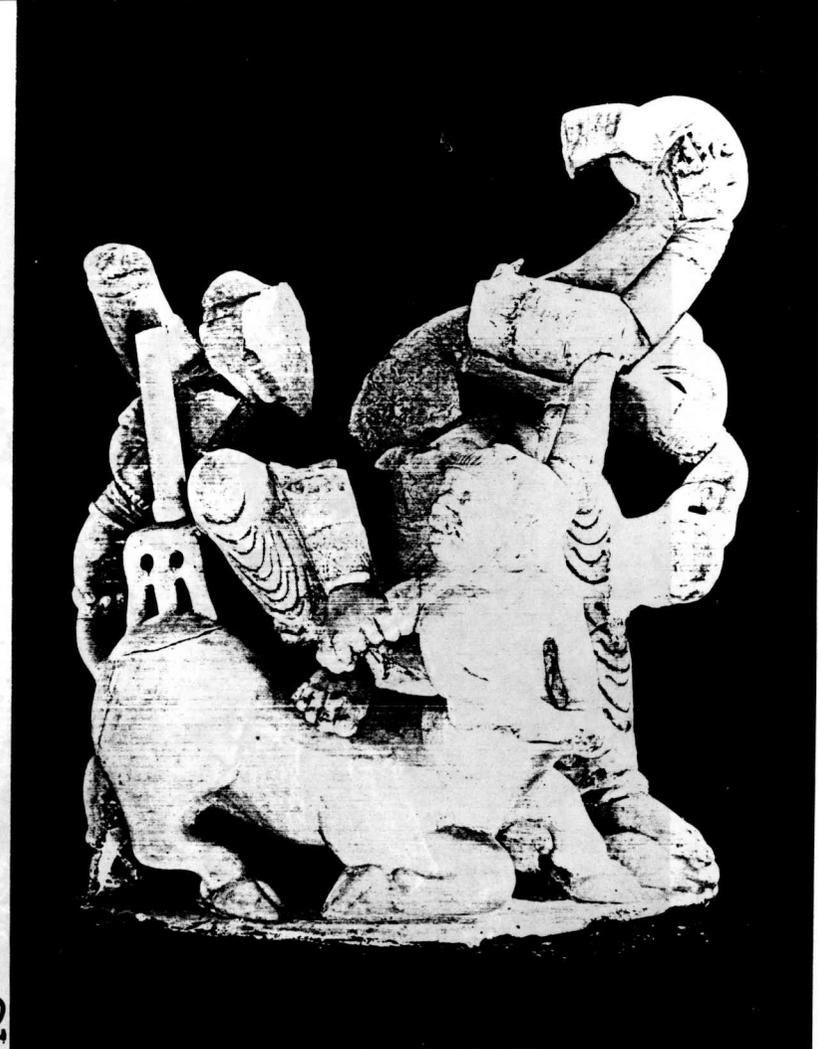
	ANIMAL	ROSETTE	PLANT
BEGRĀM BAZAR			
SAKA			
TEPE MARANJĀN			
SHOTORAK			
KOHI MORI			
TEPE SKANDAR			

The Stamped Decorations on Pottery in the Kāpīsi-Kābul Region (Scale 1:3)

玄奘の就學狀況

1	阿毘達磨大毘婆沙論	罽 曷 Bālik, 迦濕彌羅 Kāśmīra
2	俱舍論	" "
3	順正理論	" "
4	藏異門足論	摩揭陀, 伊爛摩鉢底 Magadha, Irinaparvata
5	集異門足論	至那僕底 Cinabhukti
6	法蘊足論	Kāśmīra
7	施設身類論	" "
8	識品界論	" "
9	" "	" "
10	隨事分毘婆沙論	林邑補羅 Matipura
11	辯真論(薩婆部恒密三轉論)	闍爛達那 Jalandhara
12	隨量部	Matipura
13	說一切有部	羯若鞠闍 Kanya Kubja
14	經量部	穿祿勒那 Śrughna
15	Aiyavama	Kanya Kubja
16	大正量部	跋那羯鞠達 Dhānyakataka,
17	大部	鉢伐多 Parvata
18	大正量部	鉢伐多 Parvata
19	大正量部	Cinabhukti, Magadha
20	大正量部	(Nalanda)
21	大正量部	Magadha
22	大正量部	Magadha
23	大正量部	" (林林山勝軍)
24	大正量部	" "
25	大正量部	" "
26	大正量部	" "
27	大正量部	" "
28	大正量部	Parvata
29	大正量部	" "
30	大正量部	" "
31	大正量部	跋達 Takka,
32	大正量部	Takka
33	大正量部	Cinabhukti
34	大正量部	Kāśmīra, Magadha, Irinaparvata
35	大正量部	" "
36	大正量部	" "
37	大正量部	吠舍釐 Vaisāli, 南憍薩羅 Kosala
1	Bālik	1.
2	Cinabhukti	4, 19, 33.
3	Dhānyakataka	17.
4	Irinaparvata	3, 34, 36.
5	Jalandhara	12.
6	Kāśmīra	1, 2, 3, 5~10, 34, 35.
7	Kanya Kubja	14, 16.
8	Magadha	3, 19, 20~27, 30, 31, 34, 35, 36.
9	Matipura	11, 13.
10	Parvata	18, 28, 29.
11	Śrughna	15.
12	Takka	31, 32.
13	Vaisāli	37.
14	South Kosala	36.





大理石像 (1)

46

1

2

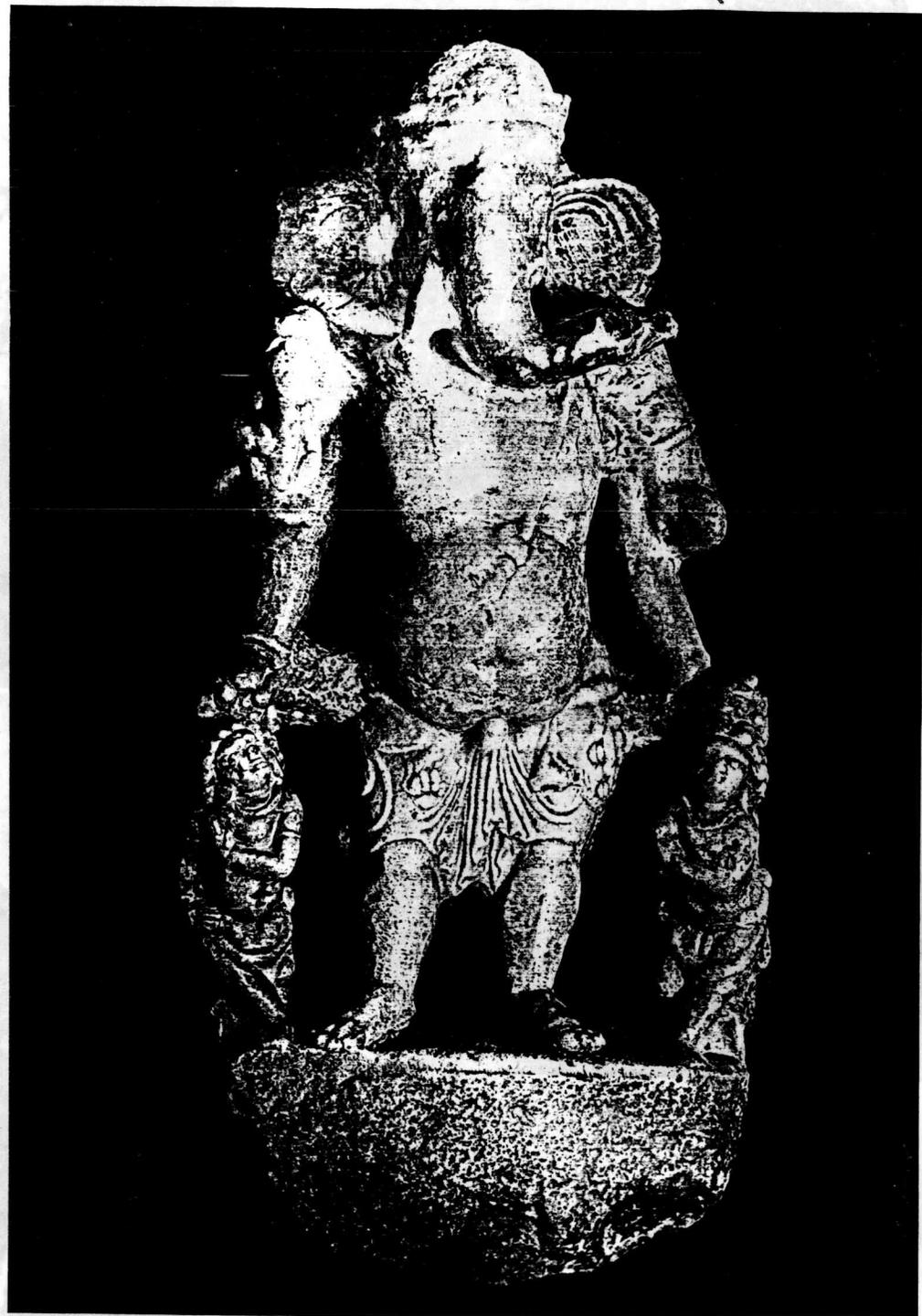
3

4

5

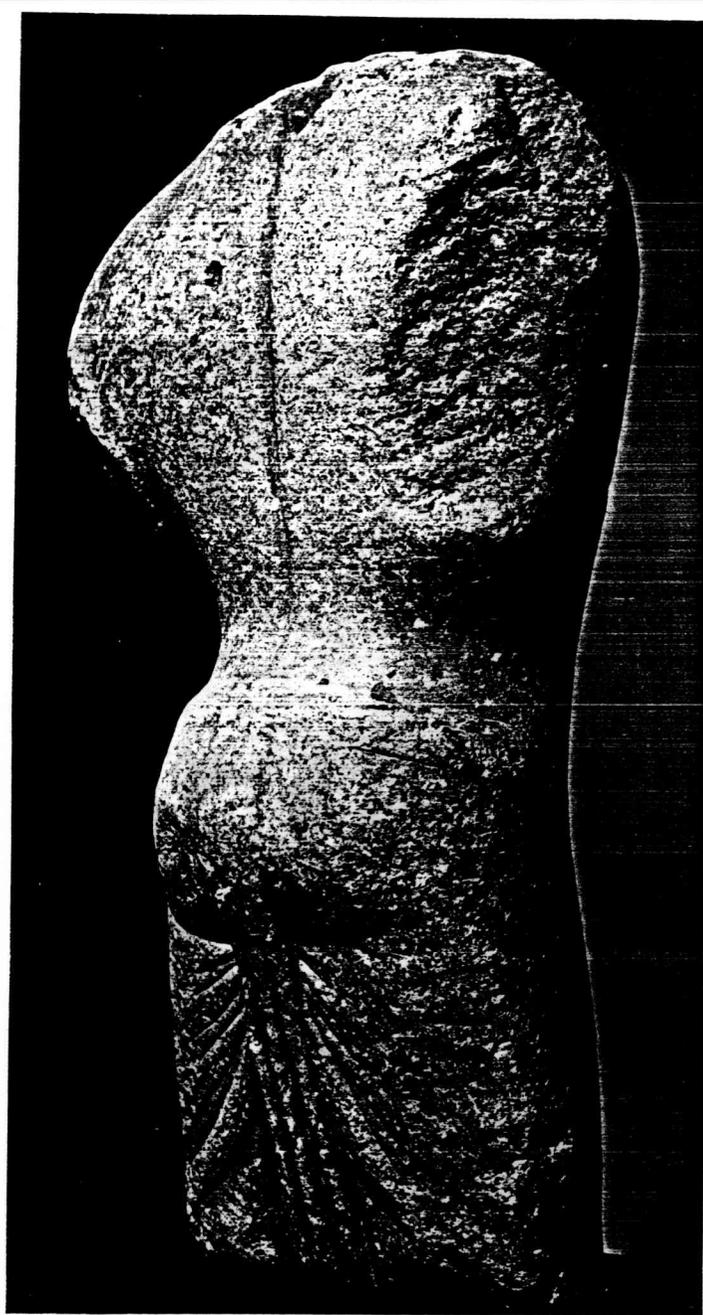


1



2

47 大理石像 (2)



1



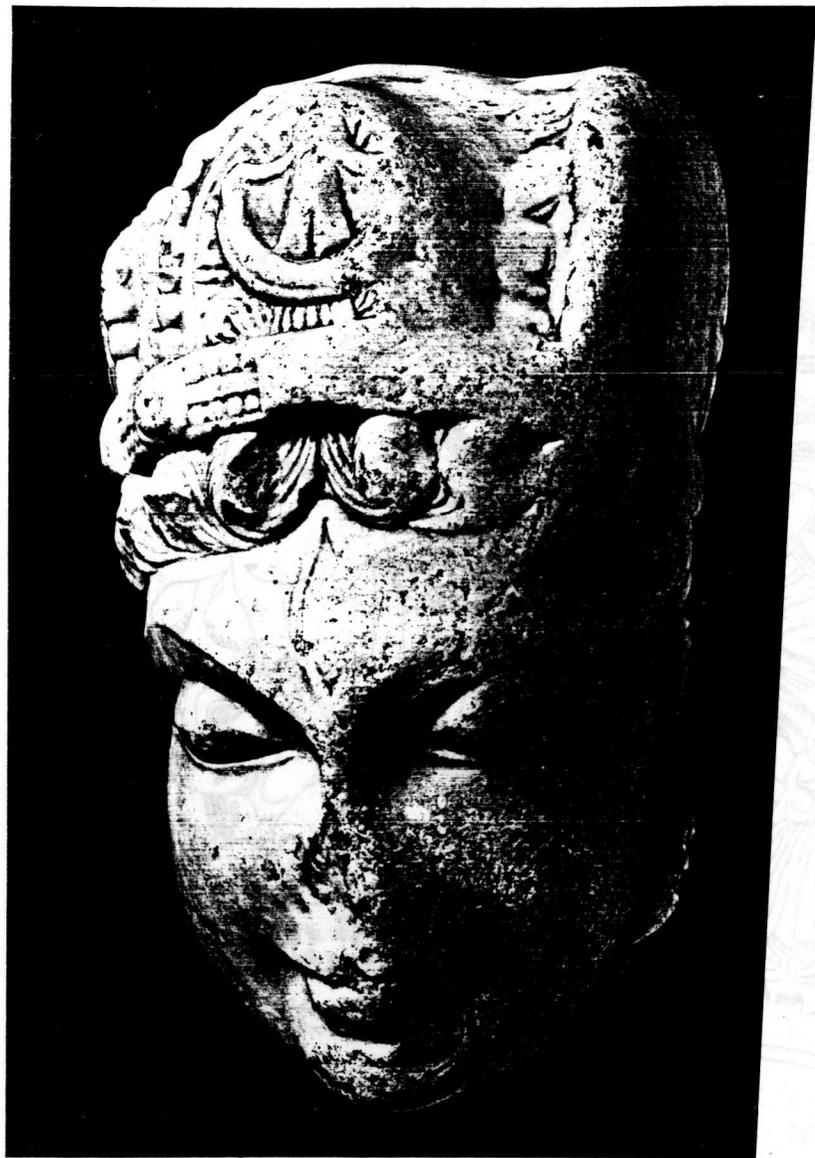
2



3



4



1



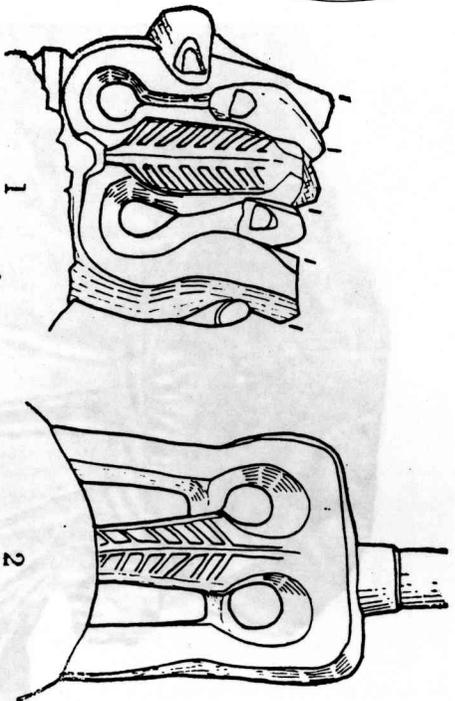
2.



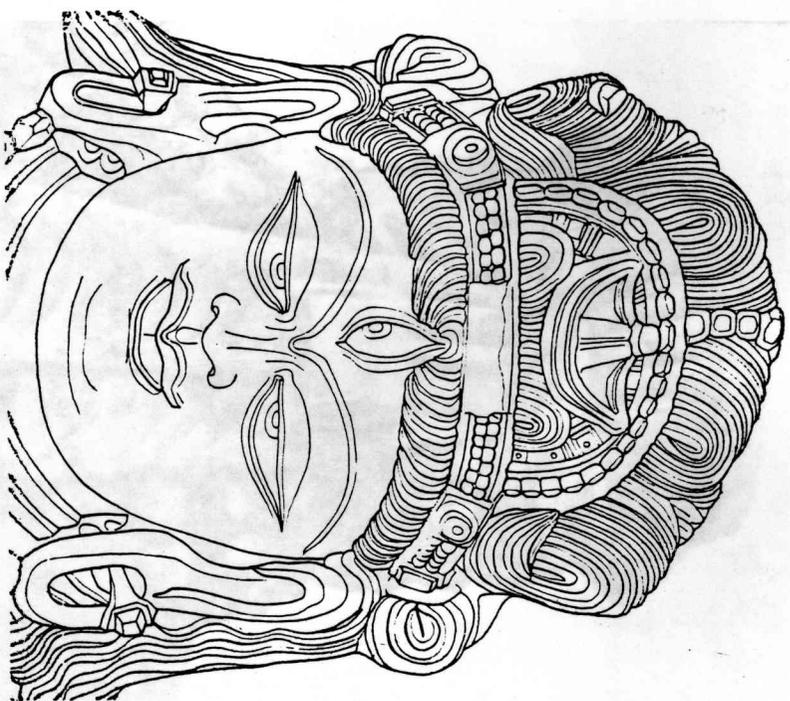
3.



50 ウマ-マハ-シュヴァラ並坐像



Trisūla (1) Umāmahēśvara, (2) Durgā
from Gardez.



3 Crowned head of the Tepe Skandar
Mahēśvara.



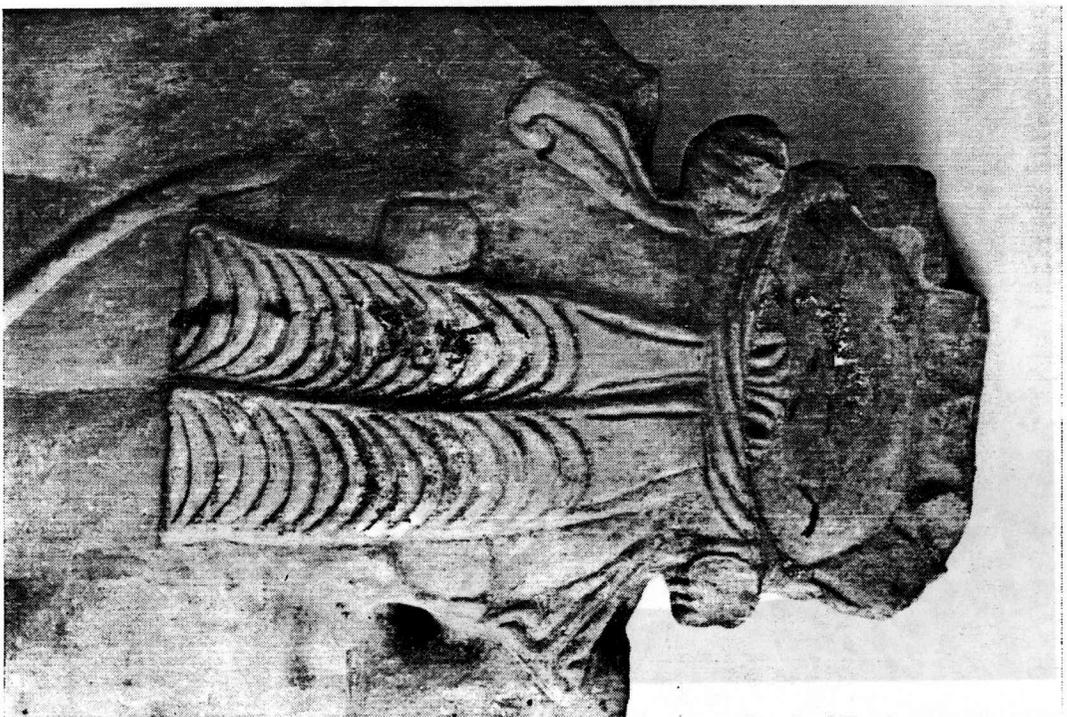
4 Crown of the Gardez Śiva.



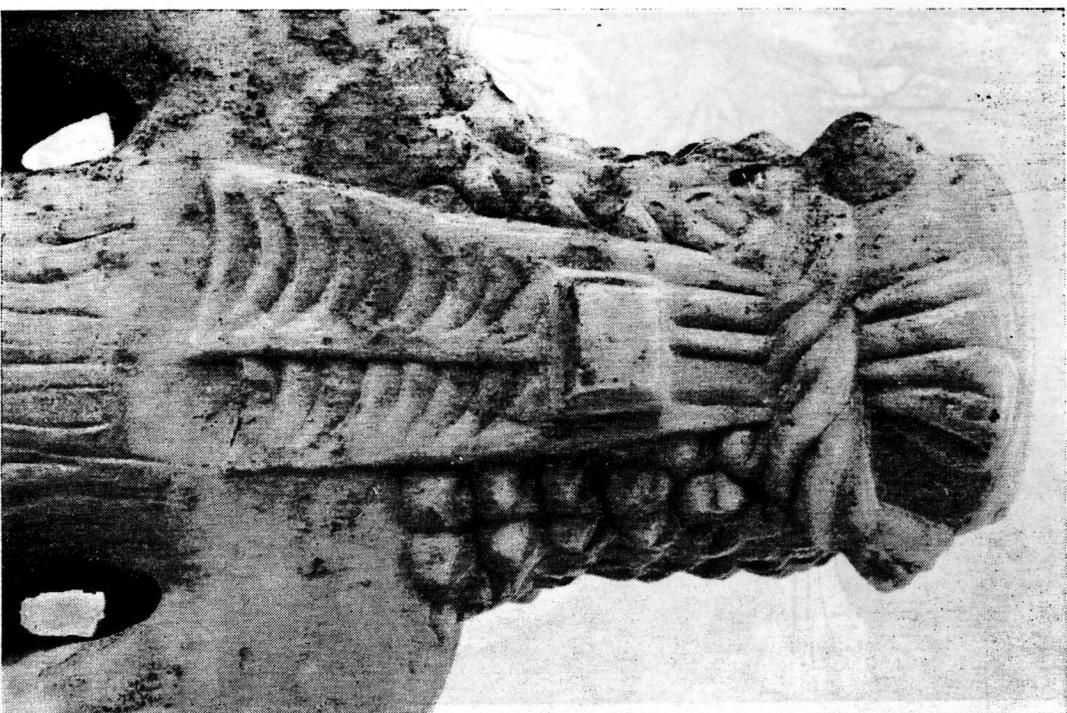
5 Crown of the Gardez Gaṇeśa.



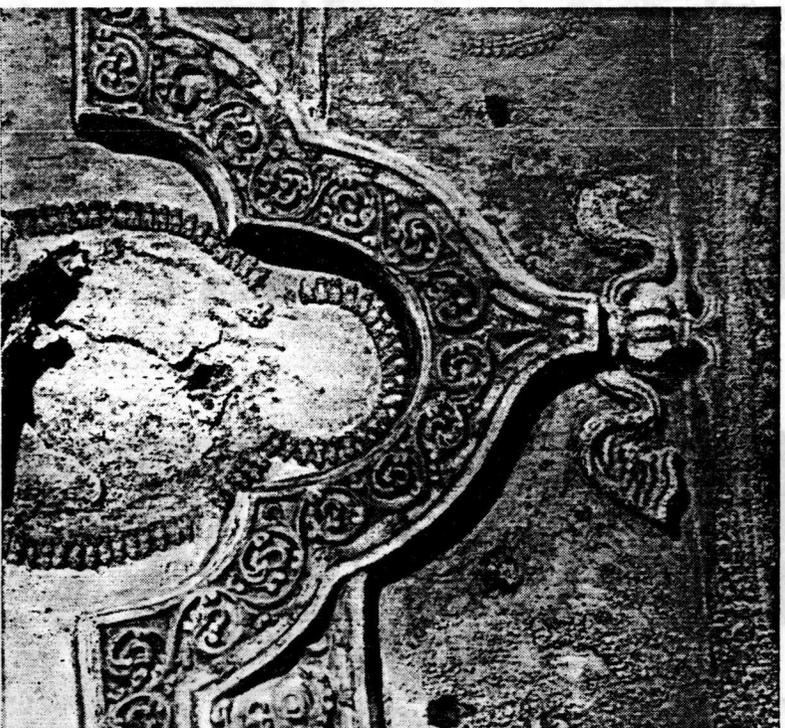
6 Crown of the Khair Khānah Sūrya.



1 Ribbons of the Gardez Ganeśa.

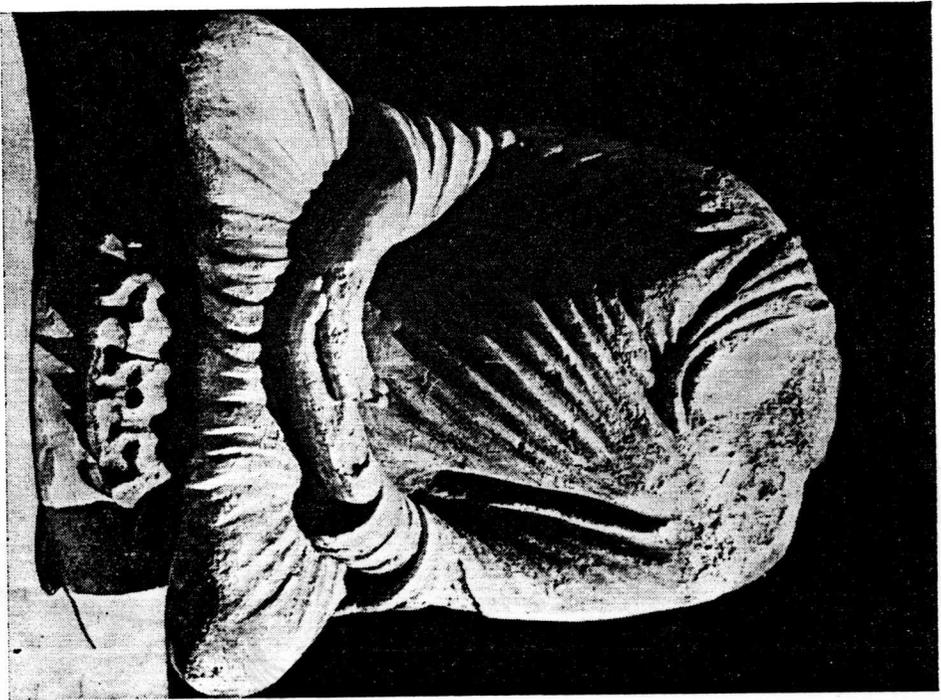


2 Ribbons of the Khair Khānah Sūrya.



3 - A trilobate arch decorated with a scroll and ribbons, Cave I, Bāmiyān.

4 - Torso of a head with ribbon; from the same site as the arch above.
British Museum, London



1 Seated Buddha, clay; from Cave G. Bamiyān.



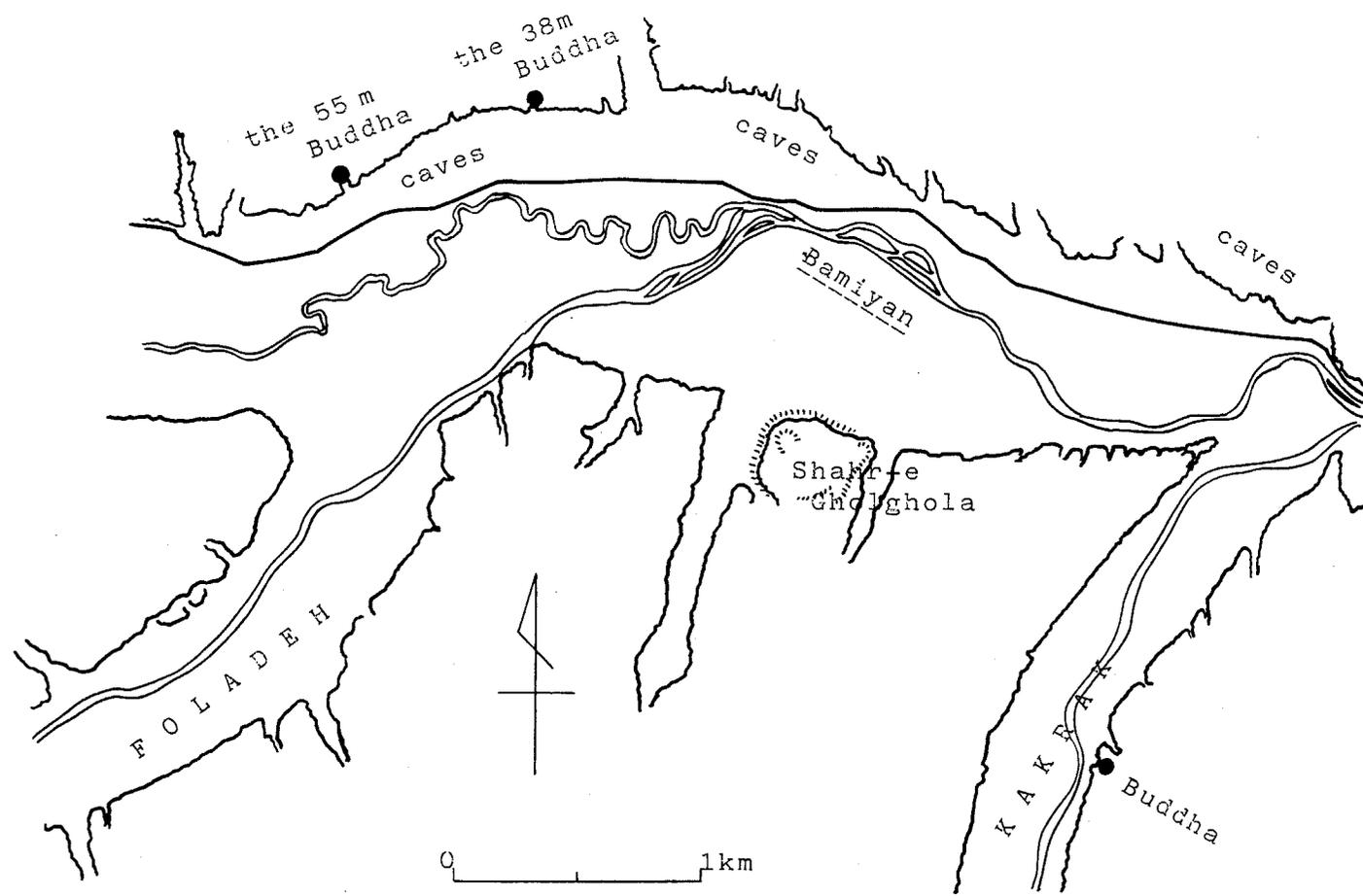
2 A Bodhisattva; from Niche E, Fondukistan. National Museum of Afghanistan, Kabul.



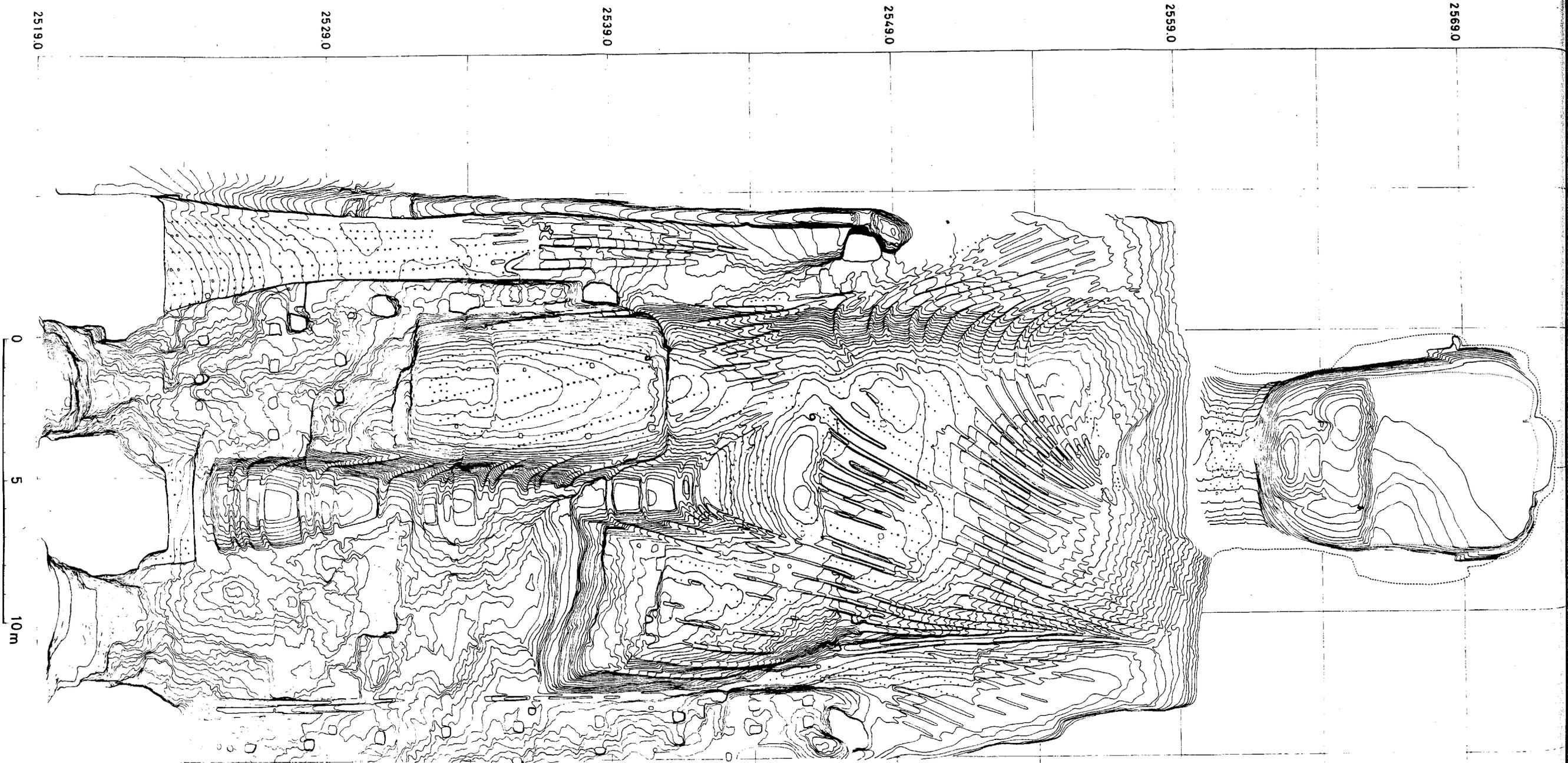
3 - Bodhisattva with ribbons (detail); from Niche D, Fondukistan. Musée Guimet, Paris.



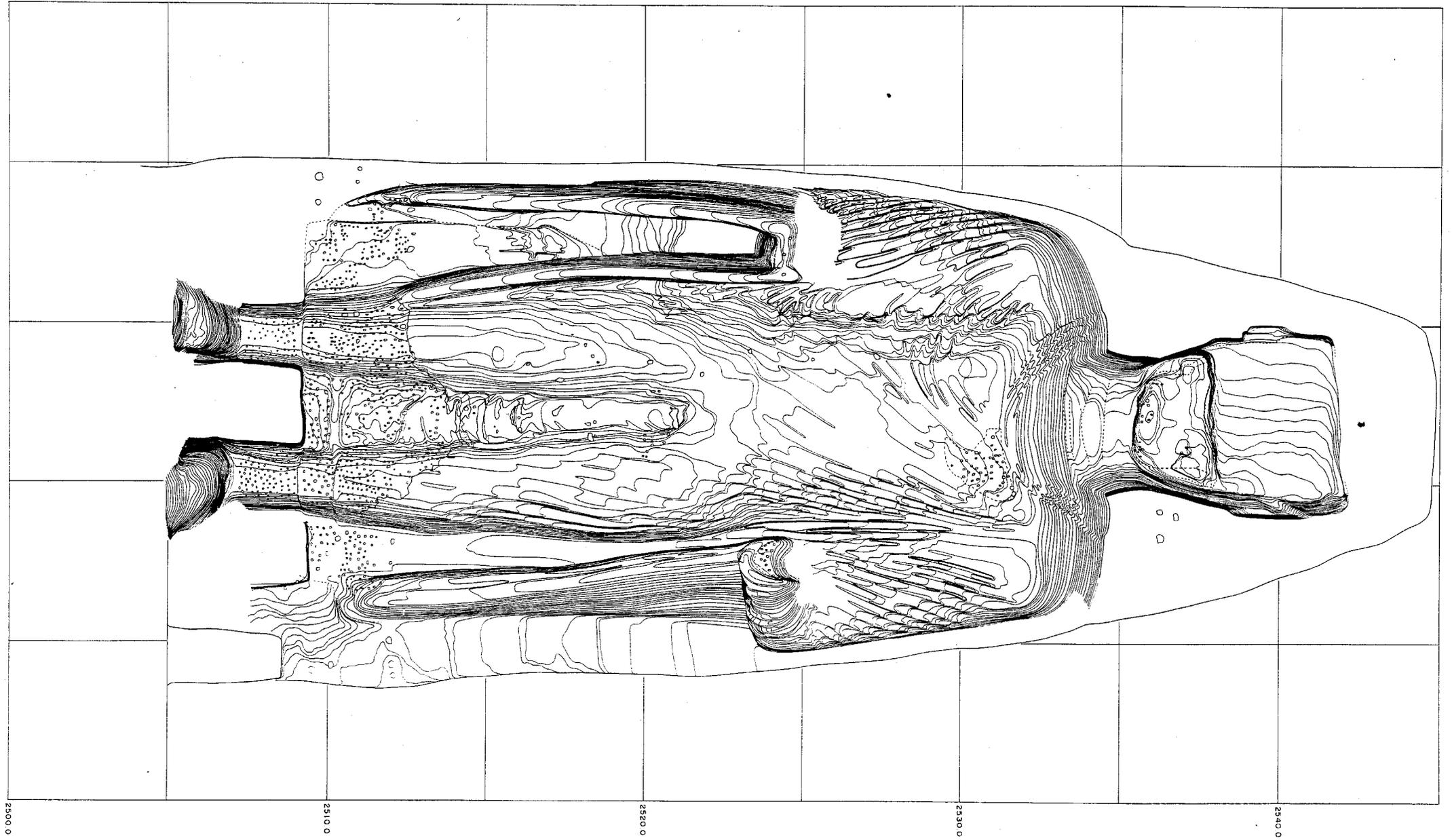
4 - Terracotta head with ribbon; from Uškar. British Museum, London.



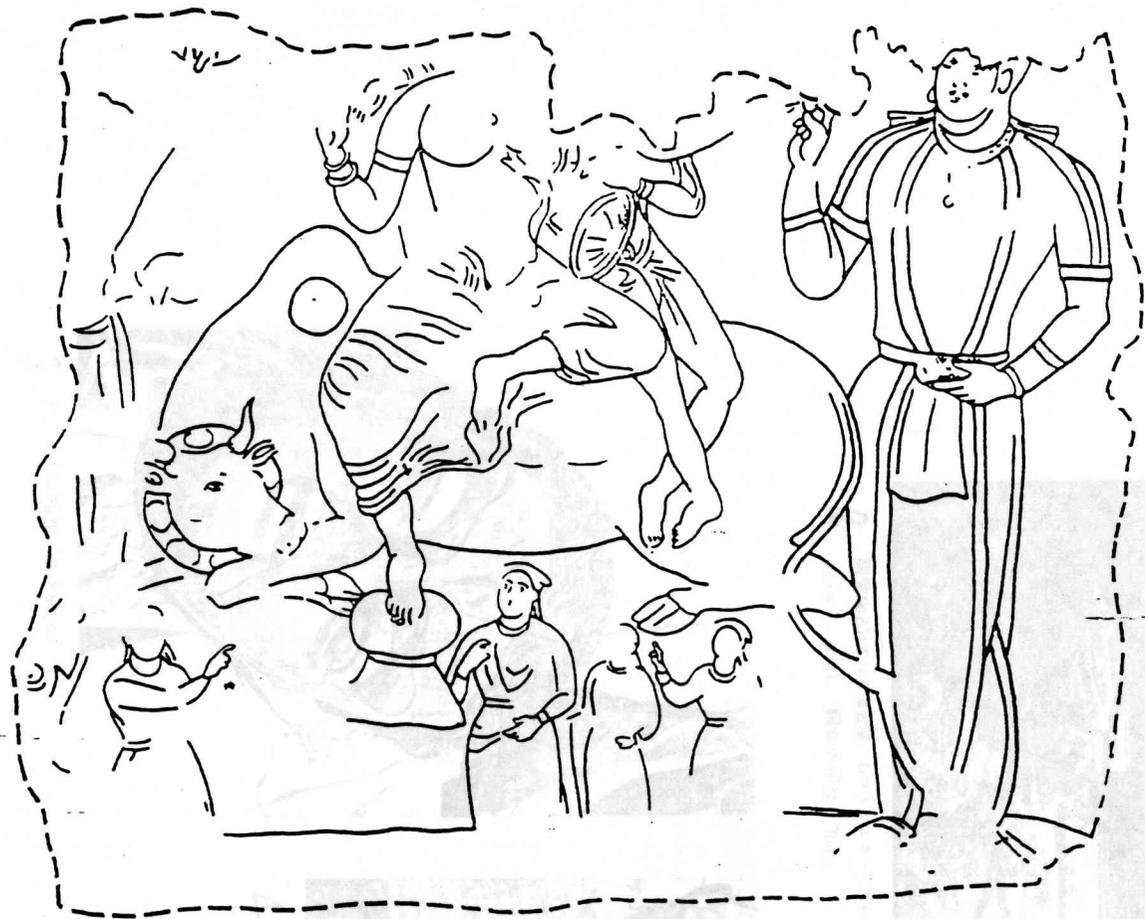
54 バミヤーン溪谷



55 バーマーン西大佛



56 バミヤーン東大佛



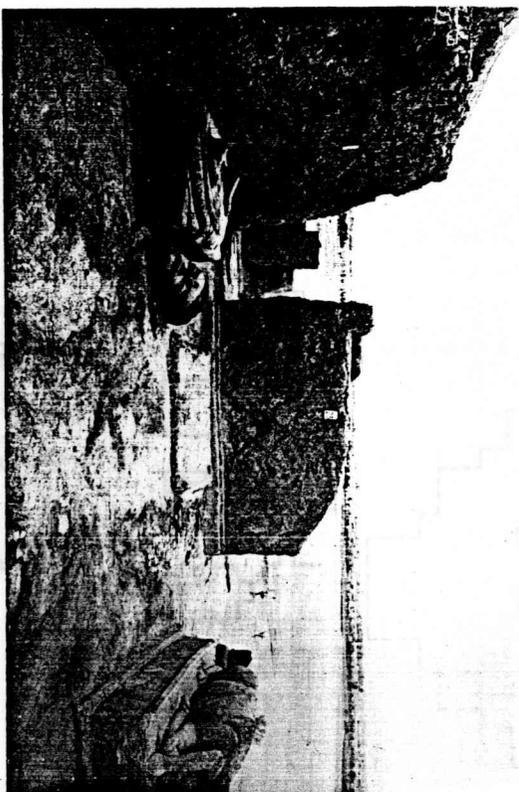
1. シヴァ=パールヴァティー像 (壁画, ダルベルジン=カザン=テペ出土, カーブル博物館)



2. パンチカ=ハーリティー像 (パシャール博物館)



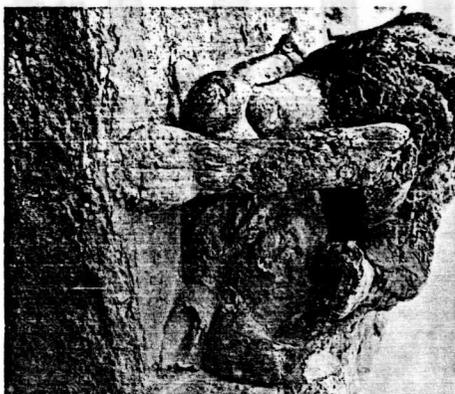
1 涅槃像



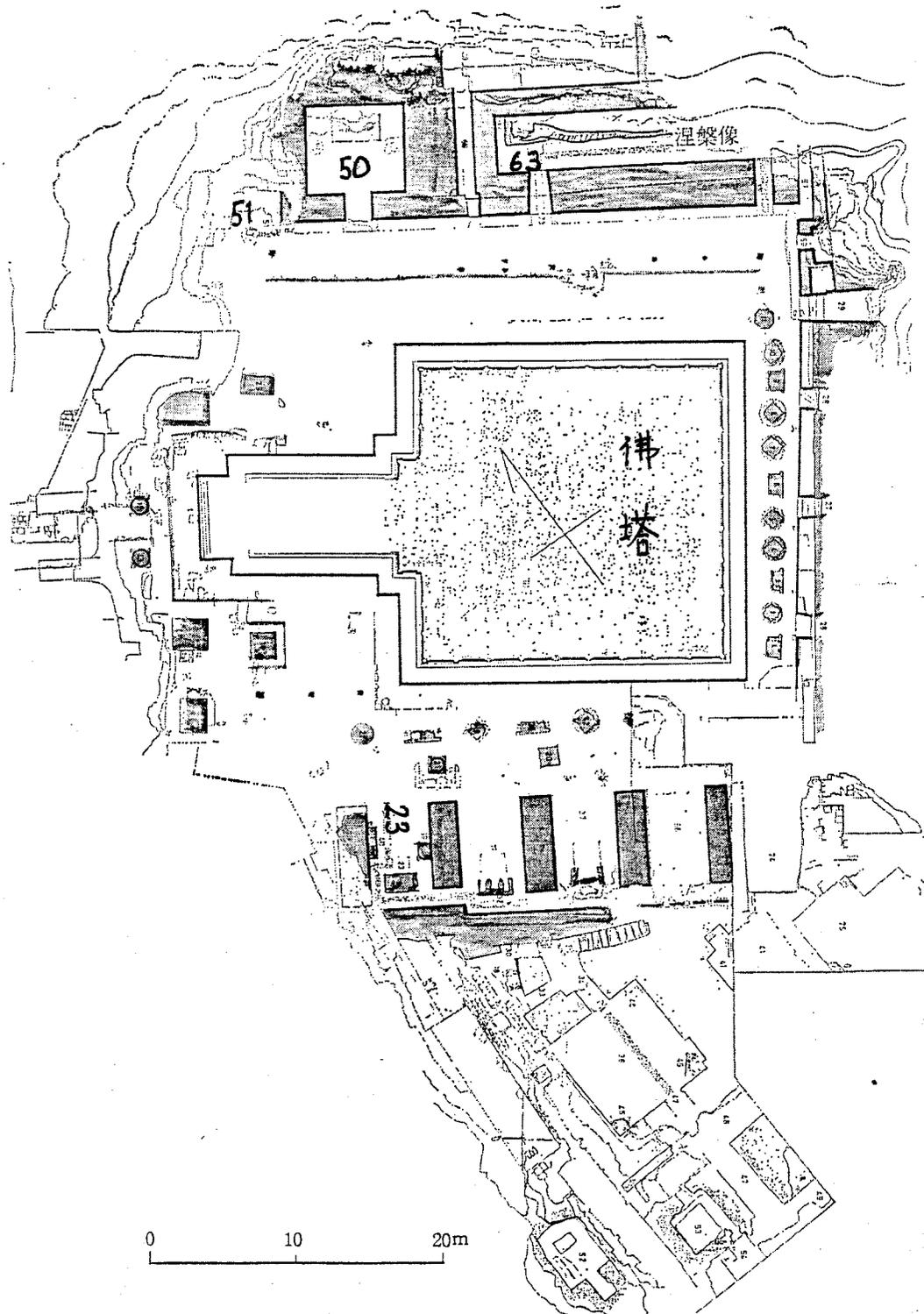
2 祠堂No.23(左は立像台座、右はフアルガー・グルーア(水牛)の一部。フアルガーの頭は床におちている——後期)。祠堂の幅は4.30m。



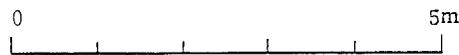
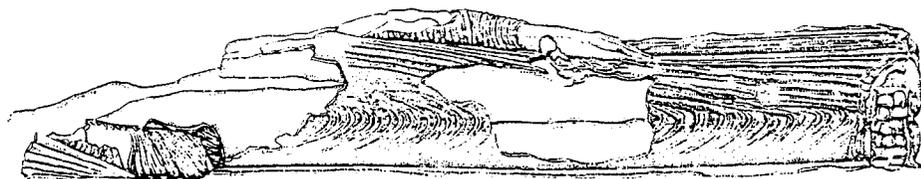
3 フアルガー—頭部。高さ64cm、



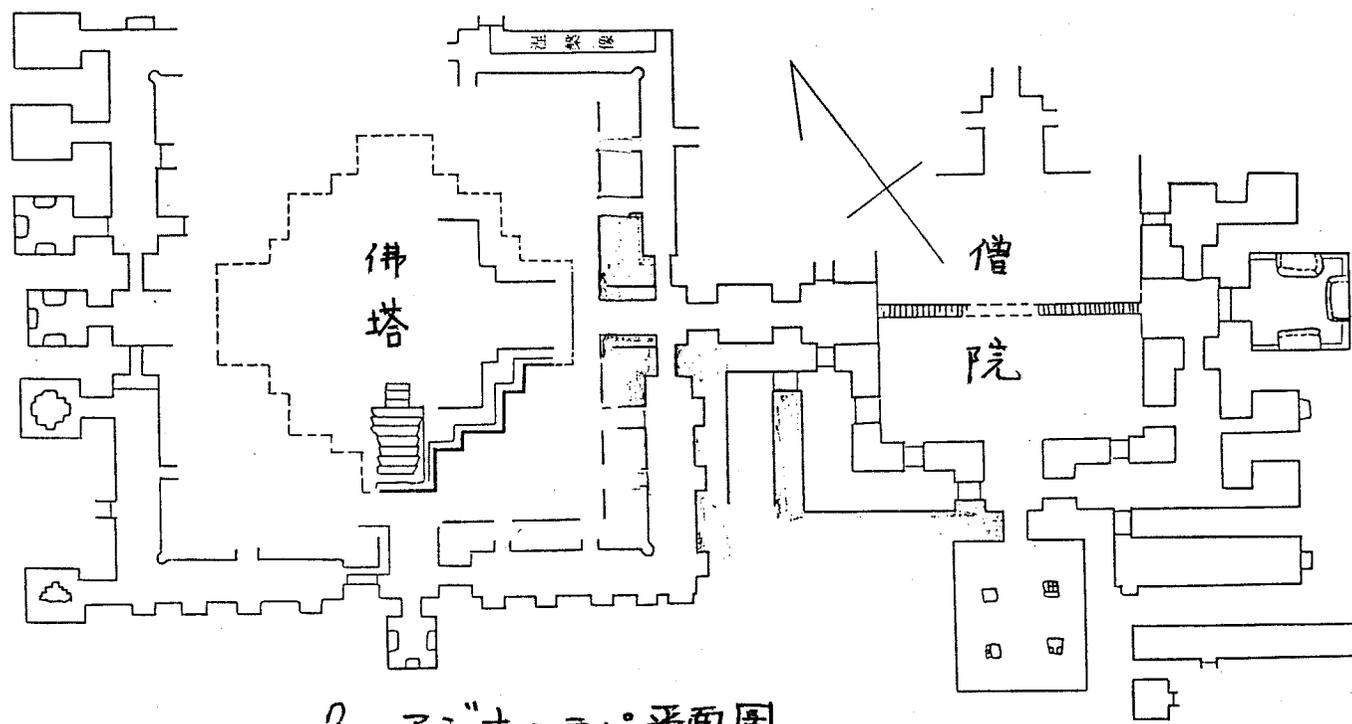
4 フアルガー=グルーアの水牛細部、



1. タバ=サルダール (一部) 平面圖



2. アジナ=テペ涅槃像測圖



3. アジナ=テペ平面圖
(原図縮尺なし)